

291.09-W28ㄣ



1200500732900

1.09

W28

水牧山若

行紀みかなみ

新編

日本

(3)

社 徳 養

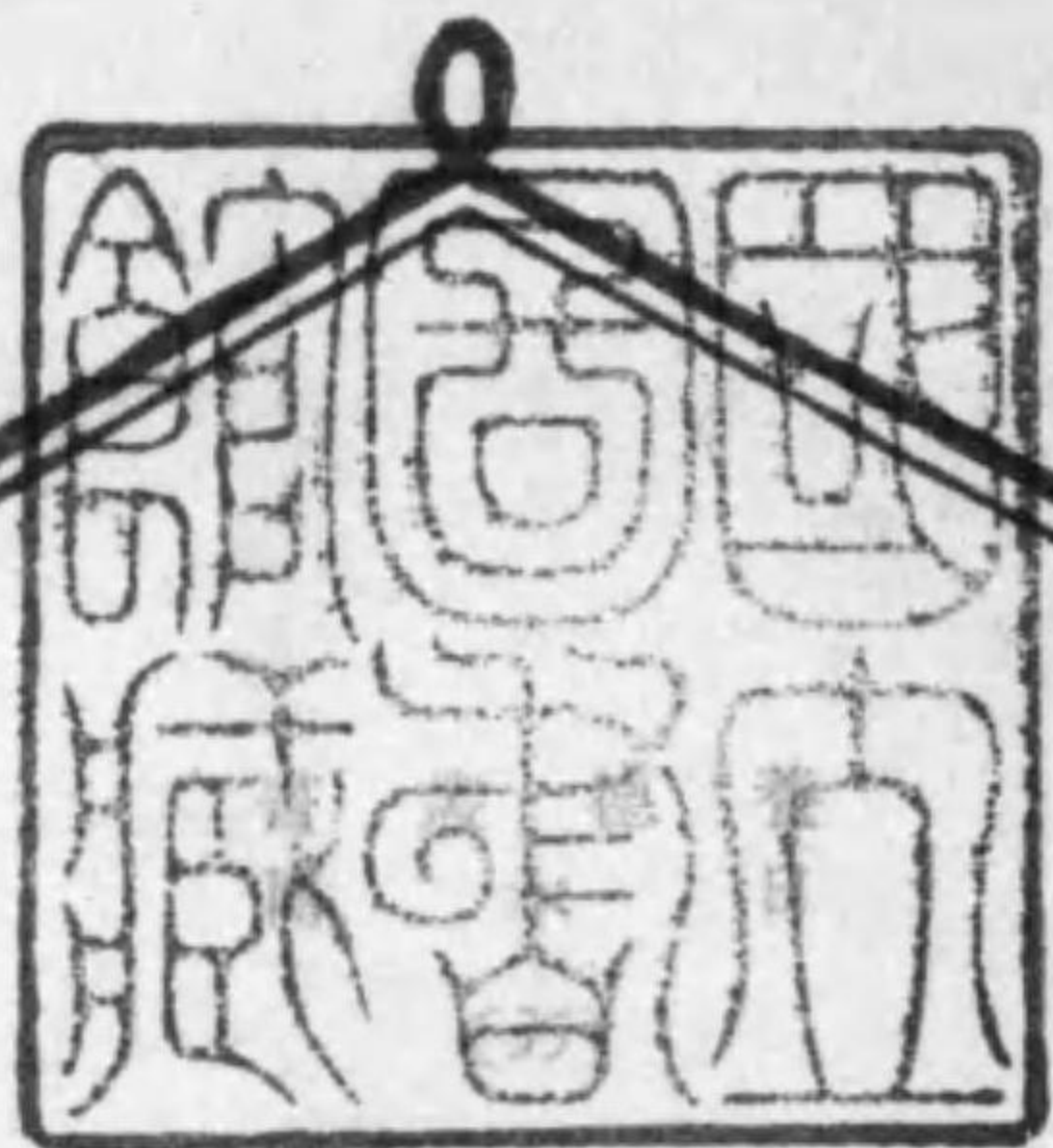


始



291.09

W 28



行紀みかまみ

著水牧山若

社 徳 義



目次

裾野より	四
林中の温泉より	一六
利根より吾妻へ	三三
落葉松林の中の湯	三五
溪ばたの温泉	四九
草津より澁へ	六〇
山路	七三
鳳來寺紀行	八五
みなかみ紀行	一〇二

國立圖書館
昭 23 7. -1 和
購 入



み
な
か
み
紀
行

裾野より

— 緑葉兄へ —

その一

みやこをば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關……これよりは少々無風流な話だけれど、とにかく浴衣一枚で東京を逃げ出して来た男が、浅間風の秋風に吹きまくられてゐる有様をよろしく想像して呉れたまへ。甲州は非常に暑かつた。飯田蛇笏君の宅では葡萄のなかに身を埋めてゐた。彼處は富士の裾野の一端になつてゐるので丘が多い。ぶら／＼丘から丘を歩いてゐると、流石に秋で、草花の匂ひ、山のすがた、いかにも自分の姿の輪廓が明かになつたのを感じた。それでもその歸りには木立の中の青い淵にとび込んで子供の様な騒ぎをやつたものだ。甲府から汽車に乗つて甲信國境の山野を走る時は實に好かつた。天が晴れて、僕の好きな大きな山脈の峯が汽車の窓に斷え

ず姿を見せてゐる。韭崎の停車場で初めて落葉松の木立を見た。それから二三時間は全然山の間を走つて行くのだ。線路に沿うて秋草の深いのにも驚いた。市街の花屋で見れば何となく桔梗は嫌味らしく見えるけれど、青い草むらで風に吹かれてゐるのを見れば哀れがふかい。吾木香も寂しい花だ。君も知つてゐるだらう、六七年前多摩川の岸に居て、戀ともつかぬものゝあはれに心を浸しながらこの花を摘んで歩いたといけない自分の姿が忘れられぬ。すゝき、女郎花は云はずもがな、萩などはまるで稲田の稲の様に茂つてゐた。山の峠にかゝつた頃白雨がやつて来た。山を越して峠を振返ると雨の過ぎた中ぞらに大きな／＼虹が懸つてゐた。姨捨あたりから筑摩の平原を見下した時も誠に好かつた。丁度日の落つる頃で、何河か平原の中に白く輝いてゐた。

小諸驛に着いたのは夜の十時すぎ、岩崎君等に迎へられて今日までの大きな古風の病院の二階の一隅に起臥して居る。小諸は浅間の裾野の中に散在する古驛の一つで煤けた町が傾斜を帯びて野末の方に小さく引着いてゐるのだ。鳥崎さんに「小諸なる古城のほと……」と歌はれた古城址がツイ一二町の所にある。恐しい松の木立の深いところで、その裾を限つて千曲川が流れて居る。黄色な松の落葉を藉いて、崖下の流れを眺めてゐるといつか知ら眼は瞑つて全てをかけ離れた寂しい旅客の愁ひに心は沈んでゆく。こちらに來た當座は毎日の雨と曇で見ることの出来なかつた浅間の煙は昨今明かに空になびいてゐる。此家の二階の手術室からは正面に當る。僕の隣室の窓からは

軟かな線を引いて海の様な裾野の傾斜の輪廓が見渡される。野の中に飛び／＼に村落が介在してゐて、夜に入れば薄赤い灯が點る。傾斜を限つた直線の向うには遠く無限に山脈がうねつてゐる。僕のきゝ覺えた山の名だけでも十に近い。例の日本アルプスの一帯であるのだ。中にも乗鞍、白馬の諸山には白い線を引いてもう雪が降りた。左様だらう、小諸にゐてさへ袷に羽織に冬のシャツで暑くない。病院の室の中には既に爐を開いた所さへある。やがて炬燵が懸るのだらう。藥室の前の庭には二三十本の林檎が實をつけて大分もう紅く熟れて來た。林檎の木に實のなつてゐるのを初めて見た南國生れの旅客には、朝夕の野分がいやに身に泌みる。初めて見たと云へば白樺の樹をも初めて見た。胡桃の樹も初めての様な氣がする。落葉松は一昨年輕井澤で見たのであつた。白樺の幹の尊い姿は、樹木を切愛する身にとつて殆んど一種の神祕を覺えしむる。町から二里ちかく裾野を登つて淺間の麓に行くと林の中によく見受くる。風の吹いてゐる林の中であの純白な大きな幹に身を倚せて居ると、嬉しい悲しいを離れた涙が零れて來る。そして大きな胡桃の樹によぢ登つてまだうす青い實を落して、石を拾つてその實を叩いて喰べてゐる君の友を想見して呉れ給へ。

ドクトル岩崎のおかげで、身體は大方よくなつた。けれども今までの何や彼やの心の疲勞が一時に出たものかして、すつかりぼんやりして了つた。だからまだ歌を詠む氣にならぬ。強ひて考へれば出來ぬこともあるまいが、それは東京にゐる時にする仕事で、こんな所ではどうしてもやりたく

ない。そのうちにはうんと出來るだらう、手帳から拾ひあつめたら一頁分くらゐはあるだらうからそれをお送りする。それで間に合せておいて呉れ給へ。一切の記憶と未來に對する觀念の全てとから脱却して、本當に遊離した旅の心になり度いと朝夕に希望してゐるのだけれど、なか／＼左様はゆかぬ。却つて心が靜かになるだけ色々のことが思ひ出されて、苦しくて仕様がなない。いつそのこと此まゝ東京へ歸つてまたどさくさの中へまぎれ込まうかともよく思ふ。

山のあなたのそら遠く、

「わすはひ」 住むと人のいふ。

噫、われひととめゆきて、

涙さしぐみかへりきぬ。

山のあなたになほ遠く、

「わすはひ」 住むと人のいふ。

矢つ張り我等はお墓に入るまでこの歌の愛誦家であらねばならぬのかも知れない。

時々昂奮して酒精分の要求を痛感して困る。甲州に居る時、少々飲みすごして來たものだから、友のお醫者さんから、うんと叱られて目下は謹慎中にある。然し幾度かこつそりとやつて口を拭つて居る。或る時などは少し度を過して、石ころばかりの坂路を轉げ／＼して歸つて來たものと見え

て、翌朝床の中で眼がさめて見たら手も足も傷だらけサ。これでもお醫者さんの目をごまかしたつもりでゐるのだから驚く。

折がわるくてまだ淺間にもよう登らぬ。近日中には屹度登れるだらう。追分から松井田あたりの古驛の秋草が素敵だ相だ。そこらをぶら／＼して輕井澤に行つて、二三年前のたのしかつた夢のあとでも探して見よう。そして風邪でも引いて來れば世話なしだ。

以上の有様で、まだ君にすら手紙一本よう書かなかつた。これを原稿半分、私信半分のつもりで君へおくる、赦して呉れ給へ。今暫くは此處に居ることになるだらう。信州はいつまでゐても飽き相もない國だ。木曾川をも下りたし、越後へも出て黒いときく日本海も眺めたし、前途甚だ茫漠、まア翌はあしたの風次第ときめておきませう。今日もよく晴れた。これからまた獨りで上の落葉松の林にでも行つて來よう。方何里かに渡つたその林がそろ／＼黄色くなりかけた靜けさといつたら無いよ。では、愈々左様なら。

その二

例の通りの男は、例の通りの風をしてまだ千曲川の近所にうろ／＼して居る。身體などは幾らか肥えて來たかと思はるゝが、頭の方は相變らずぼんやりして居る。氣がついて見ると、近頃僕はよく眼を瞑ぢてゐる様だが、心の眼も同様に瞑ぢてゐるのかも知れない。時たま非常に心が明るくなりかけたナと思はるゝ事があるが、直ぐさま又暗くなる。

東京も左様か知れないが、今年はこの地方は近年にない雨の多い秋だ相だ。はつきり晴れた日と云つたらほんの一割か二割かの氣がする。どし／＼降るのならまだしもだが、ぼんやり曇つて居るには誠に以て閉口する。健康の人はこの曇日を愛する相だが、僕には眞平だ。

で、稀らしく晴れでもすると子供の様にころ／＼して家を出かくる。ふところ手のまゝ當もなく歩いてると誠にいゝ氣持だ。高原の雲は眞實好い。雨の晴れぎは日没の際などほんとに何とも云へない。空氣はいゝし、いゝ頃加減の冷たさが肌に沁んで、思はず腹の底から呼吸をして、秋だ、秋だ、と言ひ度くなる。

島崎さんの小説でこの信州を舞臺にとつたものに、よく旅人々々といふ言葉が出て來てゐるだらう、『旅人の群は幾つとなく丑松の傍を通りすぎた……』といふ様な調子で。初めこの旅人といふのが何となく仰山らしく、わざとらしく聞えていやな氣持がしたものが、實地信州に來て見ると、まつたく行き交ふ人々がいかに遠國から遠國へ急ぐ旅人らしく見受けられる。これは一つは此土

地の人の風俗が一寸近所へ行くにしても草鞋脚絆で背に蓐こぎを負つて出掛くるといふ風だからでもあらうし、一つは四方が空濶で空気が澄んでゐるためでもあらうし、また高原の端から端に連つてゐる道路が餘り屈曲もせず白けたまゝ續いてゐるせゐもあらう。また信州は御存じの蠶の國で、繭や生絲の小さな行商人が、あちこちの村から村へ渡り歩いてゐるのが多いので、それ等の姿も、一種他所に見られぬ寂しい觀を帯びてゐる。夕方など裾野や田畑の中の霧などの薄々降つてゐる道路を獨りでぶら／＼歩いてゐると、よく此等の群に出逢ふ。彼等は知る知らずに係らず、必ずのやうに挨拶をかけて行く。その挨拶がまた氣に入つた。曰く、『お勞れ！』と此の短い一言だ。この頃では先づこちらからこの懐かしみのある挨拶を懸くるまでになつた。

晴れた日に、路傍の草むらの中に横になつて、勞れた身體を安めてゐると、時々この小旅客の群が叢中の僕には氣のつかぬまゝに色々なことを話して通りすぎる。一人で急ぐのもある、馬の上で唄をうたつて通るのもある。

田はもう大方黄色くなつたが、まだ收穫は始まらぬ。蝗の飛んでゐる田の畦から、線路を越え、人家の裏庭を通りすぎて、丘や林に入り込むのもいゝ。茸狩にも行つたが、茸を探すより、日光の漏れて来る枝の下に足を投げ出してぢつとしてゐる方が面白い。土の香とも松やその他の落葉の香

ともつかぬ匂ひがしつとりとしてゐて、時々松かさが靜かな音を立てゝ落ちる。山雀やまがらが枝から枝へ移つて行く。若しもう少し深い松林に行かうなら折々これらの松の木を伐つてゐる所に出逢ふ。その斧の音も誠に身に沁みる。一方では斧で伐り倒し、一方では鋸で引いてゐる。木屑の香の高い中に、多くは半裸體の柚人すまが唄をうたひながら、この仕事に従事してゐるのを見ると、妙な世界にでも來た様な思ひがある。彼等の森林生活に於て唄つてゐる唄の一つを紹介しようか。

元締、金貸せ、また女郎買ひに――

金を貸さねば、婢を貸せ――

いま一つ、

木挽さんかや、そりなつかしや――

わしが殿御も、また木挽――

松の梢の青いなかを渡つて居る秋風と調子を合せたこれらの唄が聞えて來る時、僕は言ひ知れず我等人類のなつかしさを感ぜずには居られない。

落葉松はすつかり黄色くなつた。この木の落葉を以て冬ごもりの巢を營む蟻が居る。僕は最初落葉松の林には必ずその落葉が圓く堆くなつてゐるので、風か水のために自然に斯うなるのだらうと思つてゐた。そして或時何氣なくその圓いのゝ一つを兩手で掬つたら、さあ大變、驚くべき蟻の大

群が其中からむく／＼と現れた。聞いて見るとこの蟻のために命を落す人もある相だ。いかにも森林らしい話ではないか。

秋草は大方枯れた。林を出て黄色い野の草むらに日向ぼこの様に寝ころんで居ると、白い蝶々などが顔の上を低くまつて通る。林の中でも出逢ふことがある。寂しい哀れなものだ。或時は野鼠が僕の寝てゐる顔の直ぐ近くにやつて来て、さもけん相に僕を眺めてゐた。斯んな時は何だか彼等と同類か友人かになつた様な穩かな情味が起つて来て、話でも出来たら面白からうとむきになつて思ふことがある。

信州では、丘と丘、山と山との間の窪地を澤と呼ぶ。澤に降りて通蔓草の實を取つて食つたりなどするのも面白い。澤には多く水が流れて居る。ちよろ／＼と流れてゐる傍によく白い鶴鴿の雌雄が遊んで居る。日本人の先祖の男女二柱の神さまがこの鶴鴿のおこなひを見て、初めてみとのまぐはひを學ばせ給ふたといふ話なども興味深く思ひ起される。この白い小さい鳥は原始時代の素朴な生活を語るに甚だ適當してゐる様に私には見ゆるのだ。

浅間の烟は愈々親しみを増す。晴れ渡つた月の夜など特に好い。浅間といふ山は元來甚だ無細工な形をした山で、眞晝間などは見るのが氣の毒な位だ。それが月の夜と、夕陽の時とだけは姿に

甚だ優美と權威とを帯びる。夕日が日本アルプスの方に沈まうとすると、其のはなやかな光線は正面に浅間に注ぐ。すると（大方浅間には雲が居る）頂上の方の雲も一種の彩を帯びるし、雲から出て裾野の森林帯に及ぶまでの焼土原の山腹が嚴かな代赭色に輝くのだ。其頃、小さな雲の斷片が山のそここゝに數多彷徨して居るのを見る。

今日のことだ。晝すぎ錢湯に行つてゐると、半禿の老人があとから入つて来て、『只今は大した騒ぎでしたな』といふから、何ですと訊くと、浅間が噴火しましたよといふ。驚いて、見えますかといふと、いえ雲で見えはしませんが無しろ大した音響で、まるで地震の様でしたと語つて居るうちに、湯屋の前の狭い露地を子供や大人が大騒ぎで急いでゐるのが見えた。僕も周章て上つて見たが、生憎く雨の後で山は六七分通り厚い雲に包まれてゐて何が何やら一向様子が解らない。一緒に湯に来てゐた某新聞小諸支局員のM君は、本當に噴火したのなら直ぐにも登らねばならぬが……と言つてゐるので、では僕も一緒に登らうかと言ふと、行きませうといふ。だから都合では僕も一二日のうちに登山することになるかも知れぬ。然し今のところでは極く平穩だ。火山の麓の古驛は常にこの響のために騒がれてゐる様だ。

この裾野一帯から千曲川の沿岸、和田峠鹽尻峠に及ぶ舊道に沿うて散在してゐる宿驛は殆んど悉く古驛式情調を帯びて居る。一つは寒國のせぬもあるのだらう、家が煤けて古い奇妙な建築で、道

路が石ころばかりの凹凸道でいかにも敗殘の姿だ。その癖どんな小さな宿驛にでも數多の料理屋がある。そして必ず藝妓と名のつく者を置いて居る。酌婦に至つては愈々多からう。これも例の蠶業地のためだとか聞いた。その田舎藝者の生活が僕には誠に興味深く眼に映ずる。彼等の多くは何處其處からの流れ者で、大分はもう身を棄鉢にしてゐるのが多い。前言つたM——君に惚れてゐる女はツイ近頃富士見町から落ちて來たのだ相だ。それから曾て前田夕暮君の居たことのある某下宿屋に奉公してゐたといふ女の成れの果に出逢つた。

或時、幾ら飲んでも酔はないで、氣が沈んで仕様がなないので、諸君の馬鹿騒ぎを眺めながら、自分の古い歌を低聲で吟じてゐると、一人の女が側にやつて來て、東京ではそんな唄がいま流行るのですかと訊いた。

東京が戀しい。

八月の暑い盛りに、何日だつたか銀座通りを歩きながら、切りに旅に出たくなつて、旅に出たら一切の苦悶が解決される様に考へ込まれて、汗を拭き／＼色々なことに思ひ耽つたことがあつたが、もうあの邊の街路の並木は黄葉して、早や散つてゐるかも知れない。しみ／＼と秋の浸みてゆく市街の各所の、色々な情調が實際身ぶるひのする程可憐しい。都會の女、都會の食物、都會の音樂——一切の都會の生活が、斯うして離れてゐると改めて明かに眼に映る。

今夜この原稿を書いてゐる僕の側に來て居るI——君（山岳寫生のため、久しく此國に來てゐる洋畫家）は上野の繪畫展覽會を見るために明朝の汽車で立つ相だ。僕も愈々歸り度いが、歸るまい。矢張り最初の思ひ立ち通り、このまゝの旅を續けて行かう。數日のうち、越後路へ入るつもりだ。豫てあこがれてゐた日本海の暗碧色の浪に面する日も遠くはない。今年の初雪をば恐らくあちらで見ることになるだらうと思ふ。さう思ふと急に何だか寂しさの襲うて來るのを感じるが、僕は行く愈々飽きるまで行つて見る。左様なら、御機嫌よう。

林中の温泉より

またか、と言ひ給ふな。今一度だけ辛抱してこの火山の麓に日_にまし滅びゆく秋の姿と、その秋に對して居る小旅客との曲もない消息を讀んで呉れたまへ。

報知もしなかつたが、僕はいま淺間の森林帯のなかに湧く小さな温泉場に來て泊つてゐる。

昨夜と一昨夜と、繪巻物のやうに引續いて不快な悪夢に襲はれたため、今日は朝から非常に疲れ_てゐた。で、出たり入つたり湯にばかり親しんでゐたが、晝飯を済ますと暫く微睡_{ちろ}んだ。そして午後三時ごろから唯だ獨りでぶら／＼と宿を出かけてみた。薄い二すぢ三すぢの雲は浮んでゐたが麗かに晴れて、さまで寒いとも感ぜぬほどの日和で、宿の前の徑が直ぐ近くの赤松の林に入り込む邊まで歩いてゐるうちに、もう疲れた心の底には一味の新鮮と溫和とを感じてゐた。赤松林の丘の背

を越すと、木立は盡きて明るく日光を受けて居る狭い澤に出た。澤には坂なりに小さい畑が幾枚か開墾せられてある。畑には大豆が作られてゐたものらしいが、既に抜きとられたあとで、掘りかへされた土が黒く濕つて居る。山番と畑番とを兼ねたらしい小屋が一軒見えた。人かげは見當らなかつた。

僕は畑の中の徑を拾つて澤の奥の方へ歩いた。澤の彼方側_{あた}は一帶に打續いた落葉松の林である。

『落葉松はすつかり黄色くなつた』と僕は前號の通信に書いたが、今は黄色を通り越して既に赤味がかつてゐる。風の吹く日でもあつて見たまへ、その細かい葉がまるで時雨の様に散つて居るのだ。木立の下を透かして見ると、古ぼけた赤毛布でも敷いた様にびつたりと散り布いてゐる。其上を歩くとぼくぼくと軟い。試みに指で掘つて見たら薄赤い新しい落葉の下には、幾年の間にか散り積つて朽ち去つたものが二三寸の深さに達してゐた。朽ちた葉は其の木のための肥料となるものだといふ。

細小な澤は程なく盡きて、丘と丘、林と林とが狭々と相迫つた所へ僕は歩いて來た。四邊に縣け構ひの無い自由な音を立て、眼の前に溪が流れて居る。枯草のなかに表れて居る大きな岩の根がたに腰を下した。四邊には芒が多い。それに混つて一尺ほどに延びた落葉松の子が親木にならつて葉を落してゐる。根がたにこぼれた細い薄赤いその葉に微笑を與へながら僕は袂から煙草を取出した。

そして土地の冷たさが身體に浸み上つて來るのにも氣のつかぬ位茫然と身を横へてゐた。

溪を距て、對ひ合つて居る山腹の落葉松林の上には赤々と夕日の光が流れて居る。溪間には白樺がひっそりと立ち並んでその眞直な、雪のやうな幹と軟い黄葉とは既に微かに闇が匂ひそめて居る。溪の聲の高いことよ、僕の心の鼓動はいつともなく溪の聲と調子を合せて、ゆたかにも波打つてゐるのである。瞑目してこの自身の心に耳を傾けてゐたが、やがて起き上つて僕は溪の水際まで降りて行つた。水際には僅かばかりの蘆が生えてゐた。蘆のなかに立つてゐると、いかにも日の暮れたのに氣のつくほどの薄暮と冷たさとが身に迫つて來る。狭い溪の石の間を飛び越えて向うの山に移つた。其處は白樺の木立である。疎らになつた黄色い葉の間の幹の白さ、僕はそれらの木の間を傳つて山を登り始めた。徑らしいものもないのであるが、兎に角その山に登つて見たかつたからである。

丁度其處は森と森との繼目になつてゐる所で、雜木が密かに枝を交へてゐた。這ひ登るにも非常の困難だ。手足などには幾個所も小さな傷をつけた。枝や葉の透いたところを選んで、上へくと進んで居るうちに、夜になつたら如何しやうといふ不安が胸に湧いて來た。が、また夕月のあることにも心づき、よし月が無いにしろこのまゝ山を越えて麓の方まで十町あまりも這ひ下れば、屹度何處かへ通ふ路があるに相違ないことを知つてゐるので、そのまゝ引返すことを止めて進んだ。

その山の頂上近くまで進んだ時には、溪間と違つて未だ落日後の光線が明るく木の間に残つてゐた。そして漸く時についたばかりの小鳥（多分頬白か何かだつたらう。）の群が其處等の枝からばら／＼と惶しく飛び立つた。頂上らしい所へ出ると暫く森が途切れて黄色い熊笹の原があつた。日はもうとつぷりと暮れてゐるので、明るい西から南にかけての半空を限つて聳え渡つた日本アルプスの山脈には例の穩かな黄昏のいろがまつはり着いて、一體の大氣がいかにもしつとりと潤つて居る。僕は歩くのがいやになつて深い熊笹の中に仰臥した。眼の上いつばいに垂れかゝつた空の蒼さ、重さ。見給へ、月が淡く空に浮んで居る。日光のなごりと夕月の光線と、靜かに融け合つて空一杯に醗酵してゐるのである。僕は呼吸を止めては、やがてまた深く吸ひ込んだ。二羽の蝙蝠が僕のすぐ上をまつてゐる。

其處へ、遠雷の様な音響が幽かに大地を揺つて起つた。まだ荒れてゐるな、と僕は寝ながら思つた。君、淺間が一昨夜から切りに荒れてゐるのだ。昨日などは五分の間をおかずに鳴り轟いてゐた。噴煙は晴れた空に雲のやうに東に流れて、其末は武藏の秩父山までに届いてゐた。今日は餘程風いでゐたのだが、また始めたのだらう。僕は半身を起して淺間の方に振向いた。驚くべき煙は薄黒く聳えた山頂から今日も同じく東へ流れて居る。そして油の様な濃密な煙の根がたには薄赤く火光を宿して居るのである。

綠葉君、僕が火山を愛する所以は、その一抹の烟が常に原始時代を戀ひ慕ふ僕の心に、更に一絃のしらべを傳ふるが故である。まだ少年のころ、日向肥後の國境から遠く阿蘇の烟を望んで謂ひやうなき敬虔の念に撲たれたのも、恐らくこの心に由つてであつたらう。同じく幼年のころ、山と山との峽間の僕の故郷の空が、一種の音響と曇りとに掩はるゝことがあつた。母は僕を抱いて霧島さまのお荒れの日だと教へた。その日のつゝまじやかな幼い心をも僕は忘るゝことが出来ぬ。海に浮んで不斷の烟を上げて居る伊豆大島の火山については、安房から相模から屢々君に書き送つたことがある。今秋、端なくこの淺間の麓からこれらの消息を傳へ得る僕自身を甚だ幸に思ふ。火山の烟に對ふ時、僕の心はつねに『永遠』に對して波立つを覺ゆる。僕は眉を擧げて、また頭を垂れて、深いく熊笹の中で斷えては續く噴烟と音響とのために全身を熱せられてゐた。

氣がつくと月の光が湖の様に僕を取巻いてゐた。何といふことなく非常の恐怖を感じて矢庭に飛び起きさま、熊笹原を走り下り始めた。そして程なく茂つた赤松林の中に走り入つた。月の漏るゝ林のなかの靜かなこと、僕は茫然と立止つて四邊を窺ふ様に心をすませてゐたが、やがてまた兩手を懷中に預けて、徐ろに木の間を拾つて歩いた。

最初の想像は外れなかつた。十二三町も歩いたかと思はるゝころ、林は盡きて黒い畑に出た。畑の畦を廻つて行くうちに小さな路を發見した。それに沿うて暫く歩いてゐると、また可なり深い林

に入つた。これは困る。一體どの方角に出ればいゝのだらうと當惑したが、兎に角歩いてる方角へ歩くより外に適當な考へつきはなかつた。所が愈々困つたことにはその路が林の中で十字形の辻を作してゐる所へ出た。心あての温泉宿の方角へ行く路は餘りにも心細いほど哀れな小さなものである。これについて行つて途中で見失ひでもしては愈々困ると思つたので、今少し麓の方へ降りて行かうと曲らずに暫く歩いてゐる所へ、突然人の唄聲を聞いた。先づ驚いたが、僕はすぐ袂から煙草を取出して火をつけた。そして向うの近づくのを待つた。

村の若者が馬を引いて來たのである。腹一杯に唄つてゐる彼の聲を聞きながら、僕は今一本煙草をつけた。闇から突然彼を驚かすことを避けるためである。けれ共、彼は驚いた。僕が温泉宿への道を訊いても容易には返事もしなかつたが、漸く合點が行つたと見えて、それでは〇〇館の客人かと反問するので、左様だと答へると、それはまア飛んでもない所へ來たものだと言つて道に道をつけた。が、何分にも夜ではあり林の中ではあり方角の要領が飲込めないのでまご／＼してゐると、彼は手綱を其處の松の枝につないで、それでは俺が途中まで連れて行つてやらうと言ひ出した。それには及ばないと一度は斷つたが、もう先に立つて歩いてゐるので數多度び禮を言ひながら後についた。松を漏れた月の光が彼の逞しい肩や背に斑々として落ちて來る。僕は獨歩の『忘れ得ぬ人々』を思ひ出さずには居られなかつた。

一寸した丘の背まで来て彼は立止つた。もう向うに〇〇館の灯が見えるといふのでよく見ると成程谷間みたいになつた所へ赤いのが見えて居る。それではといふので、僕は袂を探つたが何も持つて出なかつたので、すひさしの敷島の袋を取出して彼に與へて別れを告げた。彼は尙ほ暫く立停つてゐたが僕のうしろから、今夜は俺も湯を貰ひに行かうと呟鳴つた。是非來るがいと呼び返しながら僕は小さな赤い灯を目あてに小走りに急いだ。其處には熱い酒と、男女混浴の温泉とが僕を待つてゐた。

利根より吾妻へ

十一月十六日 晴

漸く全身の温るのを待つて二階へ歸つた。その間に炬燵の用意が出来てゐた。何といふ事なく心細いおもひをしながらそれに入つて當つてみると、今更らしく溪川の音が耳につく。二三枚だけ開けてある雨戸の間の黒く煤けた障子を開いてみると、河原の様に石の出た街道を挟んで直ぐ激しい溪となつてゐる。溪からはまた烈しい風を吹きあげて、永くは障子もあけてゐられない。其處へ待ち兼ねた酒を持つて來た。嘸ひどいものだらうと唇に持つて行くと案外にさうでもない。もつとも、此方の唇が痺れてゐたのかも知れない。さかなはこちらの註文した鐘詰（鯨であつた）のほか大根おろしと小豆を鹽煮にしたのと椎茸の汁とであつた。小豆の鹽煮とは生れて初めて食ふものであ

つたが、時にとつて鐘詰よりもうまかつた。先刻から見てゐると家の中には初め逢つた小娘のみで他には誰もゐないらしい。見たところ何處に田があるとも見えぬ溪間だが、矢張り何處かへ稻の刈入れに行つてゐるのであらう。雪袴を穿いたまゝの黙り切つた小娘は、それでも宿屋の娘である、折々階下から上つて來ては炬燵の火の具合を心配したり、酒の燗の按排を氣にしたりして深切にして呉れた。

温泉と炬燵と酒とのお蔭で漸く身體は温くなつて來た。然し、先刻からの心細さは少しも去らない。何といふ事なく炬燵の上に置いて眺めてゐる時計の針の進むと共にその心細さも加つて行く心地である。ちび／＼と酒をなめながら、私は地圖をひらいて見た。此處で今夜泊るといふのは兼ねてからの豫定で、若し宿が静かであつたら二三日も休んでゆく氣であつた。それで先刻もあつして無理に宿を頼んだのであつた。が、斯うして落ちて見ると静かどころか餘りに淋しい。天井も壁も襖も深い煤で、手足をさし入れてゐる炬燵の蒲團は垢で光つてゐる。人聲ひとつせぬこの二階であの激しい溪を聞きながらどうして今夜を明かさう。さう思ふとランプの灯ひとつを見詰めてぼんやり坐つてゐる自分の姿が目に見えて來る様だ。若しまた今夜のうちに大雪でも來て、あとへ引返す事が出來なくなつたらどうだらう。現に街道にはいつ降つたのか晝間ですらあんなに白く見えてゐた。ツイ眼の上の清水越にはあの通りの深さではないか、などと考へてゐるともう暫くもぢ

つとしてゐられない様な心細さが身に浸みて來る。折角あつして無理を言つて泊めて貰つて、晝飯を喰つたばかりで飛び出すのは初めこの宿を世話して呉れた郵便局の老人にも忙しい中に汁を煮たり飯をたいたりして呉れてゐる此家の娘にも濟まない、斯うした寂寥を戀ひ求めてこそ出て來た今度の旅ではないか。など獨りで強ひて自分の臆病を矯め様とするのだが、すればするだけ心は落着を失つて行くのだ。豫め量を言つて近所から取り寄せた三合の酒は酔ひもせぬ間になくなつてしまつた。愈々最後の一杯を飲み乾すと共に私は勇氣を出してこの宿場を立つことに決心した。立つとしても再び湯原へ引返すのは嫌だ、此處から僅か二三里らしいから谷川温泉まで越えて見よう、と地圖をたゞみながら愈々それに決め、急いで飯を掻き込んだ。そして柄になく餘分の茶代を置いたりして、娘に詫びを言ひ／＼なつかしい其木賃宿を立ち出でた。何とも言へぬ淋しさと安心とが今更の様に心に湧くのを感しながら、また、一生恐らくこの宿の事をば忘れえないだらうなどとひそかに思ひながら。

午後三時、空は有難くなほ先刻のまゝに晴れてゐた。急ぐにつれて酒の酔も次第に現れて來た。見返れば清水越にはいつのまにか午後の光が宿つて積み渡した雪の上にほのかな薄紫が漂うて居る。それに連つたすつと奥、藤原郷の方の山々にはまともにもいま日が射すと見え、嶺といふ嶺がみな白銀色に鋭く光つて見えてをる。一里あまりをばいま來た路を引返すのである。廣く且つ深いその溪

間に照り淀んで居る日光はいよ／＼濃くいよ／＼淨く、たゞ溪の響のみがその間に澄み切つて醸し出されてゐる。折々何やらの鳥が啼く。行き逢ふ人もない。自づとまた三四首の歌が出来て来る。

日輪はわがゆくかたの冬山の山あひに

かかり光をぞ投ぐ

日輪のひかりまぶしみ眼を伏せて行け

ども光るその山の端に

澄みとほる冬の日ざしの光あまねくわ

れのころも光れとぞ射す

わが行くは山の峽なるひとつ路冬日ひ

かりて氷りたる路

然し、路傍の枯草に寝ころんだり、溪に降りて淵に遊ぶ魚を眺めたり、手帳に歌を書きつけたりしてゐる間に、暮れ速い冬の日脚はいつとなく黄昏近くなつて来た。そしてひとつの峠にかゝつた頃は其處等はもうとつぷりと暮れて、唯だ遠い高山の嶺にのみ儚ない夕陽の影が残つてゐた。坂は険しくはないが、なか／＼に長かつた。漸く峠らしい所に着くと、思ひもかけぬ高い険しい山がその正面にそ／＼立つて、嶺近く崩るゝ如くに雪が積つてをる。その大きな山に續いて同じく切りそ

いだ様な岩山が押し連り、斑らではあるが雪が崩れてをる。山は全く落葉しつくして、此處等にはもう黄葉の影もない。炭を焼くらしい煙が細く山腹の夕闇に立つて居る。その麓に今まで沿うて来たとは異つた溪が流れて、その溪ばたに家は見えないが温泉場らしい湯気の凍つた様に立ち上つて居るのが見ゆる。いかにも寂しい眺めである。またしても湧いて来る心細さをこらへながら、その湯氣を目あてに寒い山を降りて行つた。

宿はそれでも三階建の堂々たるものであつた。その三階の角で溪の瀬の上にかけて出しになつた様な部屋に案内せられた。恐しい瀬の音である。洋燈を持つて来る間、森閑としたその角の部屋に坐つてゐると、こゝろもち自分の身體をも揺り動かしてゐねばならぬ位に響いて居る。温泉にお入りになるならこれを點して行く様にと言つて宿の婆さんが提灯を置いて行つた。をかしく思ひながらそれを點して降りて行くと梯子段を三つも降りて河原に接した所に浴室はあつた。なるほど、洋燈ひとつ點つてゐない。眞暗な中に誰か入つてゐると見え湯を使ふ音が湯氣の蔭でしてゐる。私は裸體になつたまゝ湯槽まで提灯をさげて行つた。そしてツイ手近にそれを掛けて置いてひつそりと湯に浸る。此處にも殆んど窓も壁もないと云つていゝ。溪向うの山がくつきりと軒端に見えて居る。月夜らしい。湯に浸つてゐるとまつたく身體に響くほどの瀬の音だ。

また提灯を持つたまゝ部屋に歸る。廣い二階にも三階にも灯影ひとつ見えない。自分の部屋だけ

がぼつかりと赤く染つてゐる。膳など運んで来るにも提灯を提げてゐるのだ。やれ／＼と思ひながら、何だか不思議な世界に来てゐる様で、氣持は割合に静かであつた。たゞ、とても普通では今夜は睡れまいと思ひ、豫め銚子の數を増して註文して置く。

さうした心遣ひも要するに無駄であつた。瀨の響にはやゝ馴れて來てもなか／＼睡れない。不氣味だとは思ひながらまた提灯を點して便所ついでに湯に入りに行く。宿の者か近所の者か老婆ばかり三人入つてゐた。月は山を離れて寒々と中空に照つてゐる。軒を出てゆく湯氣はまるで凍つた様にその月影に靡いて居る。近頃に起つたらしい村での離縁話を三人が長々と喋舌つてゐるのを聞いてゐるうちに、うと／＼と睡くなつたので惶て、上つて蒲團を被つた。

十一月十七日 雨

睡りつくと案外によく睡れた。起きて見るとしめ／＼と時雨が降つて居る。この頃毎朝の様に降つて來るので程なく晴れ様からと慰め顔にいふ老婆の言葉を聞き流してけふは兎に角ゆつくり休む事にする。この谷川村は初め越後あたりから出稼ぎに來てゐた人たちがいつとなく棲みついて部落をなしたもので、今では戸數が二十位はあり、みな木挽と炭焼とを生業としてゐるのだ相だ。湯槍曾と同じく此處がこの溪の行きどまりの部落でこれから上には一軒の人家も無いといふ。雨の晴

間に出て歩いて見ると、其處此處と散ばつてゐる小屋の入口にみな七五三繩が張つてある。聞けばこんな村にすら例の西班牙風邪が流行つて來て、大半はやられてゐるのだ相な。雨雲の懸つてゐる山肌には昨日と同じく細い青い煙が二個所三個所と立ち昇つて、奥の大きな雪の山は今日は見えな。いまこの邊は漬菜の盛りと見え、私の泊つてゐる温泉の一つの湯槽をその菜洗ひ場所として村の女どもが其處に集つて終日青いその菜を洗つてゐた。温泉で、しかも浴槽で菜を洗ふなどは到底二度とは見られぬ圖だと感心しながら私も終日湯に入りづめにそれを見て暮した。夕方かけて雨は雪と變つた。新たに戸外から背負ひ込んで來る菜の上には雪がほの白く降つてゐた。あゝ寒い、一風呂温まつてから洗ふべえといふ様なことを言ひながら私の入つてゐる湯槽に飛び込む女もあつた。ひどく疲れたと見え、葉書一つ書くのすら物憂くてひと日を過す。明日も若し降る様ならちつと此儘休んで行かうなども考へる。何としても寂しい場所、寂しい日であつた。

十一月十八日 晴のち雨

昨夜のうちに降つた雪が窓際に白く残つてゐる。少し怪しいが兎に角晴れてゐる。いろ／＼考へた末矢張り出懸ける事にする。

一昨日立つて來た湯原まで二里、その間をこの谷川村から其處の小學校に通ふ三四人の生徒と一

緒になつて歩いた。冬になると雪に埋れて全く路といふものがなくなる。さうなると一軒から一人づつ順番に大人が出て生徒たちを送り迎へするのだ相だ。時々雪崩のために潰される事もあるといふ。それでなくてさへ毎日二里の山路の通學は容易なことではない。一緒になつて道草を喰ひながら湯原温泉に着く。其處でキャラメルを買つてやつて皆に別れた。

湯原からは先日の馬車に懲りてゐるので今日は沼田まで歩くつもりであつたが、どうも少しづつ先の事が氣になり出した。實はこの廿三日に信州の松本市で自分等のやつてゐる創作社の歌會が開かれる事になつてゐて、是非ともそれへ出席しなくてはならぬ。沼田から高崎へ後戻りして汽車で行くのならわけはないが、初めて見る上州山水の意外にも秀れてゐるのを知ると矢張り最初の計畫通り中之條から長野原を經、淺間山の裾を越えて信州に入りたい念が先に立つ。さうするには不知案内の土地ではあり餘程時間の節約をする必要があるのだ。それでこそ今朝も強ひてあんな世離れをした溪奥の温泉を立つて來たのであつた。それこれで終に眼を瞑つてまた例の恐しい馬車に乗る事にする。合點してゐるせぬか、先日ほど馬車も揺れないやうだ。そしてまた湯檜會谷川あたりと違つてこの附近は遅れながらもまだ黄葉の世界である。車の窓から利根に沿うた川岸のそれを眺めながら行く。大きな荒瀬を下つてゐる筏などを見ると、そゞろに湯原温泉で逢つた善良な材木商を思ひ出さざるを得なかつた。

馬車の中で地圖を擴げたり手帖を出したりしてゐると、何處へ行くかと訊く人がある。鑛山師か土木係と云ひたい中年の男である。中之條へ出るつもりだと答へると、繪を描きにかといふ。まあそんな事だと答へると、それなら沼田から澁川へ廻つて行くのではつまらない。沼田の手前の月夜野橋といふ所から右へ折れて山を越して行くがよい、よい景色の所があるといふ。實はそんな風な間道はないものかと地圖を涉つてゐた所であつた。折角のおもひで出て來た旅に同じ道を空しく往復するなどは誠に勿體ないといふ頃頃の考へから、その男の注意はひどく私を喜ばせた。道の難易などを根掘り葉掘り問ひたゞしてゐると、傍に乗りあはせてゐた一人の少年が突然口をはさんで中之條へ行くなら月夜野橋から行くより矢張り沼田まで出て其處から俺が村を通つて行つた方がすつとよいといひ出した。これはまだ十五六歳の逞しい身體をした少年で、この馬車には途中から乗つた者であつた。乗るまでは妹と見ゆる病人らしい十歳ほどの娘を背に負つて歩いてゐた。中年の男と少年とは双方が言ひ出した道の難易適不適に就いて各々主張した。どちらとも解らずに私が當惑して居ると、やがて一つの立場に着くと共に、『私は此處で降りなくてはならぬから……』と言つて男の方は降りて行つた。そのあとで少年を相手に細かくその道の方の事を訊いてゐると、馬車屋がうしろを振向いて、景色のいゝのは成程いまの旦那の言つた道だらうがとても入り込んでゐて初めての人には通れさうもない、それよりこの兄のいふ道の方が解り易くていゝだらうといふ。それ

で漸く私も安心して愈々この少年と共にその村まで行く事にした。

沼田の馬車屋で晝食を濟ませ、兄妹と連立つて歩く。妹をばまた兄が背負つて行くのだ。妹の脚に腫物が出来て容易に癒らず、醫者に見せたら切斷しなくてはいかぬといふ、それも可哀想でこの奥にある奈女澤温泉といふが腫物や切傷によく利くので、其處へ連れて行つてたのだ相だ。利いた様かと訊くと、餘程いゝ様だが何しろ淋しがつてまだ豫定の半分もたゝぬのには是非歸ると毎日泣くのでまた連れて歸る所だといふ。妹も割に大柄な娘で嚙重からうと思ふのにその風をも見せず、痛いかゝと幾度も低い聲にいたはりながら負つてゆく。言葉少なこの朴訥な少年がひどく私は好きになつた。度々路端に休んでゆつくりと山にかゝる。四五日ぶりの赤城の山がまた正面の薄雲がくれにその姿を現はして來た。村の名は忘れたがこの邊一帶廣々とした高原になつてをり、今度行く筈で行かなかつた片品川の流域が鈍い曇日の日光のもとに末遠く續いてゐるのが見渡される。とある小さな家の前に立ち停つた少年は、

『俺が祖母様の宅だから休んで行くべえ。』

と私を誘つて中に入つた。煙草など商つてゐる百姓家である。婆さんは裏の畑に出てゐた爺さんをも喚んで來て、一緒に病人の脚を調べた。聞いてゐると、醫者の言つたのではこれは次第に骨の腐つて行く病氣だから一日も速く切らなくてはいかぬと言つたのださうだ。側で聞いてゐて寒い心

になりながら私も立ち寄つてその傷口を眺めた。湯に行つてから次第に乾いてその傷口も小さくなつたと皆して喜んでゐるのだが、その邊眼に見えてうす黒く窪んでゐるのを見てゐると何とも言へず私はいたましい氣になつた。そして矢張りそれは思ひ切つて切る方がよくはないか、若しその醫者の言ふ様に次第に骨が腐つて行く様にでもなつては取返しがつかぬから、とそれとなく勸めて見た。兄と同じく言葉數の少いその娘はそれを聞くともう涙ぐんでゐる。他の三人とも途方に暮れた様にそれを黙つて見てゐるのだ。

『念のためもう一人他の醫者に診て貰つて御らんない、それが湯がいゝと言つたら湯で癒す事になさい、とにかく私の友達にもそれに似た病氣で脚を失くしてゐるので何だか氣になりますから……』

と言ひ置いて私は其處を出ようとした。

『××、（私は残念にもこの少年の名を忘れた）お前ちよつくら峠までゝも旦那を送つて行つて來う、峠からは一本道だが……』

爺さんの言ふのを引き取つて、

『ウム、俺もさう思つてゐた。』

と少年は直ぐ立ち上つた。

私は驚いてそれを固辭した。そして地圖を出して見せたりして、それよりは少しも早く妹さんを阿母さんたちの側に連れて行く様にと言ひながら、惶て、其處を出た。

『そんなら俺たちも行くべえや。』

と言ひながら少年は急いで妹を負つた。爺さんも婆さんも門まで出て來た。然し、少年とも直ぐ別れねばならなかつた。獨りになつて山に沿うた岨路を辿つてゐると、思ひもよらぬ向うの丘の様になつた畑の畦から、

『右い〜と行くだよ、十町も行くとも水車があるだからなア。』

といふ少年の大きな聲が聞えて來た。兄の肩につかまつて淋しく笑つてゐる娘の顔も見えさうだ。

『ありがたう〜。』

と帽子を振りながら私は何となく涙の出て來るのを覺えた。私の帽子を振るのを見て彼等は畦を降りて行つた。どうか彼の醇朴な兄の上に、いたましい妹の上に幸福あれ、と繰返し〜思ひながら、路ともつかぬ路を急いだ。

落葉松林の中の湯

信州星野温泉は淺間山の南裾野一帯にひろがり渡つてゐる落葉松林の端の方、信越線沓掛驛から北へ二十町ほど入り込んだ所にある。落葉松林の奥から流れ出た溪流に沿うて温泉宿が唯だ一軒あるのみだ。輕井澤驛からこの邊にかけては信州のうちでも最も寒氣が烈しいと云はれてゐる處だけに、殆ど夏場のみを目的に經營せられてゐる様なもので、私が初めてその名を教へられて出かけて行つたのは今年の十月末であつたが、ひよつとするともう休業してゐるかも知れぬからよく沓掛で様子を訊いて入り込むがよいと言はれた程であつた。温泉と云つても湧き出した湯の温度が低いために火を焚いて温めてゐるのだ。行つてみると休んではゐなかつた。雪が積つても休まないさうである。その頃は恰度農閑季に入るので附近の農夫達でもやつて來るのであらうと想像された。湯は胃



腸によく利くと云ふ。

注意せられた通り沓掛驛で降りると直ぐ驛員に同温泉の事を訊いて、では汽車ごとくに其處から馬車が来てゐる相だが、と更にたづねると若い驛員は笑ひながら、いゝえそれは夏だけのことですと答へて歩み去つた。馬車どころか近所を探しても人力車一つ無かつた。爲方なしにやゝ大型なトラックを提げて昔は中仙道でもやゝ著名であつたその沓掛の寂びはてた宿場を出はづれると、路は玉菜の作つてある畑を過ぎて直ぐ落葉松の間に入つた。十月の末、この邊のこの樹木は半ば既に落葉してゐる。散り残りのその黄葉もすつかり褪せ果て、眞直ぐな幹と細かい枝とがはつきりと見透され、廣い林の中も極めて明るい。その奥にこの宿場の飲食店の酌婦らしいのがたゞ獨りで腰を屈めて頻りに何かあさつてゐた。茸らしい。先刻通りすぎた或る家の前にも蓆一杯に小さなしめじが乾されてあつた。泥濘の乾き切らぬ路にはこま／＼した落葉が眞新しく散り敷いてゐるのだ。

ツイ右手に起つて居る溪の響をなつかしく聞きながら、午過から照り出した薄暖い日光を脊に受けてぼんやりと歩いてゐると、間もなく林を抜けた。其處に一軒の茶店があつて、庭の隅に一臺の俵が置いてある。聲をかけると内儀らしいのが此方には返事をせずにあらぬ方に向けて何か言つた。すると一人の若い男がその茶店の一部になつてゐる鍛冶場の奥から出て來た。爲事を爲てゐたと見え、手には何か光つた金屬の棒を持つてゐた。私等（私は若い學生を一人伴つてゐた）を見るとい

かにも在郷軍人らしいお辭儀をしてやがてその俵を持つて來た。一臺きり無いので學生は遅れて歩かなくてはならなかつた。もつとも荷物さへ無くば私でも歩き度い日和なり路なりではあつたのだ。俵はすぐ溪に沿うた。溪の向うは例の寂びはてた廣大な落葉松林で、白々と石の露れてゐる其處此處には枯薄が叢を作つて、その蔭からこの蔭へと眞白な水泡をあげながら氷つた様に流れて居る。あゝ久しぶりに聞くその寒い、ほしいまゝな水のひゞき！

さうした覺束ない寂しい場所を選んだのは、其處にひつそりと籠つて是非この十日ほどの間に爲上げねばならぬ或る爲事を持つてゐたからであつた。それに温泉場ならば此頃また起つて居る持病の痔の痛みを我慢するにも都合がよいといふ理由もあつた。で、其處がよし休業してゐないとしても、その温泉宿の模様がこの目的に添はぬ様ならば直ぐにも其處を出て他の場所、更に靜かな温泉場を選ぶつもりであつたのである。二階の部屋に案内せらるゝと直ぐ私は坐りもせず一方の窓の障子をあけてみた。落葉松が十本ばかり、ツイ軒さきに沿うて寂然と立つてゐる。その落葉は障子の根方から板屋根いちめんはまだ褐色鮮かなまゝに散り渡つてゐる。その木立を透いて溪の枯薄原が見え、木立の上には早や夕づいた山の雲が寒い紅色を宿して澱んで居る。一方の窓を引きあけると例の溪の水が小さく寄り合ひながら白々と流れ下つて、向うの山腹には夕日の影が黄葉を染め

て漂つて居る。

其儘窓に腰かけて何といふ事なく頭痛に似た疲勞を覺えて居ると、その夕日の射して居る邊に啼く椋鳥の聲が烈しく溪を越えて聞えて來た。相距て、啼くらしい幾羽かの鳥の烈しい聲と水の響とのほか唯だはつきりと寒さが身に浸みるのみで、何の物音も何の人聲も聞えて來ない。

『これはいゝ所だ、ねエ君、此處に定めませうよ。』

私は遅れて着いた學生の顔を見るなり眼が覺めた様な氣で斯う呼びかけた。彼も出來たら短い小説なり書いて行きたいと言つてゐたのである。

私の様な怠け者が早速その翌日から爲事にかゝつた。東京ではその頃馬鹿に雨が續いて、現に信州へ向けて立つて來る朝までもじめじめと降つてゐた。それが碓氷を越ゆる頃から晴れて滞在中大抵はよく晴れてゐた。初め一方の窓の障子にあたつてゐた日光はやがてまた他の一方に移つて、折窓をあけてみると溪の流は眩い様に終日光り輝いてゐるのだ。勞れると湯に入つた。湯は朝の八九時頃から沸いて、時に熱かつたりぬるかつたりするが、とにかく大變に温まる湯である。湯殿が廣くて明るいのも氣持がよかつた。季節だけに湯治の客と云つても二三回やつて來た團體を除いて常の日は私等のほかに三人ほどしかゐなかつた。

湯から出て來て専念に筆を執つて居ると、何處でかよく冴えた音いろでかすかにかん／＼、かん／＼といふ風な音が聞ゆる。幾度も重なるので氣をつけてみると日があたつて張り切つて居る障子からその音は出て來てゐる。筆を持つたまゝちつと見てゐると、それは庭の落葉松の落葉が風に吹かれて飛んで來てはその障子にあたつて音を立てゝゐるのである事が解つた。思はず立ち上つて障子を開くと、それこそほんとにちひさな生きものゝ様に群つてたけ高いその梢から枝のさきからいつせいに散りなびいてゐるのであつた。

東南に溪をめぐらしたその宿の北には小さな岡がある。例により全部落葉松のみが生えてをる。散歩に出るには初めの日に通つて來た様に溪に沿うて杳掛の方へ出るか、またはこの岡を越えて更に無限に打開けた裾野の林の中に入り込むかするよりほか行く處がない。餘りの麗かな日光に誘はれて或る午前私等は庭の大部分を占めて居る廣い池の側を通つてその岡へ登つて行つた。岡には落葉松の間に宿の別荘風の家が三四軒立つてゐる。雨戸はみないづれも固く閉ざされてゐるのだ。庭木として植ゑられた楓が濡れた紅みを湛へて寂びはてた庭のうへに散りみだれてゐる。石とも土ともつかぬ火山性の白茶けた土地のうへに散つてゐるだけにことにそれが眼に立つ。が、その楓も私等の行つた初め二三日の間だけが盛りであつたらしく、やがて惶しく散り失せてしまつた。

岡の脊を越すとそれらの別荘と一寸建て様の違つた一つの建物があつた。半分は和風、半分は洋風に建てゝある。見るともなく見ると門標に「山本畫室」としてある。少からず私は驚いた。友人山本鼎君の畫室が沓掛の附近に出来てゐるといふ事を聞いてはゐたが、思ひもかけぬ斯んな場合に見出さうとは思はなかつた。間違ひもなく見馴れた彼の筆蹟である。それを見てゐると、行違つて二三年も逢はずにゐる友の顔がまさしく其處に見える様にも感ぜられて來た。雨戸は此處も閉されて川原の様なその庭には側の林から吹き送らるゝ落葉松のおち葉が一面に散り敷いて、矢張り其處にも一本眞紅な楓が立つてゐた。

林のなかに入つて行くと今更のやうに今日の静けさが身に浸んで來る。やゝ疎らになつた林の梢からはそれこそ誠に靜心なく例のこまかい黄色い木の葉がはら／＼と散つてゐるのだ。幾年かの間に散り積つた松葉のうへにいかにも匂ひ立つ様に鮮かに散り重なりつゝあるのである。耳を澄せば散り合ふ音が何處といふことなしに林のなかに起つてゐるのが感ぜらるゝ。さうして、その落葉朽葉の薄れた邊に小さな茸が生えてゐる。たゞの白茶色のしめじと黄しめじとがとび／＼に生えてゐる様だ。その小さな茸の濕つた圓味のある笠のうへにもまた落葉松の葉は散り渡つてゐる。

ぼんやりとその落葉するさまを見上げて立つてゐると、一寸には氣のつかなかつた松毬より一層小さいほどの鳥が、ちい／＼啼きながら葉の散る枝から枝を飛んでゐる。山雀らしい。氣がつけば

其處にも此處にも殆んど林全體に渡つて細い澄んだ聲で啼き交しながら遊んでゐる様だ。

その岡の小さな林を通り抜けると其處には意外な大きい道路が通じてゐた。まだ最近開かれたらしく、後で聞いて知つたがそれは昨年あたりから着手せられた千ヶ瀧遊園地といふのゝ爲に設けられた道路なのだ相だ。その道ばたから眞正面に淺間火山が仰がれた。まる／＼と高まつて行つたその山嶺にはその朝極めて微かの煙しか認められなかつた。しかもいつもの様に白々と立ちのぼる事をせず、うら／＼かに射した日光の下にや／＼うすい紫を帯びた朧さをもつて僅かの山の窪みを傳ひながら其處に纏り澱んで居る。山の八合目あたりから下は一帶に植林地帯らしい褪せはてた黄葉の原となつてゐる。

道路を踏み切つて少許の荒野があり、それを過ぐるとまた例の林となつて居る。しかも既う何處まで行つても盡きさうもない深いそれとなつてをる。其處の縁の日向に遊んでゐると突然一疋の犬が馳け寄つた。そのあとから豫想の通り獵服の男が出て來た。雉子三羽と山鳩を二三羽打つて居る。二三服煙草を吸ひながら彼は立話をして行つた。

『どうも見ごとな落葉ですね。』

私は又しても耳に入る林一帶のその微かな音色に心を取られながら彼に言つた。

『えゝ今日はまだ風が少いからだ、少しひどい日に林の中を通つてゐると、まるで先の見えない

位を散つて来る事がありますよ、吹雪と同じです。』

雉子の多いことだの、今年はさほどまだ寒くないことだの話してゐるうちに、犬は何か嗅ぎつけたと見え、烈しく尾を振りながら林沿ひの雑草の中へ駆け入つた。

千ヶ瀧遊園地といふへも或日行つてみた。この遊園地の目的は夏の避暑地を作らうといふのである。ツイお隣の輕井澤にも劣らぬ立派な處にしようといふ意氣込で着手したのだといふ。落葉松林の一部をやゝ薄くして、その林の中にとびく／＼に小さな貸別荘が幾つとなく建築せられつゝあつた。既に立派に出来上つてゐるものもある。來年の夏までには是非五十軒とか八十軒とかを作りあげる事になつてゐるさうだ。ずつと奥の方に溪に臨んで建てられて青く塗られた俱樂部と呼ぶるゝ家などはなか／＼立派なものらしかつた。

遊園地の中央ほどに出来てゐる共同浴場も變つてゐる。其處此處に雪白な白樺の幹の立ち混つてゐる落葉松の林の中に玄關などには大理石を用ゐた小綺麗な建築で、内部には脱衣室と浴室とがあるきりで番人ともついで居ずがらん洞だ。浴室は三面廣やかな明るい硝子張となつて居り、湯に浸りながら飽くなく林の風情を眺めらるゝ趣向になつて居る。私等の入つてみた時には現に程よく湯が沸いてゐて、入浴隨意といふのだが、あまり明るすぎ、靜かすぎて、一寸裸體になる勇氣がな

くて終つた。いま一つの特色はこの浴場には火を焚く場所がないといふことだ。それは浴場から一町ほど離れた上手に釜を置き、其處で沸して地中をこちらに送る様になつてゐるといふ。

その日の歸り、極めて僅かの傾斜を持った野のすつと下手の方から附近に似合はしからぬ一臺の幌馬車の走つて來るのを——そしてそのあとから幾臺かの人力車の續いて來るのを——不思議に思ひながら眺めたのであつたが、宿に歸つてからきけばその遊園地經營者が東京の何とかいふ華族様を案内して連れて來たのであつた相だ。藝者衆をも東京から連れて來たのだ相だ。さう聞いてあの森閑たる林の中の浴場に眞晝間から湯のみが獨り沸いてゐた理由が讀めた。入浴隨意と書いてあつたのは平常の事で、今日お先に失敬しやうものなら大變な事になるのだつたねと私達は笑ひ合つた。それにしても——さうだ、あの俱樂部といふ家にもその時土地者らしくない若い女たちが頻りと廣さうな二階を掃除して或者は床の軸など懸けてゐるのを見たのであつた——あんな林のたゞ中でその夜どんな宴樂が催された事であらうと想ふとそゞろに微笑せずにはゐられなかつた。

四五日もゐるうちに日をきめて其處に泊つてゐる湯治客とはすつかり顔馴染になつてしまつた。矢張り最初に推察した通り、全部で三人しか泊つてはゐらず、みんな胃の病いびい人のみで、中にも上州松井田の人といふ老人と私は浴室で落ち合ふ事を喜んだ。障子窓を透して日のよくさしとむ廣いな

がしにお互ひ裸體のまゝ汗を流しながら、坐り込んで永い事話し合ふ事があつた。

『僅か三四人の客に終日斯う沸し通しにするのでは燃料だけでも大變でせうね。』

と私がいふと、

『なあにネ、其處等にある落葉松ばかり焚いてゐるのだから大層な事もありますまいよ、それにソラ宿の入口にある製板所も此處の宿でやつてるだから、彼處で出来る木の端片だつてなか／＼のものでせうし、一度沸いてからなら鋸屑の乾したのだつて結構間に合ひませうよ。』

瘦せた、田舎者らしくもない老人は靜かに斯う答へながら、

『近いうちに電力を引くのはまた大變なものでせう、一體何處から斯んな所に電氣が引いてあるのですか。』

薄赤く煤けたランプをのみ寧ろなつかしい氣持で想像して來たのに、夕方ぱつと點つた電燈に驚いたこの宿の第一夜の事を思ひ出しながら私が不審がると、老人は笑ふともなく笑ひながら、

『なあにネ、あの電氣は自分で起して使つてるのですわ。』といふ。

飲み込めない顔をして彼の眼を見ると、

『ソラ、入口に製板所がありません、その隣に小さな小屋があつて晝間はその屋根の側の樋から水が落ちてゐますぢア、あの小屋が發電所で、自分の家で使ふだけの電氣をば彼處で起してゐるの

すよ。』

との事である。

『小さな機械でせうから幾らの電氣も出しますまいがネ……、昨年でしたかあの機械に故障が起つて、東京からその道の技師を高い金を出して二人とか呼んだ相ですがネ、どうしても直らない、主人も既う諦めてゐた所へ、恰度泊り合せてゐた小諸町の時計屋の亭主が一寸私にも見せて呉れと言つて何かちよいといぢつた所がそれで急にまた以前の通りになつてまア今日になつてるのだ相ですがね、妙な事もあるものですよ。』

斯んな話がいかに面白く私には聞かれたのであつた。明暗常無き電燈もその話を聞いた夜からは何だかしみ／＼眺めらるゝ氣などした。

或日二階の縁側に出て日向ぼつこをしてゐる所へ背の高い、粗野ではあるが高尙な顔をした青年が突然その隣室から出て來て、あなたは若山牧水さんぢアないかといふ。意外に思ひながらさうだと答へると、自分は美術院のY——といふ者で今度山本さんの畫室を借りて此處に繪をかきに來てゐる、あなたの事は兼々山本さんから噂を聞いてよく知つてゐたが斯んな所で逢はうとは思はなかつたといふ。私も驚いた。食事をばこの宿へ來て喰べて、夜もその畫室に寝る様にしてゐるのだ相だ。

その人の行つてゐる時に私はその「山本畫室」を訪ねて行つた。そしてその室内にも入つて見た。何といふ明るさと静けさと冷たさとを其處は持つてゐたことだらう。大きなストーヴと卓子と椅子ときりない極めて簡単なその室の一方の高い窓には、殆んど正面に淺間の禿山が仰がれた。そして窓から下はすぐ一つの溪間と落ち降つてゐて、その窪みの兩側とも例の黄葉した林である。林から林が續き、やがて近々と淺間の山が起つて行つてゐる。眼下の溪間からずつと打續いて行つた林と、淺間の山と、それに連つた名も知らぬやゝ低い山脈とがこの室とは何だか關りもないものゝ様に近く遠く寂然と見渡されて、深碧な空からは實に多量の冷たい光線が曇りのない窓障子を透して室内に落ちてゐたのである。よく晴れたその日の日光は廊下に距てられて室内には何の影響もない。ものを言ふのも惜しい様な氣持で暫く室の眞中の椅子に凭つてゐるうちに全身の精力は何だかすべて耳の邊に吸ひ寄せられて行つてしまひさうで、後ではその邊の神経が痛み出して來るのを感じた。

その邊の風物は既に冬枯れて見ゆるのにまだ「秋」といふ言葉に關聯した團體旅行などがその寂しい溫泉場にもやつて來た。雉子の獵場といふだけにそんな人達も折々來て泊つた。或朝、十時頃百人餘りの團體が押しかけて來た。折悪く時雨れてゐたが、宿にゐた所が到底爲事など出來はせぬと考へたので、傘をさしながら私達は杳掛まで出かけ、其處から汽車で小諸町まで裾野を降りて行

つた。一時間ばかりの汽車はすうつとなだらかな傾斜を降つてゆくのだが、右も左もすべて裾野の林である。雨中の黄葉が褪せながらも美しく眺められた。その町には知人があるので訪ねてみたが生憎く留守であつた。床屋にも寄りたし、買物もしたといふのであるが何しろ寒いので曾つて七八年前この町に滞在してゐた時よく來た事のある驛の前の小料理屋へ上つた。

特に熱くつけさせてちびく／＼と飲み始めたが一向に氣が冴えない。留守であつた知人といふのはよく飲む男なので久しぶりに大いに飲まうと楽しんで來たのが外れて、何となく心がぐれてしまつたのだ。一緒に行つた學生はまた素下戸で一杯の對手にもならず、庭先の冬木から石燈籠に降ることまかい雨を眺めながら飲めども／＼酔はない。女中を呼んで、酒の飲める藝者がゐるかと思つくと、居るといふ。とにかくそれを呼んで貰ふ事にして、二人とも殆んど物を言はず、一方はたゞ食ひ一方はたゞ飲んでゐた。

歩いて來たとみえ、袖を濡らしながらそのいはゆる左利きなる女が入つて來た。案外にも若い。まだ二十歳を出ない位ゐた。女中奴、出鱈目を言ひ居つたと思ひながら杯をさしてみると、なるほどよく受ける。そして飲む。唯だにやり／＼と笑ひながら飲んでゐる。顔はなか／＼美人だが、どうも少し足りないらしい。何處にか低能の相を持つて居る。これもまた黙り込んで唯だ水を飲むが如くにして飲むだけだ。オヤ／＼と思ひながらそれでも豫定の四時間あまりを其處に過し、團體客

の歸り去るといふ時間に宿に着く様に加減して汽車に乗つた。

雨はそのとききれいにあがつてゐた。いつか風が出て、顔や手足が随分冷たい。そして行きがけには雲にとざされて見えなかつた淺間山が、星の影の一つ二つと見えそめた紺青の夕空にくつきりと冴えて汽車の窓から仰がれた。よく見るとその山嶺には今までに見えなかつた薄雪が鹿の子まだらに積つてゐるのだつた。

爲事も片附いたので私達は滞在十日足らずでその裾野の中の温泉場とも云へぬ温泉場を引上げた。立つ日はまた朝から誠に暖に晴れてゐた。晝室に一寸暇乞に寄ると晝をかきさしたまゝY——君は杳掛の停車場まで送つて来て呉れた。寢衣のまゝで幅廣な眞黒な帽子を被つた背の高い彼は溪沿ひの小春日にも、人影の無い停車場にも誠に相應はしく眺められた。程なく輕井澤の方から煙を上げて来た小さな汽車に乗つて私達は別れを告げた。来る時には碓氷を越えて、今度は篠の井を廻つて松本を経、甲州路を通つて東京へ歸らうといふのである。そしてその夜は松本近くの淺間温泉に泊るつもりであつた。が、急に豫定を變へ、松本から輕便鐵道に移つて二時間ばかり、北安曇の大町まで行つてしまつた。雪積み渡した大きな山岳の麓にあたるその寒驛に降り立つと月が寒々と冴えてゐた。

溪ばたの温泉

上州中之條町で澁川から来た軌道馬車を降りた客が五人あつた。うち四人は四萬温泉へ向ひ、私だけひとりそれらの人たちと別れて更に五里ほど吾妻の流に沿うて溯り、その溪ばたに在る川原湯温泉といふにやつて来た。此處には一昨年の秋、通りがかりに一晩泊つた事がある。今度はこの前とは違つた敬業館といふのに宿をとつた。滞在するにはその方が宜からうといふ事を度々此處に来て居る或る友人から言はれてゐたからであつた。

この宿は大抵自炊の客のみだと聞いてゐたが、着いた晩早々から食物の心配をせねばならなかつたには少々驚いた。自炊と云つても飯だけは宿で炊いて呉れる、頼めば汁も添へて呉れる、それだけなのだ。他は一切自分で處置せねばならぬ。私は夜に入つて其處に辿り着いたのであつたが、長

火鉢の前にやれ〜と脚を投げ出すと番頭がやつて来て、先づお茶は御持参かと訊いた。とりあへず鮭の罐詰など買つて貰つて、何の氣なく醬油を女中に言ひつけるとサイダーの空罎に半分ほども入れて持つて来た。五勺とか一合とかいふのだらう。上草履も着いた晩に先づ買ひ入れた物の一つであつた。

よほど舊い家らしく、階子段の板などすべて窪みが出来てゐる。そして崖に沿うてあちこちと作り足されたらしい部屋敷が随分と多い。何れも舊式な作りさまで、見るからにうす暗さうな部屋ばかりである。幸に私の通された——と云つても着いた晩はさうではなかつたが、紹介して呉れた人がよかつたためか大變明るい、眺めのよい室に、その翌日から移ることが出来た。その代り、浴室に行くには大小六個の階子段を降りねばならなかつた。浴室と云ふより湯殿と云ひたい古びたそれは男女の分をあはせて十室ほどある。元來この川原湯温泉の湯元は唯だ一個所で、それをそれ〜の宿屋に分けて引いてあるのであるが、この宿だけはそのほかに自家専用の湯口を一つ持つて居る。それがまた大變に利くのださうだ。着いた晩、その湯の方に入つてゐるとわさ〜番頭がやつて来て、今夜お着きになつた客人は身體も勞れてるし湯にも馴れないからなるだけ長湯をせぬ様にと注意して呉れた。少し長湯をするとのぼせる様である。湯治效能の重なるものは胃腸だといふことで、温度はかなりに高く、ほ〜無味無臭、よく澄んでゐる。

溪ばたと云つても軒下や庭さきを直ぐ溪が流れてゐるといふのではない。流の岸から急にそ〜り立つた崖があつて、其崖の端に三四軒の温泉宿を初め一つの小さな部落が出来てゐるのである。崖の根に危い吊橋が懸つて居るが、其處から落葉松などの茂つた峻しい坂を三四町登つて來ることになつてゐる。

で、私の部屋からは溪向うの、それも溪からや〜小高くなつた傾斜に出来てゐる村であるが其處などは餘程眼下に見下された。長い瀬となつて流れてゐる溪を見るには、窓から少し身體を乗り出して見なければ見えないほどの急な勾配になつて居るのである。此頃よく降り續いてゐる雨は私が此處に來てから三四日毎日降つてゐたが、場所が高いだけにさまでじめ〜と感ぜずに過すことが出来た。

眞下の崖も、宿から上の方に同じくずつと峻しく聳えて行つてゐる山腹も、ひとしく深い木立となつて居る。そしていま柔かな若葉が一面に萌え立つて居るところだ。

私が今度斯んな山奥の、たべものとても無い様な温泉にやつて來たのは、朝夕のごた〜に勞れてゐる身を休ませる事のほかに一つの用事を抱へてゐたのであつた。この三年間ほどに詠みすてた歌がいつの間にか随分の數に上つてゐる。それを整理して一冊の歌集を編む、そのためであつたの

だ。が、同じ行くならば今までに行つた事のない所へ行つて見度いと先づ思つた。そして地圖や噂の上で知つてゐる、自分の性に合ひさうな所を彼處此處と考へ廻した。現にこの川原湯の近くにも夙うから好ましく思つてゐた四萬温泉もあれば澤渡温泉もあつた。いろ／＼と感つた末、結局この川原湯にきめたのは温泉そのものよりもその近くに會て甚しく私の感興をそゝつた或る溪があるからであつた。例の關東耶馬溪と呼ばれてゐる吾妻川の或る一部の峽間がそれである。

この前其處を見たのは秋のすつと末、落葉の季節であつた。深く切れ込んだ峽間の、岩ばかりから成り立つた兩岸の山腹に生ひ茂つてゐる樹木は一齊にみな落葉してゐた。また思ひのほかはその岩山の木立は深くもあるし、老木ばかり揃つてゐた。瀬となり淵となつて流れてゐる深い溪をさし掩うたその裸木のさびしい木立に心を惹かれて立ち眺めながら、これでは嘸ぞ若葉のところがいゝだらうと自づと思ひ浮べられもしたのであつた。そして恰もいますみどりの若葉の萌え立つたところへ再びその溪間にやつて來たのである。私には先づこの事が何より幸福に思はれてならなかつた。

然し、私の様な昂奮しやすい者は斯うした場合によく失望を味ひがちである。或る時非常に感動して接した事で、後から見て實に苦笑にもならぬ落膽を覚えさせられた事が今まで幾度となくあつた。この溪に對してもまたさうではないか、と久しぶりに見る溪の面影を楽しく心に描きながらも少なからぬ不安を感じてゐたのである。ところが幸にしてそれは杞憂であつた。わが吾妻の溪は矢

張り私にとつて甚だ親しい眺めであつて呉れた。其處の若葉も、躑躅も房の短い山藤の花もまたよくわが永い間の期待にそうて呉れた。私は此處に來て以來もう幾度となく其處へ出かけて流に沿うた斷崖の道をあちこちと歩くのを楽しんでゐるのである。

温泉宿から十町ほど川下に下ると新大橋といふ橋が懸つてゐる。その橋に立つて川下を見るとツイ右手に白絲の瀧といふのがあり、その下手にそれより細くてあるかなきかのさびしい瀧が二つ懸つてゐるのが見ゆる。左手にも一つある。そしてすつと川上から廣い瀬となつて流れて來た吾妻川は橋を過ぐると直ぐ正面の大きな岩山の根に突き當つて形を消して居る。岩山は高さが百間餘もあらうか、たゞ一面の斷崖で、いまその巖々に躑躅が眞紅に咲き散つてゐる。頂上には松が並び、その斷崖の周圍をば他の若葉の深い山が包んで居る。普通いふ關東耶馬の溪は先づ其處から始まるのだ。橋を渡つて桑畑の中を一二丁下ると思ひがけぬ足もとの木立の下に急に瀧の落つる様などろきを聞く。前の岩山に突き當つた急流はその根に沿うて岩を穿ちながら左に折れて、渦とも瀬ともつかぬ形となつて其處に流れ出てゐるのである。そして更にそのまゝの形を續けて下の方へ激しい勢で流れ下つてゐる。その邊から溪の兩岸はすべてこゝしい岩壁となり、石や砂は無論のこと轉がつた岩とても其處らに影をとゞめない。道路はその急湍を見下しながら、左岸の中腹を鑿つて通じてゐるのだ。

それは誠に恐しい様なところがある。道の片側、溪に面した方には丁寧にすつと柵が立てゝあるが、それに手をかけながらも立つたまゝでは到底下の流の見て居られない所が多い。道から溪まで岩壁の高さがどの位あるであらう。或る所では流を挟んだ岩と岩との間隔がほんの一跨ぎか二跨ぎ、二尺か三尺にしか見えぬ所がある。恰度通り合せた土地の若者にあゝ見えて實際はどの位離れてゐるのであらうと訊いたところ、どんな狭い所でも二間はあるのださうだと答へて行きすぎた。その一跨ぎか二跨ぎにしか見えぬ岩の裂目の中を一河の水がぐるめき合つて流れてゐるのである。上流だとは云つてもその邊り吾妻川の水量は青梅邊の多摩川の二三倍は確かにあるのである。さうした狭い岩と岩との間をくるくくるく渦巻きながら流れ走つてやがて一つの岩壁に突き當る。其處でまた一つの大きな丸みのある渦を上げて、更に狭く深く岩を縫うてゆく。

私の今度見てゐる間は常に雨後の事で、水量も増し、濁つても居る。此前落葉の頃に見た時はすつと溪が痩せてゐたが、然し今とても流のすがたに變つた所はない。濁つてはゐても餘りに水の勢が激しいので殆んど何處を見ても濁りは見えず、すべて青みを帯びた白渦となつてゐるのだ。道路の場所によつてはその渦巻く水が曲折する事なくほゞ眞直ぐに岩溪の底を走つてゐるのを見下す事の出来る所がある。それはまことに静かな眺めだ。かゝり距たつた向うの岩の、若葉の蔭から眞白になつて現はれた流が濡れて黒く乾いて白い岩と岩との間を練りに練れて殆んど音をも立てないか

の様に流れ下つて來てゐる。それをぼんやり見下しながら立つて居ると自づと心に杳かな思ひが湧いて來るのである。また、更に離れた遙かな木蔭に一個所白くその渦のうち上つてゐるのを見出す事もある。其處で大抵流が曲つてゐるのだ。これもまた静かな心を誘ふ。時にはほんの眼下に前後を若葉に掩はれた二坪か三坪の間が大きな一個の渦となつてむくくと動いてゐる所もある。水瘦せて清らかに澄んだ日にはこの邊は必ず深い淵となつて藍色に湛へてゐる場所であるのだらう。

これらはすべて溪の流があらはに道から見下される眺めであるが、道の通じてゐる岩壁の蔭になつたりまたは木立の茂みに遮られたりして見えない所がかなり多い。然し、その響の聞えない場所としては全くない。暫く眼下の眞白な流に見惚れてゐてやがて歩みを移すと直ちに深い若葉が四邊を包んで、その溪も向うの山も見えなくなる。そして急に前とは趣を變へて脚もとの岩の蔭から聞えて來る流の響が獨りこの静かな溪間の空に滿ち渡る。自づと立ち止つてうしろ手を組むとか、蹲ヒクんで煙草に火を點けるとか爲たい様な氣持になつて來る。さうして耳を傾けながらその響の如何によつて大抵流のすがたも想像することが出来るのだ。或る所ではしゃアしゃアといふ様に聞え、或る所ではどうツどうツといふ風に響いて居る。

この溪間の道の逍遙を樂しませて呉れるものに、溪の流のほかには瀧がある。土地の人の普通に關東耶馬と云つてゐるのは前に言つた新大橋から下流約十二三丁の間、つまり道が岩壁を鑿つて通じ

てゐる間だけを言つてゐるのであるが、その短い距離を歩く間にもその對岸に六つか七つか小さな瀧を見ることが出来る。まことに小さいものであるが、普通の人には眼にもつかぬ様なそれらの瀧に却つて私は親しみを覚えさせられた。この溪を挟む兩岸に樹木の深い事はこの前此處を通つた時の紀行にも私は書いておいたが今度聞けばすべて官有林であるのださうだ。私もどうかこの溪間の林がいつまでもこの寂びと深みとを添えて永久に茂つてゐて呉れることを心から祈るものである。ほんとに土地の有志家といはず群馬縣の當局者といはず、どうか私と同じ心でこのさう廣大でもない森林のために永久の愛護者となつてほしいものである。若しこの流を挟んだ森林が無くなるやうなことであれば、諸君が自慢して居るこの溪谷は水が濁れたより悲惨なものになるに決つてゐるのだ。

その深い岩山の森の奥に湧く水はかなりに豊かであるらしい。山全體が凹凸屈曲のはげしい岩山であるために一個所に湧いた水は唯だそれだけの小さな路を作つて細々と溪の方に流れ出て来る。幾つもの泉から落ち合つて大きな流を作つてをしない。その小さな流の末が溪に落つるに當つて、殆んど悉くあるかなきかの寂しい瀧となつて岩の間に懸つてゐるのである。苔にくるまつた老木の根がたから一すぢの糸となつて垂れてゐるのもあれば、黒く濕つた岩壁の廣い片隅に何とも云へぬ清さ静けさ柔かさを持つて、ほそくくと流れ落ちてゐるものもある。餘程高い所から落ちてゐても、

大部分は木立に隠れて見えす、僅かにその末の雪の様に亂れ散つてゐるのが見ゆる所もある。滔々と流れ下る大きな瀧に對して私は多々珍奇の感のみ感ずるが、これらあるかなきかの夢のやうな瀧に對つてゐると、心の底に沈んでゐた人間の寂しさやものなつかしさがあからさまに身體を浸して來るのを覺えがちである。

新大橋から下流十二三丁、道の右手に木柵の盡きた所、即ち岩壁を出外れた所で馬車屋などのいふ關東耶馬溪は終る。其處から更に二三丁桑畑中の道を下ると雁が澤橋といふのがある。それを渡つて小高い所に出るとすつと下流に當つて打ち展きたいはゆる吾妻高原を遠望することが出来る。見渡すかぎりおだやかな傾斜を帯びた數十百の丘陵が恰もいま嫩黄色に萌え立つた若葉を被つて、波浪の様にうねり互つてゐるのである。そしてその中央どころに影は見えないが吾妻川の流れてゐるのが解る。夏のはじめの雲は其處に此處に眩しい光を含みながら散らばつて、見るからに爽かな大きな眺めを成してゐる。

それから背後を振り返るとツイ眼の前に當つて恰も掩ひかぶさる様に道陸神峠といふ峻しい山が聳えて居る。殆んど岩石から成り立つて形怪しいその山の複雑した巖から巖にかけても同じくまだ青み切らない柔かな若葉が濃く薄く萌え立つて居る。そしてその幾重にか折り疊まつた鋭い峰の向う

には底深い光を宿した初夏の空がくつきりと垂れ下つて、険しくは見えても案外に奥の浅いその山を孤立したものに様に浮き上らせて見せてゐるのである。まつたくこの山は附近に連互した群山の中で一つだけ立ち離れた姿をもつて聳えて居る。わが道陸神の溪は、——關東耶馬溪とはどうも感心した名稱でない、本物の耶馬溪すら山國川といふのを漢字音にもちつたものだといふではないか——實にその山の根を穿つて流れてゐるのである。遠く吾妻高原の遙かな風景を望み、顧みてまた道陸神峠の向う側に實に高く實に長く連互した群山を仰いだ心で見ると、何と云つてもこの不思議な形をもつて流れてゐる溪流は大自然のなかに寄生してゐる一小風景に過ぎぬと思はざるを得ないのである。さう思ひながら眼前の峻しい峠を仰ぎ、その麓の溪の流をおもふと、私にはまた一種の可懐しい微笑が浮んで來るのである。

雁が澤橋を渡つて下ること二丁ほどの所に北に折れて川中温泉といふへゆく小さな徑がある。その分れ目の所に一軒の茶屋がある。私は自分の温泉宿を出て溪間をその茶屋まで下つて一本の濁つた麥酒を飲んでまた谷奥へ引返すのを常とした。さうして渴いた喉を沾ほした微酔の身で長い瀬と白い渦との靜かに流れてゐる峽間に入り込むと、もう其處には寄生風景も大自然も何もかもない、唯だ靜かなおだやかな心境のみがあるのを感じるのだ。

呼子鳥が啼いてゐる。來た當座は聞かなかつたが、一昨日あたりから頻りに啼く様になつた。聞けることゝ楽しんで來た杜鵑も郭公も土地にゐないのか季節のせぬかまだ一度も啼かぬのに漸くこの鳥を聞いて安堵した。この湯に來て既う八日を経てゐるのだ。初めよく降つた空も昨日あたりから晴れて來た。これで漸く天氣も定るのだらう様に思はれる。

爲事は一向にはかどらない。この二三年に詠んだ歌を寄せてみると案外にも千首を越してゐた。それを机の上に置いて何とも云へぬわびしい思ひで眺めながら清書することにすら苦しくてゐる。歌を見るとよく解る。一昨年今日は山城の比叡山に登つてゐた。昨年今頃は上州の榛名山に登つてゐた。毎年この若葉の頃になると必ずの様にか家を旅をして居る。私にとつてよく／＼心の落ちつかぬ季節らしい。その時々歌を見ればそれが解る。今度はその歌すら出來ないで、唯だ出たり入つたり湯にのみ甘えて居る。そして晴れ／＼ば例の溪間へ出かけるのだ。

二三日うち、私は持つて來た爲事を斷念して此處から草津に登り白根山を越えて信州の澁温泉の方へ出たいと思つて居る。

草津より澁へ

五月廿二日 曇 のち晴

案内者は六十歳近い老爺であつた。見るからに好人物らしいのが先づ私の心を軽くした。昨日までの日和下駄を草鞋に代へて出懸ける。午前六時であつた。庭さきの時間湯では早や既に例の湯揉みの板が烈しく鳴り出してゐた。左様なら不思議な時間湯、いつか私もお前の厄介になりやつて來度いものだ。

この窪地の温泉町を出外れると直ぐ落葉松林に入つた。道はこの廣大な高原の傾斜と共に断えず軽い登りとなつてゐた。限りなくつゞいた落葉松の高さは一問半から二問ある。土地が寒くて痩せてゐるため、樹齡はこれでも既に三十年を越えてゐるだらうと案内者の吉田孝太郎爺は言つた。す

べて官有林であるのださうだ。そしてこの落葉松林の中の其處此處にはこの林の枯枝を拂ひ下草を刈る事によつてのみ生活を営んでゐる人たちが棲んでゐるといふ。

『それア人間といふのは名ばかりだアね、第一米といふものを喰はねエで生きとるだからナ。』
孝太郎爺は斯う言ひながら、前こどもになつてのそり／＼と私の前を歩いて行く。

郭公が啼いてゐる。戀しい聲であつた。朝曇のうそ寒い空には雲が低く垂れて、果のないこの落葉松林を掩うて居る。その間で唯だ一羽が啼いてゐるのだ。初めはやゝ離れたあたりで啼いてゐたが次第に聲が烈しくなり、我等の歩いてゆく近くに啼き移つて來た。そして四五町さきのたけ低い林の梢から梢を飛ぶ姿まで折々見え出した。案外に大きい鳥である。僅かに芽を吹いた林のうす青いうへをすれ／＼に餘り敏捷でないその鳥の飛ぶ姿は耳近く聞くその聲と共にあはれに寂しいものであつた。

『あれはハツボウ鳥だアね。』

老爺は私の注意深い姿を振り返りながら言つた。

落葉松林の次第登りになつた傾斜のはてに全部白々と見ゆる枯木の原が私の目を惹いた。まことに針の様に一本々々が眞白く立ち竝んでゐるのである。何年前とかの白根山噴火のあとだといふ。その枯木林に續いて山は次第に灰白色となり、薄い代赭色となつて其處に鋭い白根山の頂上が見ゆ

る。今は煙も断えてゐるといふが、脚早いらず雲が煙の様にそのあたりを走つて居る。枯木林から少し下つては白い枯木と殆んど眞黒く見ゆる針葉樹との相混つた廣い林となりやがてこの落葉松林となつてゐるのだ。

それらの林の其處此處に雪が望まれたのだつたが、草津から一里半も來た頃には落葉松の林の盡きると共に我等の脚もとに埃によごれたその大きなかたまりがぼつ／＼と見ゆる様になつた。いつもさう爲つてゐるらしいとある場所に來ると、孝太爺は道からそれて、

『此處で一服やつて行きませう、これから上は雪になりますだデ。』

さう言ひながら、負つてゐた荷をおろし岩の上に腰かけた。薄日が雲を漏れて、きたない其處らの雪の上にさして來た。私も老爺の側に行つて腰をおろす。

曇つてはつきりと見えぬが、其處からはよく遠望が利いた。淡い光を宿した雲から雲の間に並び立つてゐる遠い山の影は昨日草津までの途中で見たより更に廣く更に遙けく展開して眺められた。何を云つても其處からは淺間が最もよい。高山に登らねば高山の姿はわからぬといふ、輕井澤や小諸あたりから見馴れた淺間とは思はれぬ位秀れた高さ大きさを持つて中空に聳えてゐるのである。

晴れればその向うに富士も見えるといふ。日光の具合か、上野下野方面の山は多く雲にかけり、越後境の連山はその輝いた積雪と共にはつきりと見渡された。この年老いた案内者はどれを尋ねても

殆んど判然と山の名をば知つてゐなかつた。

眼を落すと海拔四千五百尺の高さを以つて誇つて居る草津温泉が遙かな眼下の高原の一點に僅かにほの白く見下された。その邊一帶は草野に似た落葉松の原が續き、少し登つての右手には枯木と眞黒な老樹との混つた荒れはてた、原始的な山林がゆるく浪打つた山肌なりに廣々と起伏してゐる。曇つてゐるだけに却つてこの手近な一廓の眼界は或る沈んだ明瞭さを以て見渡された。その明るく澄んだ原野の何處でか、唯だ一つ例の郭公の啼いてゐるのが聞ゆる。地を打つ様な斷々なその聲は、聲から聲を追つて少しの斷間もなく眼下の廣大な窪みの中から起つてゐるのである。

そのさびしい聲を耳に残して程なく我等は其處を去つた。そしてとある山の背を廻つて今までとは異つた方角の一つの境界に面する事になつた。それと共に雪も多くなつて、雪と土とを半々に踏んで歩く様になつた。その道から右手向うの澤にすつと打ち開けて眺められた森林は思はず私に驚きの聲を擧げさせた程見ごとのものであつた。其處には噴火の時の影響が全く無かつたらしく、少しも荒らされた痕がなくて、昔ながらの森のまゝに深々と静もり茂つてゐるのだ。矢張り眞黒く見ゆる針葉樹林で、老爺に訊くと樺、梅、があらなどの樹木から成り、諸所さうじの木、の落葉した白い梢がうつすら赤みを帯びて混つて見えた。さうじの木とはあとで白樺の方言であることを知つた。があらとは梅によく似た木で、土地の者はこの木で専ら箸を作つて職としてゐるといふ。その老木

たちの黒い葉や枝は全く曾つて見たことのない鮮かな深いつやを帯びて私の眼に映つた。ことにこの大森林を美しく見せるのはその森全体の地面に置渡して枝葉がくれに見えて居る雪である。雪もまた他の露出した場所に凍てついてゐるのより遙かに清らかに見えた。何と云つても既に五月の末である。この高山の森にもいま治ねく春が廻つて来つゝあるのであらう。この見ごとな森は我等の通りかゝつてゐる山腹の根方の廣い澤全體を埋め、更に遙かに延びて向うの峰まで及んで居る。先刻郭公の啼いてゐたあたりの荒れた森といひ、この茂つた森といひ、共に私としては生れて初めて見る種類のものであつた。

その森を眺めながら或る澤の雪の傾斜を登りかけてふいと孝太爺は立ち止つたが、いま私どもの立つてゐる足の下雪の深さは十間からあるだらう、そして七八間の下の深い所に橋が埋つてゐるのだと言ひ出した。今年は三四十年目の深い雪であつたさうだが、それにしても餘りの事に私は舌を巻いた。その澤を通り過ぎて芳の平といふに出た。其處で白根山の噴火口道、及び萬座山中の萬座温泉に行くべき道は分れて居るのださうだ。そして夏にでもなれば茶店が出るさうだが、いまはたゞ一面の雪の原である。仰いで見る噴火口の赤茶けた山嶺には相變らず雲が忙がしく流れてゐた。その芳の平に二つの小さな池があつて、近年まで浮島が浮いてゐたさうだが、今は無くなつてゐた。その側を通り過ぎて少し行くと急に山が峻しくなつてあたりが一面の森となつた。雪はいよゝ／＼深

くて、全然もう地の影など見ることは出来なくなり、梅だの、があらだの、枝や幹が雪の中から折れ傷んで現れてゐる。

今までにもさういふ所があつたが、その邊からは全然道路といふものを見ることが出来なくなつた。そして案内者は單に自分の見當をたよりに梅や樅の梢の出た雪の上を何處といふ事なく登つてゆくのだ。これも生來初めての経験なので、私は初め浮かれ心地に面白がつて登つて来たが、山が次第に峻しく、遠くも近くもすべて雪に掩はれた森の中に入るに及んで自づと一種の恐怖に捉はれ始めた。恐怖とまではゆかずとも、一目見るにも一步踏むにも少しもゆるがせにせぬ嚴肅な氣持である。

思ひもかけず此處で杜鵑の聲を聞いた。恰度霧の様な雲が我等の周圍を掠め走つてゐる時であつたが、かなり離れた方角で極めて突然にしかも惶しい聲で啼き始めた。その聲の方を振り返つて見ると山續きの向うに同じく雪が一面になだれて壁の様に峻しく聳えたあたり、黒い縞を成して樹木が亂れ立つてゐる。その邊からその鳥の聲は落ちて来るのであつた。老爺のあとにくつ付きながら、五尺八尺と老木の梢ばかりが現れて靡いてゐる雪の山腹を歩むこと半道ほどで、漸く峠に出た。この澁嶺は草津から峠まで三里、峠から澁まで四里あるのださうだ。

峠には風があつた。今歩いて来たとは反對の溪間から雲のちぎれが頻りにまひ昇つて来るのであ

るが、それでも峠の附近僅かな平地には薄々とした日が射してゐた。以前あつたといふ茶屋のあとが幸に風をよけ、日を受けてゐるので、其處に虎杖草の枯枝を折り敷き更に蓆を敷いて晝飯の席を作つた。時計は十一時であつた。何よりも先づ私は持たせて來た酒の壺を取り出したが、さほどとは思はなかつた山の雪の意外にも深いのを知つたので、とても飲む勇氣はなかつた。僅かにちびり／＼と舌のうへに零すのだが、その味ひはまた格別であつた。孝太爺も用心してほんの型ばかりしか受けなかつた。

我等の坐つて居る山の背は恰も信州と上州との國境に當つてゐる事を知つた。坐つて左手に見やる山から山は上州、右手に見下す雲がくれのそれらは信州の峰である。風の當るせぬか日光のためか、我等の坐つた附近の木根がたなどにはほんの僅かばかり雪が解けて地面の表はれた所がある。そして其處をば必ず微かな水が流れてゐる。氣をつけて見るとそのかすかな木の根の雪解の水も或るものは上州に向つて流れ或るものは信州の方へ清らかな筋を引いてゐるのであつた。

歩いてゐるうちは汗をかいてゐたが、暫く休んでゐると寒さのきびしいのが解る。とにかく風もひどいのだ。充分に休みもせず、飯を終ると直ぐ出かけた。

雪は更にこちら側が深かつた。併し下り坂なのと木が少いので、今度は老爺より先に立つて兩手を振りながら駆け出したりした。が、中には怖い所があつた。何百間か何千間かの高い斜面の雪

がまん中どころに多少のふくらみを帯びてなだれて居る。そのふくらんだあたりを横に切つて通るのである。身體をも斜にし、一歩々々其大斜面の雪を抱く様にして通りすぎた。

一里半も雪の中を下つて一つの打ち開けた澤に出た。そして其處に草津を出てから初めて一軒の小屋を見た。例のがあら木で箸を造る者の住んで居る小屋である。知合と見えて案内の老爺は私を誘つて小屋の中に入つて行つた。中には一人の痩せこけた男が大きな爐に櫓を焚いて、木屑の中に坐つてゐたが、やがて煮立つた罐子から澁茶を酌んで呉れた。『旦那は峠のものがまだ残つてゐたらう、此處まで來ればもう安心して飲んでいゝから』と孝太爺の出して呉れたのを自分も飲み、爺や小屋の亭主にも勧めた。茶飲茶碗に二三杯づつしか無かつたが、それでもいゝ氣持になつた。

其處へまた戸をあけて男が二人入つて來た。一人は四十歳位の土地者で、一人の二五六歳の若者は洋服をつけて髯を立てゝゐた。二人は小屋に入るなり酒と罐詰とを出して飲み始めた。そして空壺を側に置いてぼんやりしてゐる我等に勧めて呉れた。洋服の男がこれから草津へ越えるので、一人はそれを此處まで見送つて來たものらしい。

一二杯馳走になつてゐるうちに小屋の亭主と四十男とは此頃一緒に飲食した時の割前の事で口論を始めた。次第に聲高になつて行つたが、どちらつかずに納まつた。そして今度はとりなし顔に持ち出された婿取話に花が咲いた。

『お前ん近くに心當りは無えかなア。』

『さうよ、あるにはあるが、片眼が不自由だデよ、年は三十一二で丁度いゝがなア。』

『片輪ぢア話にやアならねエ、第一客商賣ぢアねエか。』

『さうよなア、それもさうぢやが二人も子供があつちやア、さうちよつくらちよつと婿になり手も無からうに。』

『どうだね、僕がならうかナ。』

さう洋服の若者が茶々を入れて笑ひ話になつたのを機に私は老爺を促して其處を出た。

もうその澤には雪は無かつた。澤とは云つても山の一部分が平坦な高原をなしてゐる様な所で土地が瘠せて畑地にはならず、夏場だけ此處に馬を放して牧場にするのださうだ。

『彼處に見えるのが今婿取の話のあつた温泉宿だ。』と老爺に言はれて見下すとすと下の溪間に一軒荒れた藁葺の在るのが見えた。人の住んでゐる氣勢もなく、四邊には雪がまだとつぷりと残つて居る。其處に僅かながらも甚だ效能のある湯が湧いて、冬はあの通り雪に埋れて駄目だが、夏になれば宿を開いて客を迎へるのだといふ。その湯宿の主人たちが相次いで死に絶えあとに残つた一人娘の十七歳になるのに一昨年婿をとつたが、昨年直ぐ子供が生れるとそのあとを追うてその婿も流行感冒で死んで行つた。そして現にその残された若い嫁のおなかには子供が宿つてゐるのださう

だ。それを皆氣の毒がつてあゝして第二の婿を探してゐるのだといふ。

『そしてあの小屋にゐた洋服の男は何だね。』

私が尋ねると、案のごとく彼はこの邊の官有林に勤めてゐる役人であつた。送つて來た四十男は官有林から伐り出す竹で細工物を造つてゐる竹細工屋であるのださうだ。

『あの竹がそれでやすよ。』

と老爺の指さすのを見ると我等の歩いてゐる溪向う一帯が一面の深いさうじの木即ち白樺の林で、その下草に竹が青々と伸びてゐる。さうじの木は元來何の役にも立たぬぐらたら木だが、あゝして竹を丈高く伸ばすためにのみ林として残されてゐるのださうだ。そのさうじの木の林の何といふまた見ごとなことであらう。

いづれも二丈三丈に伸びた大きな白樺である。幹の方はいづれも眞白で、梢にかけては葉を吹くに間近なためかうす赤みを帯びて細かく繁く枝をかはして居る。うち仰ぐ山の半面が殆んど全部その白樺の森で、參差として立ち込んでゐるのである。この木の森で斯うした見ごとなものを見たのも生れて初めてあつた。五月の末に雪の中を三里餘も歩くといふことから初めて今日一日の旅は私に幾つかの新しい經驗を得させて呉れた。この林の若葉のところ、黄葉のところ、嘸かしと思はれながら飽かず眺めて通り過ぎた。

暮岩、燕岩など附近の名勝となつてゐる珍しい大きな断崖の下を溪に沿うて下つて行くと、琵琶池といふ山中の池としてはかなり大きな池があつた。先日來續いた雨の後で澄んだ水はいつばいに湛へ、まだ冬のまゝの岸の落葉樹の林の影を明らかにうつしてゐた。この邊でもまだ海拔四千六百五十尺からあるといふ棒杭が建てゝあつた。それを過ぎてなほ下ると道の左手に振返つて望まる偉大な瀧がある。溯滿瀧といふ。

高さ三百九十尺、幅六十二尺と認めた路傍の棒杭は兎もあれ、とにかく珍しい瀧らしいので道からそれて見に行つた。瀧の懸つてゐる所から下の溪は兩岸とも何十尺かの深い断崖となつて切れ込んだまゝずつと續いてゐるので、瀧の下あたりに近づいて仰ぐことは出来ない。岸の断崖の一部に遠望する場所がとさへあつて、其處から三四丁の間隔をおいて望むのである。瀧と云へば大抵樹木鬱蒼たる中に懸つてゐるのを常とする。鬱蒼とまではゆかずとも岩山の蔭とか峽間はざまの奥とか必ずうす暗い様な場所にのみ私共は見馴れて來た。ところが、溯滿瀧は全くさうでないのである。瀧の落口の左右はずつと打開けた様な高原で——その遠望に今私が見て通つて來たさうじの山や燕岩等の峻崖はあるが——瀧から川下は左右とも全然の禿岩と云つていゝ位丸裸體の断崖である。そしてよくは解らないが、瀧は多分南か西か、或はその中央かに面して落ちてゐるのである。水量とても貧しくないそれがいま太陽に向つて赤裸々に三百九十尺を落下してゐる姿は歩き勞れた私の心に

少なからぬ昂奮を覚えしめた。禿岩とは云つても左右の断崖には小さな雑木がばら／＼と生えてゐて、まだ冬のまゝの明るい姿を保つてゐるのも寧ろこの瀧にふさはしく眺められた。ことにその雑木の中に二三の山櫻の花のほころびかけてゐるのも風情があつた。その位の高さなので瀧は幾つかの荒い縞を作つて落ちてゐた。そして瀧そのものよりその下の溪流が湛へつたぎちつ、自分の立つてゐる断崖の下を細々と流れてゐるのが更に私の目を慰めた。暫く崖の上に横になりながらこの珍しい瀧を眺めて時を過した。

それから杉の植ゑ込まれた山と山との間の急な坂を下りて程なく上林温泉の横を過ぎ、一つの橋を渡つて家の建ち込んだ温温泉に入った。そして其處の津端屋といふのに草鞋を解いたのは正に五時であつた。

『旦那の脚の達者なものには魂消た。』

と孝太爺にほめられながらも一度湯に入つて二階の部屋に上らうとすると、兩方の脚ともまるで筋金入りの様になつてゐた。

鮮かな西日が窓から一杯に射し込んだ部屋に眞裸體のまゝ打ち倒れながら、思はず知らず、

『やれ／＼。』

と聲に出して言ひ出でた。

信州に入ればもうこつちのものだと思はれたのだ。四方の勝手も解つてゐるし、知人も多いし、何だか自分の郷里に入つた様な心安さが自づと胸の底から湧いて来る。

『やアれ〜。』

と繰返しながら、どうして今夜この歡びを表はしたらいいものだらうと考へ始めた。

山 路

朝八時、案内者と共に白骨温泉を立つ。逗留二十日の馴染で宿の者は皆出て来て名残を惜んで呉れる。ことに今まで誰がそれだか氣もつかなかつた無口の内儀などは急に勝手許から飛んで来て、既に草鞋をつけて土間に立つてゐる私の袂をとらへて、これは俺からあげるのだからと言ひながら手拭やら煙草やら菓子包やらを無理強ひに押し込んで呉れた。

送られて裏の背戸口を離れると直ぐ切り立つた崖の森となつてゐる。峻しい徑にかゝると其處には眞新しい落葉が堆く積つて、濡色をした美しい橡の實も澤山落ちてゐた。三四丁も登ると崖は盡きて山間の枯芒のなかをとろ〜降りることになつた。着物や着莫産の端に觸れて頻りに音をたてながら芒の霜が落つる。この邊の霜は雪ともつかず氷ともつかぬ細かな結晶となつてゐて地と

は草木の枝葉といはず、一面に眞白に置き渡してゐるのである。

立 先につてその荒い霜を落しながら歩いてゐた老案内者は不意に徑からそれて傍の雑木の中に入つて行つた。そして高い背を屈めて頻りと何かを探してゐる。やがて一種の昂奮をその赭ら顔に見せて林から出て来た。如何したのだ、何があつたと訊くと、イヤ熊が出たといふ。熊はこの深山に圓い土の塔を作つて棲んでゐる蟻の群を好んで食ふので、先刻から熊の足あとらしいものをちよいちよいい見て来たのだが、いまその蟻を食つた跡があつたので愈々さうだといふことが解つた、而もその跡の乾いてゐる所を見れば一昨夜の雨より後、昨夜あたり出たに相違ないといふ。此邊にも出て来るのかと呆れれば、どうして——温泉宿の勝手口の裏にもよく餌をあさりに來るといふ。

蟻の巢の跡を見てからこの七十歳前後の老人は急に雄辯になつた。そして自分のこと他人のこと、いろ／＼な熊狩の話をしだした。一人で年々七八頭も打つものがゐるが、それ等はそれで十分一年の生活費が得らるゝわけだけれど皆博奕に打込むので、もと／＼だとも笑つた。昨今はよほど熊も少くなつたが、まだ／＼向うの、と我等の歩いてゐる溪向うに大らかに峰を張つて朝日を浴びた木深い山を指さしながら、霞澤嶽などにはかなりの數が棲んでゐるだらう。現にもう今年もあの山で一頭打つた者がゐたが、まだ鑑札日の前だつたので値段はずつと安かつたさうだ、と語りながら、ふと氣づいた様に、

『今日からが丁度鑑札日だが、宿の總領もあとから若い衆打ちに來る筈だ。』

といふ。成程その日は十月十五日、銃獵の解禁日であつた。若い衆とは何だと訊くと、猿の事ださうだ。そして、俺も旦那のお供をしねエと總領と一緒に來るのであつたと如何にも残念さうに言つた。お前もそんな歳をしてゐてまだそんな荒獵をやるのかと笑ひながら振向いて老爺の顔を仰ぐと、熊打にはもうよう出かけねエが若い衆位なら何でもねエ、去年は七尺からある大鷲を打つたが、斯んな山でもあれ程の鷲をば皆珍しがつたとやゝ、れ氣味に自慢する。そして話は鷲に移つて、折々田畑に出てゐるとこの大きな鳥が飛んで來て被つてゐる手拭を浚つてゆく、それも若い者と老人とをよく見分けて老人のばかりを狙つて來る、然し俺はまだこの歳になるが一度も浚はれた事がない、老人でも少し違ふのが鷲にも解るらしいとまた自慢である。手拭をば巢を編む材料にするのださうだ。温泉宿に乾した着物なども浚はれる事があるといふ。

『この山だよ、若い衆の居る山は。』

溪ばたに出て一里ほど來て、徑が再び山腹の傾斜を登る頃、老爺は立ち止つて私に教へた。我等の歩いてゐる大きな傾斜は一面に荒れた野原となつてゐた。火を放つて焼いたあとらしく、二抱へも三抱へもある大きな白樺の幹が大方は半ば燃えたまゝに立ち枯れてゐた。そしてその跡には落葉松の苗が井條式に植ゑられてあるのだが、多くはまだ芒の蔭となつてゐる位の大きさであるの

だ。その野原の續き、山の頂上に近いあたりから深い森となつてずつと奥に茂つて行つてゐる。その森を彼は指してゐるのであつた。森はまた見事な紅葉の森であつた。こんもりと立ち竝んだ喬木から喬木がいづれもまだ渦を卷いた様な茂みをなして、そして残りなく美しく染つてゐる。思はず舉げた私の讚歎の聲を聞いて案内者は言つた。

『さうだ、今日あたりが丁度さかりづらよ、明日明日となるとヘエ散るだから。』

私は雨ばかり續いた温泉宿の二階から其處の溪向うの山を毎日眺めてゐたのであつたが、丁度昨日一昨日その長雨があがると同時にほんとに瞬く間に見まがふほどの紅葉の山と染まつたのを見て驚いたのであつた。高山は季節を急ぐといふ。今日見てゆくこの紅葉もまつたく明日は枯木の山となつてゐるのかも知れない。

枯芒を折り敷いて我等は暫く其處で休んだ。其處から燒嶽が手近く眞正面に見えた。我等の休んでゐる山と、向うの霞澤嶽と次第に奥狭く相迫つた中間の空にあらはれて見えるのである。燒嶽と硫黄嶽と二つ竝んだ火山からは相連なつて濛々たる白煙を上げ、その煙は僅に傾いて我等のゐる方角に靡いてゐるのであつた。けふは別しても煙が深い様に見えた。時とするとほんの一筋二筋、それこそ香の煙の様に立ち昇つてゐることもあるのである。けふは山の根方からも中腹からも頂上からも山全帯が薄白く煙り立つてゐる様に見ゆる。

『この天氣も永くねエな、煙が信州地の方へ向いてゐるだから。』

老爺は煙草の煙を吹きながら私と同じ莫座に坐つてゐて言つた。

『ホウ、あの煙の向うは飛驒かね。』

向う向きに飛驒に靡けば晴れるといふことを聞いて私は言つた。そして我慢してゐた慾望が腹痛の様に身内に起きて來るのを覺えながら、それを押し靜める如くひそかに息を呑んだ。そして自分も惶しく一二本の煙草を吸ひすてたが、やがてツイ側の老爺の顔に微笑を投げ乍ら言つてみた。

『ねエ爺さん、お前さんはどうしてもあの山に登るのはいやかね、ほんとにそんなに危険なのだらうかな。』

老爺も私の微笑を感じる様に矢張り向うを見たまゝ薄笑ひして、

『登れねエことはねエだが、何しろもう永いこと登つて見ねエだからなア、路がどうなつてゐるだから、』

『上高地の宿屋で今夜詳しい事を訊けばいゝぢやアないか、大體の事はお前よく知つてゐるわけなんだから、路だつてさう大した變りはないだらうよ。』

私は持病の胃腸によくきくといふので遙々駿河からこの信州の白骨温泉といふへやつて來て三週

間ほど湯治してゐた。島々郵便局所在地から八里もあるといふ全く世の中と隔離した山奥の温泉場であつた。乗鞍嶽の北麓に當り、海拔四千八百尺、温泉宿の裏山に登ると殆んど相向ひにこの火山と對することが出来た。そしてどうかして一度その煙の傍まで登つて行きたくてたまらず、頻りに機會を窺つたが不幸にもその滞在中殆んど雨ばかりが續いて、よく完全に朝から晴れたといふ日がなかつた。漸くその天候の定まりかけた頃になると私は其處を立たねばならぬ日取に當つてゐた。それも初め入つて來た松本市へ出て行く道を歸るが惜しく、白骨から上高地温泉へ出、其處から飛騨へ越して平湯温泉といふへ廻り、更に飛騨の都高山町へ出て遠く越中路へ歩き、富山市から汽車で駿河へ歸らうと定めたのであつた。そして白骨から上高地へ、上高地から平湯への道を地圖で見ればすべてこの火山の麓を通ることになつてゐるのである。そこで宿の者呼んで焼嶽登りの相談をして見た。どうせ山深い道を通るのでから平湯までは案内者を伴れなくてはならぬが、それにしても今頃は焼嶽登山は危険である。第一あの山をよく知つてゐる案内人がいまこの湯にゐない、八月二十日頃を先づ登山期の終りとしてあるので其頃までだと幾人もゐるのだが……と番頭は言つた。更に主人に逢つて訊いてみると、平湯までは誰にでも案内させるが、焼嶽は先づ無理でせう、何しろもう十月の半ですから、と言つて笑つた。さう言はれて見ると私も笑つて諦めねばならなかつた。そしていよいよ昨夜、平湯までならこの年寄が詳しいからと案内人の定まると共に、それとな

く案内人自身にももう一度私は謎をかけて見た。そして矢張り同じ結果を得てゐたのであつたのだ。この背の高い、年老いた案内者はそれでも此處に來て終に私の熱心に動かされた。今夜上高地温泉でよく訊いてみて、あまり昔の道と變らない様だつたら一つ登つて見ませう、なアに、行つて見れば何程の事も無いに相違はないのだから、と言ふ様にまでなつて呉れたのだ。私は思はず立ち上つて遠く眞白な煙に向ひながら帽子を振つた。そして何といふことなく一聲二聲の大きな叫びを擧げた。すると老爺も惶て立ち上つてその大きな掌を振つた。

『あんまりあの邊で高話をして若い衆を追ひ散らすでねエと今朝總領が言ふとりました。』
と笑ふ。成程さうかと、もう一度私はこの深い色に燃え立つてゐる頭上の大森林を見上げて新たな讚美と歡喜の情を致した。

徑は程なくその森つゞきの密林の中へ入つて行つた。誠に驚くべき樹木である。いろ／＼と木の名をも尋ねたが、一番眼についたのは山毛櫨なであつた。いづれも幹の直徑二尺から三尺に及び、おほかた青い苔を纏うて眞直ぐに天に聳えて行つてゐるのである。それが十本二十本百本と次ぎ／＼に相聳えてすく／＼と伸びた大枝小枝のさきに鮮黄色の葉をつけてゐる。既に地に散つてゐるものもあるが、まだ枝にある方が多い。まことに今日を盛りの黄葉の木であり森であるのであつた。この木の葉は朴に似てやゝ小さく、長さ八寸幅二寸位、朴よりも繁く枝についてゐる。そして同じく

葉脈のすぢを浮かして見せるほどの鮮かな色に黄葉してゐる。中にはまた常磐樹の柀もあつた。柀も立つてゐた。柀などの老いて倒れたあとは其儘に小さな野菜畑にもなりさうに廣く苔づいて朽ちてゐるのがあつた。到る所のそれらの朽木には種々雑多な茸が生えてゐた。食へるもの、毒なもの、間に置けば光るものなど、私には到底見分けもつかず名も覚えられないものであつた。そのうちでも美味なものといふのを老爺は行く／＼もぎ取つて行つた。今夜宿で煮て貰はうといふのである。國有林であるといふこの森林を我等はたゞ黙々として一時間も一時間半も歩いて行つた。行けども／＼たゞ樹木であり、幹であり、黄葉であり、落葉であるのだ。洩日の美しい所もあつた。じめじめとすら冷たい日蔭をくゞつて行く所もあつた。たま／＼からりと晴れた所に出たと思ふと、直ぐ足もとから下が何千尺の山崩れとなつた断崖の上に立つてゐるのであつた。

丁度さうした崖に近い所にちよろ／＼と水が流れ落ちてゐた。日を真正面に受けて、下を覗けば目眩く高さだが、徑のめぐりには綺麗に乾いた落葉が散り敷いて極めて静かな場所であつた。其處で我等は晝食をすることにした。時計も折よく十二時にほどなかつた。

落葉の上に坐ると、遙に崖下に白々と輝いて流れてゐる溪が見えた。梓川の上流であらねばならぬ。單に山崩れの場所といはず、附近の山全帯が屏風を立てた様な殆んど垂直の峻しい角度で雙方

に切り立つて起つてゐる底をその溪は流れてゐるのであつた。其處に見え、なほすつと上の方にも見えた。すべて激しい奔流となつてゐるのであらう。飛沫をあげて流れてゐる雪の様な白さである。我等の眼の前に一本の楓の木が立つてゐた。さほど大きい木ではなかつたが、清らかに高く伸びてゐた。その紅葉も眞盛りであつた。一葉二葉と酒の香に似た秋の日の光の中に散り浮いて来る小さな葉は全く自ら輝くものゝごとくに澄んだ光を含んでゐた。山路の葉で傍への清水を掬んで咽喉をうるほしながら永い時間をかけて、そして何となくうら悲しい様に静かな心になりながら握り飯を貪り喰つた。歌が一二首出来る。

うち敷きて憩ふ落葉の今年葉の乾き匂

ふよ山岨道に

うら悲しき光のなかに山岨の道の邊の

紅葉散りてゐるなり

其處を立つて暫く行くと上高地に行く道と平湯に向ふのとの分れる所に來た。明日は焼嶽から降りてまた此處を通つて飛驒へ越すのだナ、と話し合ひながら右に折れた。また暫く森が続いたが、やがて思ひがけぬ異様な場所に通リ懸つた。今まで續いた密林と截然たる區劃を置いて其處には全部白々とした枯木の林立があつた。枝は折れて巨大な幹のみ聳ゆるもあり、ばら／＼と白い枝を張

り渡して枯れてゐるもある。これらはみな數年前、大正二三年の頃の燒嶽大噴火の時にその熱灰を被つたものであつたのだ。なほ少し行くと次第に枯木は盡きて、終に山肌一面が眞白に崩れ落ちてゐる所に出會つた。此處を通るはかなり危険であつた。上下何百丈かにわたるざら／＼とした崖を横に切つて紐の様な徑がついてゐるのだが、兩足を揃へては立ち停る事も出来ぬほどの狭さである。自然崖の腹を兩手で抱く様にべつたりと身體を崖に寄せて片足づつ運ばすのである。心して踏むその足許からは斷えず音を立て、白色の土塊が落ちてゆくのだ。ばら／＼と崩れ落ちてゆく遙かの下には梓川が岩の間を狭く深く流れてゐる。

其處を過ぎると廣大な川原に出た。たゞの川原でなく、山の火の流れたあとの川原である。見る限り、浪の起伏に似た岩石の原となつて、ところ／＼に例の骨ばかりの枯木が梢を見せてゐる。そして其處からは直ぐ眼の上にその火山のあらはな姿が仰がれた。遠くから望んだ通りに、この火山の煙は山の八合目ほどより上の到る所から煙を噴いてゐるのであつた。濛々とした煙は今は空をさして立つことなく、山に沿うて我等の立つてゐる眞白な川原の方にしめりを帯びて流れ落ちて來てゐるものゝ如くであつた。

異様な緊張が私の心に起つた。そして、靜かに杖を兩手に執つて見廻すと徒らに廣いその岩の原の中にはもう徑といふものがないが、夏を過ぎては往來もないらしく、稀に通つた人の

足あととは先日來の長雨ですつかりかき消されてゐた。老爺にもよく行くさきの見當がつかかなかつた。で、兩人して手分をしてあちこちと適當らしい方角を選んで岩から岩を渡つて行つた。そして其處に私は舊い地圖には記されてゐない一つの大きな池、豫ねてよく話には聞いてゐる大正池といふのを眼の前に見た。

大正池は噴火の熔岩が梓川の流を堰き留めて作りなした池である。蒼々と湛へられた池の中には先に見て來たと同じい枯木の林が白々として梢を表はし、枝を張つてゐるのである。さうした森全部を地殻と共に此處まで押し流して來たのか、それともまだ以前の森のまゝでゐる間に下を堰かれて水に浸つたものかであるであらう。私は見失はない様に岩の中の最も巨大なもの、傍に案内人を置いて獨りでその池まで石原を横切つて行つた。池の近くには流石に瘦せた熊笹などが疎らに生えてゐた。水は眞蒼に澄んでゐた。汀から急に深くなつた水中の枯木の幹や枝には藻草が青く纏つてゐた。そしてその中には何やら小魚の群などでも潜んでゐるらしく眺めらるゝも寂しかつた。三四町の幅をおいた池の向うには岩ばかりから成り立つた険しい山が恰もその池を抱く様にして聳えてゐた。何の聲なく音なく、たゞ冷たく湛へた水と、いつか夕づいて來た日の光とが私の眼の前にあるばかりであつた。

急に寂しくなつて、私は水際を離れた。大股に岩の原を歩き出して見返ると、例の大きな岩に登

つてわが老爺は頻りに煙草の煙を吹いてゐた。言葉少なになつた兩人は折々聲をかけ合せつゝ次第にその岩の原を渡り終り、また一つの森の中に入つた。これは殆んど梅の木から出来てゐる様な常磐木の寒い森であつた。森で辛うじて一本の徑を見出すと、老案内者はその顔に寂しい微笑を浮べて言つた。

『もう大丈夫だ、この森を抜けさいすりや宿屋だ。』

まことにその森を抜け切らうとするあたりで、俄に烈しい犬の吠聲が我等を目がけて起つて來た。そして今見て來た池の上流なる川の岸に二棟三棟の屋根の低い家が見えた。それが今夜私達を休ませ眠らせて呉れる上高地温泉旅館であつたのだ。

やれ／＼と安心して振り返ると、今通つて來た黒い森の上に濛々として燒嶽の山の煙が流れ落ちてゐるが見えた。今夜はよくその煙までへの路を聴きたゞす必要もあつたのであつた。

鳳來寺紀行

沼津から富士の五湖を廻つて富士川を渡り身延に登り、その奥の院七面山から山づたひに駿河地に越え、梅ヶ島といふ人の知らない山奥の温泉に浸つて見るも面白からうし、其處から再び東海道線に出て鷺津驛から濱名湖を横ぎり、名のみは久しく聞いてゐる奥山半僧坊に詣で、地圖で見れば其處より四五里の距離に在るらしい三河新城町に廻つて其處の實家に病臥してゐるK——君を見舞ひ、なほ其處から遠くない鳳來山に登り、山中に在るといふ古寺に泊めて貰つて古來その山の評判になつて居る佛法僧を聽いて來よう、イヤ、佛法僧に限らず、さうして歴巡る山から山に啼いてゐるであらう杜鵑だの郭公だの黒つがだの、すべて若葉の頃に啼く鳥を心ゆくまで聽いて來度いとちやんと豫定をたてゝその空想を楽しみ始めたのは五月の初めからであつた。折悪しく用が溜つてゐ

て直ぐには出かけられず、急いでそれを片付けてどうでも六月の初めには發足しようときめてゐた。ところが恰度そのころから持病の腸がわるくなつた。旅行は愚か、部屋の中を歩くのすら大儀な有様となつた。さうして起きたり寝たりして居るうちにいつか六月は暮れてしまつた。七月に入つてやゝ恢復はしたものの、サテ急に草鞋を穿く勇氣はなく、且つ旅費にあてゝおいた金もいつの間にかなくなつてゐた。

七月七日、神経衰弱がひどくなつたと言つて勤めさきを休んで東京からM——君がやつて來た。そして私の家に三四日寝轉んでゐた。その間に話が出て、それでは二人してその計畫の最後の部である三河行だけを實行しようといふことになつた。

七月十二日午前九時沼津發、同午後二時豊橋着、其處まで新城からK——君が迎へに來てゐた。案外な健康體で、ルパンカなどを着込んでゐた。まだ然し、聲は前通りにかれてゐた。豊川線に乗換へ、豊川驛下車、稻荷様に詣でた。此處は亡くなつた神戸の叔父が非常に信仰したところで、九へ歸省の途中彼を訪ふごとに、何故御近所を通りながら參詣せぬと幾度も叱られたものであつた。謂はゞ偶然今日其處へ參詣して、この叔父の事が思ひ出され、その位牌に額づく思ひで、頭を垂れた。

再び豊川線に乗つて奥に向ふ。この沿線の風景は武藏の立川驛から青梅に向ふ青梅線のそれに實

によく似てゐた。たゞ、車窓から見る豊川の流が多摩川より大きいごとく、こちらの方が幾分廣やかな眺めを持つかとも思はれた。

新城の町は一里にも餘らうかと思はれる古びやかな長々しい一すぢ町で、多少の傾斜を帶び、俾で見て行く兩側の店々には漸くいま灯のついた所でなか／＼に賑つて見えた。豊川流域の平原が次第につまつて來た奥に在る附近一帶の主都らしく、さうした位置もまた武藏の青梅によく似てゐた。

K——君の家はその長々しい町のはづれに在り、豫ねて聞いてゐた様に酒類を商ふ古めかしい店構へであつた。鬚の眞白なその父を初め兄弟には初對面で、たゞ姉のつた子さんには沼津で一度逢つてゐた。名物の鮎の料理で、夜更くるまで馳走になつた。

翌日一日滞在、降りみ降らずみの雨間に出でて辨天橋といふあたりを散歩した。この邊の豊川は早や平野の川の姿を變へて溪谷となり、兩岸ともに岩床で、激しい瀬と深い淵とが相繼いで流れてゐる。橋は相迫つた斷崖の間にかけられ、なか／＼の高さで、眞下の淵には大きな渦が卷いてゐた。淵を挟んだ上下は共に白々とした瀬となつて、上にも下にも鮎を釣る姿が一人二人と眺められた。この橋の様子は高さから何から青梅の萬年橋に似て居り、鮎を名物とするところもまた同所と似て居る。武藏の青梅は私の好きな古びた町であつた。

夜はK——君父子に誘はれて觀月樓といふ料理屋に赴いた。座敷は南向きで峻崖に臨み、眼下に

稲田が開けて、野末の丘陵、更に遠く連山の起伏に對するあたり、成程月や星を観るにはいい場所であらうと思はれた。惜しいかなその夜も數日來打ち續いた雨催ひの空で、低く垂れた密雲を仰ぐのみであつた。

友の老父も酒を愛する方であつた。徐ろに相酌みつゝ終にまた深更まで飲んでしまつた。

七月十四日。眼が覺めるとすさまじい雨の音である。今日は鳳來山へ登らうときめてゐた日なので、一層この音が耳についた。

櫻、柏、冬青、木犀などの老木の立ち込んだ中庭は狭いながら非常に静かであつた。ことごとくしく手の入れてないまゝに苔が自然に深々とついてゐた。離室の縁に籐椅子を持出してぼんやり庭を見、雨を聞いて居るのは悪い氣持ではなかつたが、サテさうしてもゐられなかつた。M——君と兩人で出立の用意をしてゐると、家内總がかりで留めらるゝ。そのうちに持ち出された徳利の數が二つ三つと増してゆく間に、いつか正午近くなつてしまつた。雨は小止みもないばかりか、次第に勢を強めて來た。

漸く私は一つの折衷案を持ち出した。鳳來山登りをやめたにして、今日はこれからK——君も一緒にこの溪奥に在る由案内記に書いてある湯谷温泉へ行きませう、そして其處から我等は明日山へ登り、君はこちらへ引返し給へ、若し君獨り引返すのがいやだつたら姉さんを誘はうぢやないか、と。

斯くして四人、降りしきる中を停車場へ急いで、辛く間に合つた汽車に乗つた。古戦場で聞えてゐる長篠驛あたりからの線路は峽間の溪流に沿うた。そして其處に雨と雲と青葉との作りなす景色は溪好きの私を少なからず喜ばしめた。

三四驛目で湯谷に着いた。改札口で温泉の所在を訊くと、改札口から廊下續きの建物を指して、それですといふ。成程考へたものだと思つた。湯谷ホテルと呼んでゐるこの温泉宿はこの鐵道會社の經營してゐるものであるのだ。何しろ有難かつた。この大降りに女連れではあるし、田舎道の若し遠くでもあられては眞實困るところであつたのだ。

通された二階からは溪が眞近に見下された。數日來の雨で、見ゆるかぎりが一聯の瀑布となつた形でたゞ滔々と流れ下つてゐる。この邊から上流をば豊川と言はず、板敷川と呼んで居る様に川床全體が板を敷いた様な岩であるため、その流はまことに清らかなものであるさうだが、今日は流石に濁つてゐた。濁つてゐるといふより、隨所に白い渦を巻き飛沫をあげて流れ下つてゐた。對岸の崖には山百合の花、萼の花など、雨に揺られながら咲きしだれてゐるのが見えた。その上に聳えた山には見ごとに若杉が植ゑ込んであつた。山の峻しい姿と言ひ、杉の青みといひ、徂徠する雲といひ、必ず杜鵑の居さうな所に思はれたが、雨の烈しいためか終に一聲をも聞かなかつた。

温泉と云つても沸かし湯であつた。酒や料理は、會社經營の手前か、案外にいゝものを出して呉

れた。繪葉書四五十枚を取り寄せ知れる限りに寄せ書きをした。

七月十五日。かれこれしてゐるうちに時間がたつて、十二時幾分かの汽車に乗つた。重い曇であるが、珍しく雨は落ちて來なかつた。M——君と私とは長篠驛下車、寒狭川に沿うて鳳來山の方へ溯つて行つた。寒狭川もまた岩を穿つて流れてゐる溪であつた。

途中、鮎瀧といふがあつた。平常から見ごとな瀧とは聞いてゐたが、今日は雨後のせゐで凄じい水勢であつた。路を下りてそれに近づかうとすると遠く水煙が巻いて來て、思はず面を反けねばならなかつた。

行くこと二里で、麓の村門谷カドヤといふに着いた。見るからに古びはてた七八十戸の村で農家の間には煤び切つた荒目な格子で間口を廻らした家なども混つてゐた。山駕籠や、芝居でしか見ない普通の駕籠などの軒先に吊るされてあるのも見えた。とある一軒に寄つて郵便切手を買ひながら山上のお寺に泊めて貰へるか否かを訊ねた。上品な内儀が、泊めては貰へませうが喰べ物が誠に不自由で、とにかく今日の夕飯だけでもこの村の宿屋で召上つてからお登りになつたがいゝでせうといふ。

厚意を謝して其處を出ると直ぐ一軒の宿屋があつた。これも廣重の繪などで見るべき造りの家である。其儘立ち寄らうとしたが、然し其處で夕飯をとるとすると到底今日山へ登る事をばようしないにきまつてゐる。私はいゝとしてもM——君は明日はまた山を下らねばならぬ人である。それを

思ふて、兎にも角にも寺まで行つて見ようといふことになつた。宿屋のはづれに硯を造つてゐる一二軒の家が眼についた。この山の石で造るもので良質の硯の出來るといふ話を聞いたのを思ひ出した。

黒々と樹木のたちこんだ岩山が眼の前に聳えてゐた。妙義山の小さい形であるが、樹木の茂みが山を深く見せた。宿を外れると直ぐ杉木立の暗い中に入り、石段にかゝつた。僅に數段を登るか登らぬに早やすぐ路の傍へから啼き立つた雉子の聲に心をときめかせられた。

石段の數は人によつて多少の差はあつたが、いま途中で休んだ茶店の老爺老婆は一千八百七十七段ありますと言下に答へたのであつた、數は兎に角兩人は直ぐ勞れてしまつた。一度二度と腰をおろして休みながら登るうちに右手に一軒の寺があつた、松高院と云つた。今少し登ると醫王院といふがあり、接待茶、繪葉書ありの看板が出てゐた。其處へ寄つて茶の馳走になり繪葉書を買ひ、本堂再建の屋根瓦一枚づつの寄進につき、更に山上遙に續いてゐる石段を登り始めようとする、應接してゐたまだ三十歳前後の年若い僧侶が、貴下は若山といふ人ではないか、と訊く。いぶかりながらその旨を答へると、實は今日の正午頃に私の知人の某君といふが來て、昨日か今日、其人が佛法僧鳥を聴くために登つて來る筈だ、來たらばこの寺に泊めて呉れと言ひ置いてツイ先刻歸つたばかりだとの事であつた。では新城町のK——家から山のお寺へも紹介しておくからとの話はその事

であつたのかと思ひながら、意外の便宜に二人とも大いに喜んだ。のんきな我等は、この石段の續いた果にまだお寺があるだらうしその一番高い所に在るお寺に泊めて貰はうなどと言ひながらなほ勞れた足を運ぼうとしてゐたのであつた。聞けばこの上には東照宮があるのみで、お寺はもう無いのださうである。もと本堂があつただけで、この大正三年に焼失したのださうだ。

喜びながら手荷物を其處に預け、足ついで故その東照宮までお参りして來ようと再び石段を登つて行つた。大きくはないが古びながらに美しいお宮は見事な老木の杉木立のうす暗いなかに在つた。社務所があつても雨戸が固く閉ざされてゐた。

お寺に引返して足を伸して居ると、程なく夕飯が出た。新城から提げて歩いてゐた酒の壘を取出して遠慮しながら冷たいまゝ飲んでゐると、爛をして來ませうと温めて貰ふ事が出來た。お膳を出されたのは、廊下に疊の敷かれた様な所であつたが、居ながらにして眼さきから直ぐ下に押し降つて行つてゐる峽間の峻しい傾斜の森林を見下すことが出來た。誠によく茂つた森である。そして峽間の斜め向うにはその森にかぶさる様に露出した岩壁の山が高々と聳えてゐるのである。湧くともなく消ゆるとない薄雲が峽間の森の上に浮いてゐたが、やがて白々と其處を閉ざしてしまつた。そしてツイ窓さきの木立の間をも颯々と流れ始めた。

まだ酒の終らぬ時であつた。突然、隣室から先刻の年若い僧侶——T——君といふ人で快活な親

切な青年であつた——が、

『いま佛法僧が啼いてゐます』

と注意してくれた。

驚いて盃を置き、耳を傾けたが一向に聞えない。

『随分遠くにゐますが、段々近づいて來ませう』

と言ひながらT——君はやつて來て、同じく耳を澄ましながら、

『ソレ、啼いてませう、あの山に』

と、岩山の方を指す。

『ア、啼いてます、随分かすかだけれど——』

M——君も言つて立ち上つた。

まだ私には聞えない。何處を流れてゐるか、森なかの溪川の音ばかりが耳に満ちてゐる。

二人とも庭に出た。身體の近くを雲の流れてゐるのが解る。

『啼いてますが、あれでは先生には聞えますまい』

と、M——君が氣の毒さうにいふ。彼は私の耳の遠いのを前から知つてゐるのである。

近づくのを待つことに諦めて部屋に入り、酒を續けた。酒が終ると酔と、勞れとで二人とも直ぐ

ぐつたりと眠つてしまった。

M——君はその翌十六日、降りしきる雨を冒して山を下つて行つた。そして私だけ獨りその後二十一日までその寺に滞在してゐた。その間の見聞記を少し書いて見度い。

鳳來山は元來噴火にかけて中途でやみ、その噴出物が凝固して斯うした怪奇な形の山を成したものださうである。で、土地の岩層や岩質などを研究するとなか／＼複雑で面白いといふことである。高さは海拔僅かに二千三百尺、山塊全體もさう大きなものではないが、切りそいだやうに聳えた大きな岩壁、それらの間に刻み込まれた溪谷など、とにかく眼に立つ眺めを持つて居る。それにさうした岩山に似合はず、不思議によく樹木が育つて、岩壁や裂目にまで見ごとくな大木が隙間もなくびつたりと立ち茂つてゐる。この樹木の繁いことが少なからずこの山の眺めを深くもし大きくもしてゐるのである。多く杉檜等の針葉樹であるが、間々この山獨特の珍しい草木もあるとのことである。

南面した山の中腹に鳳來寺がある。推古天皇の時僧理修の開創で、更に文武天皇大寶年間に勅願所として大きな堂宇が建立されたのださうだ。その後源頼朝もいたくこの寺の薬師如來を信仰して多くの莊園を奉納し、下つて徳川廣忠は子なきを患ひて此所に參籠祈願して家康を生んだといふので、家光家綱相續いて殿堂、鐘樓、樓門その他山林方三里、及び多大の境地を寄附し、新に家康の

廟東照宮を置き一時は寺封千三百五十石、十九ヶ村の多きに上つたといふことである。(加藤與曾次郎氏著『門谷附近の史蹟』に據る)ところが明治の革新に際し制度の變遷から悉く此等の寺封を取除かれ、その上明治八年及び大正三年兩度の火災で本堂初め十二坊からあつた他の寺々まで焼け失せて今では僅に醫王院松高院の二堂を残すのみとなつてゐる。現在の住職服部賢定氏これを嘆いて數年間に涉つて鳳來山の裏山にあたる森林の拂下げを願ひ出て終に許可を得、それより費用を得て目下本堂建築の工事中である。拂下げを受けた面積三千百十三町七反歩、而かもなほ寺の境内として残してある森林の面積百五十八町三反歩といふのにも如何にこの山を包む森林の廣いかは解るであらう。

或日私は案内せられて東照宮の裏手から山の頂上の方に登つて行つた。前にも言ふ通りこの山は岩山ゆゑ、みつちりと樹木の立ち込んだ峯のところ／＼に恰も銚を立てた様に森から露出して聳え立つた岩の尖りがある。それらの一つ／＼に這ひ登つてこちらの溪、そちらの峽間に茂り合つて麓の方に擴がつて行つてゐる森の流を見下してゐると、まことに何とも言へぬ伸びやかな靜かな心になつてゆくのであつた。

何百丈か何千丈か、乾反り返つて聳え立つた岩壁の頂上に坐つて恐る／＼眼下を見てゐると、多くは迫せまになつた森の茂みに籠つて實に數知れぬ鳥の聲が起つてゐる。我等の知つてゐるものは僅に

その中の一割にも足らぬ。多くは名も聲も聞いた事のないものゝみである。僅に姿を見せて飛ぶは鴨椋鳥に啄木鳥位のもので、その他はたゞ其處此處に微妙な音色を立てゝゐるのみで、見渡す限りたゞ青やかな森である。

中に水戀鳥といふのゝ啼くのを開いた。非常に透る聲で、短い節の中に複雑な微妙さを含んで聞きなざるゝ。これは全身眞紅色をした鳥ださうで自身の色の水に映るを恐れて水邊に近寄らず、雨降るを待ち嘴を開いてこれを受けるのださうである。そして早が續けば水を戀うて啼く、その聲がおのづからあの哀しい音いろとなつたのだと云ふ。

私は此處に来てつくづく自分に鳥についての知識の無いのを悲しんだ。あれは、あれはと徒にその啼聲に心をときめかすばかりで、一向にその名を知らず、姿をも知らないのである。山の人もおんきで、殆んど私よりも知らない位であつた。

石楠木のこの山に多いのをば聞いてゐたが、いかにも豫想外に多かつた。そして他の山のものと違つた種類であるのに氣がついた。さうなると植物上の知識の乏しいのを悲しまねばならぬことになるが、兎に角他の石楠木と比べて葉が甚だ細くて枝が繁い。檜や榎の太木の下にこの木ばかりが下草をなしてゐる所もあつた。花のところはどんなであらうと思はれた。葉も枝もどうだんの木と少しも違はないやうな木で釣鐘躑躅といふのがあつた。花がみな釣鐘の形をなし、それこそ指でさ

す隙間もないほどぎつちりと咲き群がるのださうである。ふり仰ぐ絶壁の中腹などに僅に深山躑躅の散り残つてゐるのを見る所もあつた。また、苔清水の滴つてゐる岩の肌にうす紫のこまかな花の咲いてゐるのがあつた。岩千鳥といふのださうでいかにも高山植物に似た可憐な花であつた。風來寺百合といふ百合も岩に垂れ下つて咲いてゐた。この百合もこの山獨特のものだと聞いてゐた。

山の尾根から傳つて歩いてゐると、遠く渥美半島が見えた。またその反對の北の方には果もなく次から次と廻り合つた山脈が見えて、やがて雲の間にその末を消してゐる。美濃路信濃路の山となるのであらう。さうした大きな景色を眺めてゐると、我等の坐つた懸崖の眞下の森を啼いて渡る杜鵑の聲がをり／＼聞えて來た。もう時季が遅いために、この鳥の啼くのはめつきり少くなつてゐるのださうである。

私が山に登つてから三日間は少しの雨間もなく降り續いた。しかも並大抵の降りではなく、すさまじい響をたてゝ降る豪雨であつた。で、その間は全くその山を包んだ雨戸の中に身うごきもならぬ氣持で過してゐたのである。雨に連れて雲が深かつた。明けても暮れても眞白な密雲のなかに、殆んど人の聲を聞かず顔を見ずに過してゐた。

十八日の晝すぎから晴れて來た。

『今夜こそ啼きませぬ』

寺の人が斯う言つて微笑した。最初この寺に登つて来た晩に遠くで啼いたと聞けばかりで、私はまだ楽しんで来た佛法僧を聞くことなしにその日まで過して来たのであつた。この鳥は晴れねば啼かぬのださうだ。

『啼きませうか、啼いて呉れるといふなア』

その夕方は飲み過ぎない様に酒の量をも加減して啼くのを待つた。洋燈がともり、私の癖の永い時間の酒も終つたが、まだ啼かない。庭に出て見ると、久しく見なかつた星が、峻しい峰の上にちら／＼輝いてゐる。墨の様に深い色をした峽間の森には、例の名も知れぬ鳥が頻りに啼いてゐるのだが、待つてゐるのはなか／＼啼かない。

九時頃であつた。半ば諦めた私は床を敷いて寝ようとしながら、フツと耳を立てた。そして急いで廊下の窓のところへ行つた。其處へ勝手の方からも寺の人が出て来た。

『解りましたか、啼いてますよ』

『ア、矢張りあれですか、なるほど、啼きます、啼きます』

私はおのづから心臓の鼓動の高まるのを覺えた、そしてまたおのづからにして次第に心氣の潜んでゆくのを。

なるほどよく啼く。そして實にいゝ聲である。世の人の珍しがるのも無理ならぬことだと眼を睨

ぢて耳を傾けながら微笑した。

『自分の考へてゐたのとは違つてゐる』

とも、また、思つた。

私は初めこの佛法僧といふ鳥を、山城の比叡山あたりで言つてゐる筒鳥といふのと同じものだと豫想してゐた。その啼き聲が、佛、法、僧といふと云ふところから、會つて親しく聞いたことのある筒鳥の啼き聲を聯想せざるを得なかつた。筒鳥の聲が開きやうによつてはさう聞えないものでもないからである。たゞ筒鳥は單に佛、法、僧といふ如く三音に響いて切れるでなく、ホツ／＼／＼／／／と幾つも續いて釣瓶打に啼きつゞけるのである。然し、その寂びた靜かな音いろはともすると佛法僧といふ發音や文字づらと關聯して考へられがちであつたのだ。

まことの佛法僧は筒鳥とは違つてゐた。然し、その啼き聲を佛、法、僧と響くといふのも甚だ當を得てゐない。これは佛法の盛んな頃か何か、或る僧侶たちの考へたこぢつけに相違ないと私は思つた。この鳥の聲はそんな枯れさびれたものではないのである。いかにも哀音悲調と謂つた風の、うるほひのある澄み徹つた聲であるのだ。いかにも物かなしげの、迫つた調子を持つてゐるのである。

そして佛、法、僧といふ風に三音をば續けない。高く低くたゞ二音だけ繰返す。その二音の繰返

しが十度び位も切々として繰返さるゝと、合の手見た様に僅かに一度、もう一音を加へて三音に啼く。それをこちつけて佛法僧と呼んだものであらう。普通はたゞ二音を重ねて啼くのである。

たとへば郭公の啼くのが、カツ、コウ、と二音を重ねるのであるが、あれと似てゐる。然し似てゐるのはたゞそれだけで、その音色の持つ調子や心持は全然違つてゐる。郭公も實に澄んだ寂しい聲であるが、佛法僧はその寂びの中に更に迫つた深みと鋭どさを含んで居る。さればとて杜鵑の鋭どさでは決してない。言ひがたい圓みとうるほいとを其鋭どさの中に包んでゐる。兎に角、筒鳥にせよ、郭公にせよ、杜鵑にせよ、その啼聲のおほよその口眞似も出来、文字にも書くことが出来るが、佛法僧だけは到底むつかしい。器用な人ならば或は口眞似は出来るかも知れぬが、文字には到底不能である。それだけ他に比して複雑さを持つてゐるとも謂へるであらう。

不思議に四月の二十七日か若しくはその翌日の八日かゝら啼き始めるのださうである。殆んどその日を誤らないといふ。南洋からの渡り鳥で、全身綠色、嘴と足とだけが紅く、大きさはおほよそ鴨に似てゐるさうだ。稀には晝間に啼くこともあるさうだが、決して姿を見せない。山に住んで居る者でも誰一人それを見た者はないといふ。

この鳥も郭公などと同じく、暫くも同じところに留つてゐない。啼き始めると続けさまにその物悲しげな啼聲を續けるのであるが、殆んどその一聯ごとに場所を換へて啼いてゐる。それも一本の

木の枝をかへて啼くといふでなく、一町位の間を置いて飛び移りつゝ啼くのである。このことが一層この鳥の聲を迫つたものに聞きなさせる。

十八日、私は殆んど夜どほし窓の下に坐つて聽いてゐた。うとくと眠つて眼をさますと、向うの峯で啼くのが聞える。一聲二聲と聞いてゐると次第に眼が冴えて、どうしても寢てゐられないのである。

星あかりの空を限つて聳えた峻しい山の峯からその聲が落ちて来る。ちいつと耳を澄ましてゐると、其處に行き、彼處に移つて聞えて来る。時とすると更け沈んだ山全體が、その聲一つのために動いてゐる様にも感ぜらるゝのである。

十九日の夜もよく啼いた。そして午前四時頃、他のものでは蛸が一番早く聲を立つるのであるが、それをきつかけに佛法僧はびつたりと黙つてしまふ様である。それから後はあれが啼きこれが叫び、いろ／＼な鳥の聲々が入り亂れて山が明けて行く。

二十日に私は山を下つた。滞在六日のうち、二晩だけ完全にこの鳥を聞くことが出来た。二晩とも闇であつたが、月夜だつたら一層よかつたらうと思はれた。また、月夜にはとりわけてよく啼くのださうである。いつかまた月のところに登つてこの寂しい鳥の聲に親してみたいものだ。

みなかみ紀行

十月十四日午前六時沼津發、東東通過、其處よりM―、K―、の兩青年を伴ひ、夜八時信州北佐久郡御代田驛に汽車を降りた。同郡々役所々在地岩村田町に在る佐久新聞社主催短歌會に出席せむためである。驛にはS―、O―、兩君が新聞社の人と自動車で出迎へてゐた。大勢それに乗つて岩村田町に向ふ。高原の闇を吹く風がひし／＼と顔に當る。佐久ホテルへ投宿。

翌朝、まだ日も出ないうちからM―君たちは起きて騒いでゐる。永年あこがれてゐた山の國信州へ來たといふので、寝てゐられないらしい。M―は東海道の海岸、K―は畿内平原の生れである。『あれが淺間、こちらが蓼科、その向うが八ヶ岳、此處からは見えないがこの方角に千曲川が流れてゐるのです。』

と土地生れのS―、O―の兩人があれこれと教へて居る。四人とも我等が歌の結社創作社々中の人たちである。今朝もかなり寒く、近くで頻りに野羊が鳴くのが聞えてゐた。

私の起きた時には急に霧がおりて來たが、やがて晴れて、見事な日和になつた。遠くの山、ツイ其處に見ゆる落葉松の森、障子をあけて見て居ると、いかにも高原の此處に來てゐる氣持になる。私にとつて岩村田町は七八年振りの地であつた。

お茶の時に野羊の乳を持つて來た。

『あれのだネ。』

と、皆がその鳴聲に耳を澄ます。

會の始まるまで、と皆の散歩に出たあと、私は近くの床屋で髪を刈つた。今日は日曜、土地の小學校の運動會があり、また三杉磯一行の相撲があるとかで、その店もこんでゐた。床屋の内儀の來る客をみな部屋に招じて炬燵に入れ、茶をすゝめて居るのが珍しかつた。

歌會は新聞社の二階で開かれた。新築の明るい部屋で、麗らかに日がさし入り、階下に響く印刷機械の音も酔つて居る様な静かな晝であつた。會者三十名ほど、中には松本市の遠くから來てゐる人もあつた。同じく創作社のN―君も埴科郡から出て來てゐた。夕方閉會、續いて近所の料理屋で懇親會、それが果てゝもなほ別れかねて私の部屋まで十人ほどの人がついて來た。そして泊るとも

なく泊ることになり、みんなが眠つたのは間もなく東の白む頃であつた。

翌朝は早く松原湖へゆく筈であつたが餘り大勢なので中止し、輕便鐵道で小諸町へ向ふ事になつた。同行なほ七八人、小諸町では驛を出ると直ぐ島崎さんの「小諸なる古城のほとり」の長詩で名高い懷古園に入つた。そしてその壊れかけた古石垣の上に立つて望んだ淺間の大きな裾野の眺めは流石に私の胸をときめかせた。過去十四五年の間に私は二三度も此處に来てこの大きな眺めに親しんだものである。ことにそれはいつも秋の暮れがたの、昨今の季節に於てであつた。急に千曲川の流が見たくなり、園のはづれの峻しい松林の松の根を這ひながら二三人して降りて行つた。林の中には松に混つた栗や胡桃が實を落してゐた。胡桃を初めて見るといふK君は喜んで濕つた落葉を掻き廻してその實を拾つた。まだ落ちて間もない青いものばかりであつた。久しぶりの千曲川はその林のはづれの崖の眞下に相も變らず青く湛へて流れてゐた、川上にも川下にも眞白な瀬を立てながら。

昨日から一緒になつてゐるこの土地のM君はこの懷古園の中に自分の家を新築してゐた。そして招かれて其處でお茶代りの酒を馳走になつた。杯を持ちながらの話のなかに、私が一度二度とこの小諸に来る様になつてから知り合ひになつた友達四人のうち、残つてゐるのはこのM君一人で、あと三人はみなもう故人になつてゐるといふ事が語り出されて今更にお互ひ顔が見合はされた。こ

とにそのなかの井部李花君に就いて私は斯ういふ話をした。私がこちらに来る四五日前、一晚東海道國府津の驛前の宿屋に泊つた。宿屋の名は葛屋と云つた。聞いた様な名だと、幾度か考へて考へ出したのは、數年前その葛屋に来てゐて井部君は死んだのであつたのだ。それこれの話の末、我等はその故人の生家が土地の料理屋であるのを幸ひ、其處に行つて晝飯を喰べようといふことになつた。

思ひ出深いその家を出たのはもう夕方であつた。驛で土地のM君と松本から来てゐたT君とに別れ、あとの五人は更に私の汽車に乗つてしまつた。そして杳掛驛下車、二十町ほど歩いて星野温泉へ行つて泊ることになつた。

この六人になるとみな舊知の仲なので、その夜の酒は非常に賑やかな、而もしみぐしたものであつた。鯉の鹽焼だの、しめじの汁だの、とろろ汁だの、何の罐詰だのと、勝手なことを言ひながら夜遅くまで飲み更かした。丁度部屋も離れの一室になつてゐた。折々水を飲むために眼をさまして見ると、頭をつき合はす様にして寝てゐるめいゝの姿が、酔つた心に涙の滲むほど親しいものに眺められた。

それでも朝はみな早かつた。一浴後、飯の出る迄とて庭さきから續いた岡へ登つて行つた。岡の上の落葉松林の蔭には友人Y君の晝室があつた。彼は折々東京から此處へ来て製作にかゝるので

ある。今日は門も窓も閉められて、庭には一面に落葉松の落葉が散り敷き、それに眞紅な楓の紅葉が混つてゐた。林を過ぐると眞上に淺間山の大きな姿が仰がれた。山にはいま朝日の射して來る處で、豊かな赤茶けた山肌全體がくつきりと冷たい空に浮き出てゐる。煙は極めて僅かに頂上の圓みに凝つてゐた。初めてこの火山を仰ぐM君の喜びはまた一層であつた。

朝飯の膳に持ち出された酒もかなり永く續いていつか晝近くなつてしまつた。その酒の間に私はいつか今度の旅行計畫を心のうちですつかり變更してしまつてゐた。初め岩村田の歌會に出て直ぐ汽車で高崎まで引返し、其處で東京から一緒に來た兩人に別れて私だけ沼田の方へ入り込む。それから片品川に沿うて下野の方へ越えて行く、とさういふのであつたが、斯うして久しぶりの友だちと逢つて一緒にのんびりした氣持に浸つてゐて見ると、なんだかそれだけでは濟まされなくなつて來た。もう少しゆつくりと其處等の山や谷間を歩き廻りたくなつた。其處で早速頭の中に地圖をひろげて、それからそれへと條をつけて行くうちにいつか明瞭に順序がたつて來た。『よし……』と思はず口に出して、私は新計畫を皆の前に打ちあげた。

『いゝなア！』

と皆が言つた。

『それがいゝでせう。どうせあなたもつてもう昔の様にボー／＼出歩くわけには行くまいから。』

とS君が勿體ぶつて付け加へた。

さうなるともう一つ新しい動議が持ち出された。それならこれから皆していつそ輕井澤まで出掛け、其處の蕎麥屋で改めて別盃を酌んで綺麗に三方に別れ去らうではないか、と。無論それも一議なく可決せられた。

輕井澤の蕎麥屋の四疊半の部屋に六人は二三時間坐り込んでゐた。夕方六時草津鐵道で立つてゆく私を見送らうといふのであつたが、要するにさうして皆ぐ／＼してゐたかつたのだ。土間つききのきたない部屋に、もう酒にも倦いてぼんやり坐つてゐると、破障子の間からツイ裏木戸の所に積んである薪が見え、それに夕日が當つてゐる。それを見てゐると私は少しづつ心細くなつて來た。そしてどれもみな疲れた風をして黙り込んでゐる顔を見るとなく見廻してゐたが、やがてK君に聲かけた。

『ねエK君、君一緒に行かないか、今日この汽車で嬬戀まで行つて明日川原湯泊り、それから關東耶馬溪に沿うて中之條に下つて澁川高崎と出ればいゝぢやないか、僅か二日餘分になるだけだ。』
みなK君の顔を見た。彼は例のとほり靜かな微笑を口と眼に見せて、

『行きませうか、行つてよければ行きます、どうせ、これから東京に歸つても何でもありませんか

ら。』

と言つた。まったくこのうちで毎日の爲事を背負つてゐないのは彼一人であつたのだ。

『いゝなア、美しいなア。』

とM君が言つた。

『エライことになつたぞ、然し、行き給い、行つ方がいゝ、この親爺さん一人出してやるのは何だか少し可哀相になつて来た。』

と、N君が酔つた眼を瞑ちて、頭を振りながら言つた。

小さな車室、疊を二枚長目に敷いた程の車室に我等二人が入つて坐つてゐると、あとの四人もてんでに青い切符を持つて入つて来た。彼等の乗るべき信越線の上りにも下りにもまだ間があるのでその間に舊宿まで見送らうと云ふのだ。感謝しながらざわついてゐると、直ぐ輕井澤舊宿驛に来てしまつた。此處で彼等は降りて行つた。左様なら、左様なら、また途中で飲み始めなければいゝがと氣遣はれながら、左様なら〜と帽子を振つた。小諸の方に行くのは三人づれだからまだいゝが、一人東京へ歸つてゆくM君には全く氣の毒であつた。

我等の小さな汽車、唯だ二つの車室しか持たぬ小さな汽車はそれからごつとん〜と登りにかゝつた。曲りくねつて登つて行く。車の兩側はすべて枯れほうけた芒ばかりだ。そして近所は却つてうす暗く、遠くの麓の方に夕方の微光が眺められた。

疲れと寒さが闇と一緒に深くなつた。登り登つて漸く六里が原の高原にかゝつたと思はれる頃には全く黒白あやふもわかぬ闇となつたのだが、車室には灯を入れぬ。イヤ、一度小さな洋燈を點したには點したが、すぐ風で消えたのだつた。一二度停車して普通の驛で呼ぶ様に驛の名を車掌が呼んで通りはしたが、其處には停車場らしい建物も灯影も見えなかつた。漸く一つ、やゝ明るい所に來て停つた。「二度上」といふ驛名が見え、海拔三八〇九呎と書いた棒がその側に立てられてあつた。見ると汽車の窓のツイ側には屋臺店を設け洋燈を點し、四十近い女が子を負つて何か賣つてゐた。高い臺の上に二つほど並べた箱には柿やキャラメルが入れてあつた。そのうちに入れ違ひに向うから汽車が來る様になると彼女は急いで先づ洋燈を持つて線路の向う側に行つた。其處にもまた同じ様に屋臺店が拵へてあるのが見えた。そして次ぎ〜に其處へ二つの箱を運んで移つて行つた。

この草津鐵道の終點婦懸驛に着いたのはもう九時であつた。驛前の宿屋に寄つて部屋に通ると爐が切つてあり、やがて炬燵をかけてくれた。濟まないが今夜風呂を立てなかつた、向うの家へ貰ひに行つてくれといふ。提灯を下げた小女のおとをついてゆくとそれは線路を越えた向側の家であつた。途中で女中がころんで提灯を消したゝめ手探りで辿り着いて替るゝぬるい湯に入りながら辛うじて身體を温める事が出來た。その家は運送屋か何からしい新築の家で、家財とても見當らぬ様ながらんとした大きな圍爐裡端に番頭らしい男が一人新聞を讀んでゐた。

十月十八日。

昨夜炬燵に入つて居る時から溪流の音は聞えてゐたが夜なかに眼を覺して見ると、雨も降り出した様子であつた。氣になつてゐたので、戸の隙間の白むを待つて繰りあげて見た。案の如く降つてゐる。そしてこの宿が意外にも高い崖の上に在つて、その真下に溪川の流れてゐるのを見た。まさしくそれは吾妻川の上流であらねばならぬ。雲とも霧ともつかぬものがその川原に迷ひ、向う岸の崖に懸り、やがて四邊をどんよりと白く閉して居る。便所には草履がなく、顔を洗はうには洗面所の設けもないといふこの宿屋で、有難いのはたゞ炬燵であつた。それほどに寒かつた。聞けばもう九月のうちに雪が來たのであつたさうだ。

寒い／＼と言ひながらも窓をあけて、頸を炬燵の上に載せたまゝ二人ともぼんやりと雨を眺めてゐた。これから六里、川原湯まで濡れて歩くのがいかにも佻しいことに考へられ始めたのだ。それかと云つてこの宿に雨のあがるまで滞在する勇氣もなかつた。酔つた勢ひで斯うした所へ出て來たことがさうに後悔せられて、いつそまた輕井澤へ引返さうかとも迷つてゐるうちに、意外に高い汽笛を響かせながら例の小さな汽車は宿屋の前から輕井澤をさして出て行つてしまつた。それに乗り遅れれば、午後にもう一度出るまで待たねばならぬといふ。

が、草津行きの自動車ならば程なく此處から出るといふことを知つた。そしてまた頭の中に草津を中心に地圖を擴げて、第二の豫定を作ることになつた。さうなると急に氣も軽く、窓さきに濡れながらそよいでゐる瘦せ／＼たコスモスの花も、遙か下に煙つて見ゆる溪の川原も、對岸の霧のなかに見えつ隠れつしてゐる鮮かな紅葉の色も、すべてみな旅らしい心をそゝりたてゝ來た。

やがて自動車に乗る。かなり危険な山坂を、しかも雨中のぬかるみに馳せ登るのでたび／＼膽を冷やさせられたが、それでも次第に山の高みに運ばれて行く氣持は狭くうす暗い車中に居てもよく解つた。ちら／＼と見え過ぎて行く紅葉の色は全く滴る様であつた。

草津ではこの前一度泊つた事のある一井旅館といふへ入つた。私には二度目の事であつたが、初めて此處へ來たK君はこの前私が驚いたと同じくこの草津の湯に驚いた。宿に入ると直ぐ、宿の前に在る時間湯から例の佻しい笛の音が鳴り出した。それに續いて聞えて來る湯揉の音、湯揉の唄。私は彼を誘つてその時間湯の入口に行つた。中には三四十人の浴客がすべて裸體になり幅一尺長さ一間ほどの板を持つて大きな湯槽の四方をとり圍みながら調子を合せて一心に湯を揉んでゐるのである。そして例の湯揉の唄を唄ふ。先づ一人が唄ひ、唄ひ終ればすべて聲を合せて唄ふ。唄は多く猥雑なものであるが、しかもうたふ聲は眞剣である。全身汗にまみれ、自分の揉む板の先の湯の泡に見入りながら、聲を絞つてうたひ續けるのである。

時間湯の温度はほど沸騰點に近いものであるさうだ。そのために入浴に先立つて約三十分間揉みに揉んで湯を柔らかげる。柔らかげ終つたと見れば、各浴場ごとに一人づつついてゐる隊長がそれと見て號令を下す。汗みどろになつた浴客は漸く板を置いて、やがて暫くの間各自柄杓を取つて頭に湯を注ぐ、百杯もかぶつた頃、隊長の號令で初めて湯の中へ全身を浸すのである。湯槽には幾つかの列に厚板が並べてあり、人はとり／＼にその板にしがみ付きながら隊長の立つ方面に面して息を殺して浸るのである。三十秒が経つ。隊長が一種氣合をかける心持で或る言葉を發する。衆みなこれに應じて『オ、ウ』と答へる。答へるといふより唸るのである。三十秒ごとにこれを繰返し、かつきり三分間にして號令のもとに一齊に湯から出るのである。その三分間は、僅かに口にその返事を稱ふるほか、手足一つ動かす事を禁じてある。動かせばその波動から熱湯が近所の人の皮膚を刺すがためであるといふ。

この時間湯に入ること二三日にして腋の下や股のあたりの皮膚が爛れて来る、臆ては歩行も、ひどくなると大小便の自由すら利かぬに到る。それに耐へて入浴を續くこと約三週間で次第にその爛れが乾き始め、ほど二週間で全治する。その後の身心の快さは、殆んど口にする事の出来ぬほどのものであるさうだ。さう型通りにゆくわけのものではあるまいが、効能の強いのは事實であらう。笛の音の鳴り響くのを待つて各自宿屋から（宿屋には穩かな内湯がある。）時間湯へ集る。杖に縋

り、他に負はれて来るものもある。そして湯を揉み、唄をうたひ、煮ゆるごとき湯の中に浸つて、やがてまた全身を脱脂綿に包んで宿に歸つて行く。これを繰返すこと凡そ五十日間、斯うした苦行が容易な覺悟で出来るものでない。

草津にこの時間湯といふのが六箇所在り、日に四回の時間をきめて、笛を吹く。それにつれて湯揉の音が起り、唄が聞えて来る。

たぎり沸くいで湯のたぎりしづめむと

病人つどひ揉めりその湯を

湯を揉むとらたへる唄は病人がいのち

をかけしひとすぢの唄

上野の草津に來り誰も聞く湯揉の唄を

聞けばかなしも

十月十九日。

降れば馬を雇つて澤渡温泉まで行かうと決めてゐた。起きて見れば案外な上天氣である。大喜びで草鞋を穿く。

六里ヶ原と呼ばれてゐる淺間火山の大きな裾野に相對して、白根火山の裾野が南面して起つて居る。これは六里ヶ原ほど廣くないだけに傾斜はそれより急である、その峻しく起つて來た高原の中腹の一寸した窪みに草津温泉はあるのである。で、宿から出ると直ぐ坂道にかゝり、五六町もとると登つた所が白根火山の裾野の引く傾斜の一點に當るのである。其處の眺めは誠に大きい。

正面に淺間山が方六里に渡るといふ裾野を前にその全體を露はして聳えてゐる。聳ゆるといふよりいかにもおつとりと双方に大きな尾を引いて靜かに鎮座してゐるのである。朝あがりのさやかな空を背景に、その頂上からは純白な煙が微かに立つてやがて湯氣の様に消えてゐる。空といひ煙といひ、山といひ野原といひ、すべてが濡れた様に靜かで鮮かであつた。濕つた地をびた／＼と踏みながら我等二人は、いま漸く旅の第一歩を踏み出す心躍りを感じたのである。地圖を見ると丁度その地點が一二〇八米突の高さだと記してあつた。

とり／＼に紅葉した雜木林の山を一里半ほど降つて來ると急に峻しい坂に出會つた。見下す坂下には大きな谷が流れ、その對岸に同じ様に切り立つた崖の中ほどには家の數十戸か二十戸か一握りにしたほどの村が見えてゐた。九十九折になつたその急坂を小走りに走り降ると、坂の根にも同じ様な村があり、普通の百姓家と違はない小學校なども建つてゐた。對岸の村は生須村、學校のある方は小雨村と云ふのであつた。

九十九折はしき坂を降り來れば橋ありてかかる峽の深みに

おもはぬに村ありて名のやさしかる小雨の里といふにぞありける

蠶飼せし家にかあらむを壁を抜きて學校となしつ物教へをり

學校にももの讀める聲のなつかしさ身にしみとほる山里過ぎて

生須村を過ぎると路はまた單調な雜木林の中に入つた。今までは下りであつたが、今度はとろりとろりと僅かな傾斜を登つてゆくのである。日は朗らかに南から射して、路に堆い落葉はから／＼に乾いてゐる。音を立て、踏んでゆく下からは色美しい栗の實が幾つとなく露はれて來た。多くは今年葉である眞新しい落葉も日ざしの色を湛へ匂を含んでとり／＼に美しく散り敷いてゐる。をりをりその中に韻膽の花が咲いてゐた。

流石に廣かつた林も次第に淺く、やがて、立枯の木の白々と立つ廣やかな野が見えて來た。林から野原へ移らうとする處であつた。我等は双方からおほどかになだれて來た山あひに流るゝ小さな

溪端を歩いてゐた。そして溪の上にさし出でて、眼覺むるばかりに紅葉した楓の木を見出した。

我等は今朝草津を立つとからずつと續いて紅葉のなかをくゞつて來てゐたのである。楓を初め山の雜木は悉く紅葉してゐた。恰も昨日今日がその眞盛りであるらしく見受けられた。けれどいま眼の前に見出でて立ち留つて思はずも聲を擧げて眺めた紅葉の色はまた別であつた。楓とは思はれぬ大きな古株から六七本に分れた幹が一齊に溪に傾いて伸びてゐる。その幹とてもすべて一抱への大きさで丈も高い。漸く今日あたりから一葉二葉と散りそめたといふ様に風も無いのに散つてゐる靜かな輝やかなしい姿は、自づから呼吸を引いて眺め入らずにはゐられぬものであつた。二人は路から降り、そのさし出でた木の眞下の川原に坐つて晝飯をたべた。手を洗ひ顔を洗ひ、つぎ／＼に織りついで様に小さな瀬をなして流れてゐる水を掬んでゆつくりと喰べながら、日の光を含んで滴る様に輝いてゐる眞上の紅葉を仰ぎ、また四邊あたの山にびつたりと燃え入つてゐる林のそれを眺め、二人とも言葉を交さぬ數十分の時間を其處で送つた。

枯れし葉とおもふもみちのふくみたる

この紅るをなんと申さむ

露霜のとくるがごとく天つ日の光をふ

くみにほふもみち葉

溪川の眞白川原にわれ等ゐてうちたた

へたり山の紅葉を

もみち葉のいま照り匂ふ秋山の澄みぬ

るすがた寂しとぞ見し

其處を立つと野原にかゝつた。眼につくは立枯の木の木立である。すべて自然に枯れたものでなく、みな根がたのまはりを斧で伐りめぐらして水氣をとゞめ、さうして枯らしたものである。半ばは枯れ半ばはまた葉を残してゐるのも混つてゐる。見れば檜の木である。二抱へ三抱へに及ぶ夫等の大きな老木がむつちりと枝を張つて見渡す野原の其處此處に立つてゐる。野には一面に枯れほらけた芒の穂が靡き、その芒の浪を分けてかすかな線條すぢを引いた様にも見えてゐるのは植ゑつけてまだ幾年も経たぬらしい落葉松の苗である。この野に昔から茂つてゐた檜を枯らして、代りにこの落葉松の植林を行はうとしてゐるのであるのだ。

帽子に肩にしつとりと匂つてゐる日の光をうら寂しく感じながら野原の中の一木路を歩いてゐると、をり／＼鋭い鳥の啼聲を聞いた。久し振りに聞く聲だとは思ひながら定かに思ひあたらすにゐると、やがて木から木へとび移るその姿を見た。啄木鳥である。一羽や二羽でなく、廣い野原のあちこちで啼いてゐる。更にまたそれよりも澄んで暢びやかな聲を聞いた。高々と空に翔たひすまして

ゐる鷹の聲である。

落葉松の苗を植うると神代振り古りぬ
る檜をみな枯らしたり
檜の木ぞ何にもならぬ醜みにの木と古りぬ
る木々をみな枯らしたり
木々の根の皮剥ぎとりて木々をみな枯
木とはしつ枯野とはしつ
伸びかねし枯野が原の落葉松は枯芒よ
りいぶせくぞ見ゆ
下草のすすきほうけて光りたる枯木が
原の啄木つぎ鳥の聲
枯るる木にわく蟲けらをついばむと啄
木鳥は啼く此處の林に
立枯の木々しらじらと立つところたま
たまにして啄木鳥の飛ぶ

啄木鳥の聲のさびしさ飛び立つとはし
なく啼ける聲のさびしさ
紅みの胸毛を見せてうちつけに啼く啄
木鳥の聲のさびしさ
白木なす枯木が原のうへにまふ鷹ひと
つ居りて啄木鳥は啼く
ましぐらにまひくだり來てものを追ふ
鷹あらはなり枯木が原に
耳につく啄木鳥の聲あはれなり啼ける
をとほく離さり來りて

ずつと一本だけ續けて來た野中の路が不意に二つに分れる處に來た。小さな道標が立てゝある。
曰く、右澤渡温泉道、左花敷温泉道。

枯芒を押し分けてこの古ぼけた道標の消えかゝつた文字を辛うじて讀んでしまふと、私の頭にふ
らりと一つの追憶が來て浮んだ。そして思はず私は獨りごちた、『ほゝオ、斯んな處から行くのか、
花敷温泉には』と。

私は先刻この野にかゝつてからずつと續いて來てゐる物靜かな沈んだ心の何とはなしに波だつのを覺えながら、暫くその小さな道標の木を見て立つてゐたが、K君が早や四五間も澤渡道の方へ歩いてゐるのを見ると、其儘に同君のあとを追うた。そして小一町も二人して黙りながら進んだ。が、終には私は彼を呼びとめた。

「K君、どうだ、これから一つあつちの路を行つて見ようぢやないか、そして今夜その花敷温泉といふのへ泊つて見よう。」

不思議な顔をして立ち留つた彼に、私は立ちながらいま頭に影の如くに來て浮んだといふ花敷温泉に就いての思ひ出を語つた。三四年も前である、今度とは反對に吾妻川の下流の方から登つて來て草津温泉に泊り、案内者を雇うて白根山の噴火口の近くを廻り、澁峠を越えて信州の澁温泉へ出た事がある。五月であつたが白根も澁も雪が深く、澁峠にかゝると前後三里がほどはずつと深さ數尺の雪を踏んで歩いたのであつた。その雪の上に立ちながら年老いた案内者が、やはり白根の裾つゞきの廣大な麓の一部を指して、彼處にも一つ温泉がある、高い崖の眞下の岩のくぼみに湧き、草津と違つて湯が澄み透つて居る故に、その崖に咲く躑躅や其他の花がみな湯の上に影を落す、まるで底に花を敷いてゐる様だから花敷温泉といふのだ、と言つて教へて呉れた事があつた。下になるだけ雪が斑らになつてゐる遠い麓に、谷でも流れてゐるか、丁度模型地圖を見るとおなじく幾つ

もない細長い窪みが糸屑を散らした様にこんがらがつてゐる中の一個所にそんな温泉があると聞いて私の好奇心はひどく動いた。第一、そんなところに人が住んで、そんな湯に浸つてゐるといふ事が不思議に思はれたほど、その時其處を遙かな世離れた處に眺めたものであつたのだ。それがいま思ひがけなく眼の前の棒杭に『左花敷温泉道、是より二里半』と認めてあるのである。

『どうだね、君行つて見ようよ、二度とこの道を通りもすまいし、……その不思議な温泉をも見ずにしまふ事になるぢやアないか。』

その話に私と同じく心を動かしたらしい彼は、一も二もなく私のこの提議に應じた。そして少し後戻つて、再びよく道標の文字を調べながら、文字のさし示す方角へ曲つて行つた。

今までよりは峻しい野路の登りとなつてゐた。立枯の檜がつゞき、をり／＼栗の木も混つて毳とに笑みわれたその實を根がたに落してゐた。

夕日さす枯野が原のひとつ路わが急ぐ

路に散れる栗の實

音さやぐ落葉が下に散りてをるこの栗

の實の色のよろしさ

柴栗の柴の枯葉のなかばだに如かぬち

ひさき栗の味よさ
おのづから干て搗栗かきくりとなりてをる野の
落栗の味のよろしさ
この枯野猪ヒも出でぬか猿もぬぬか栗美
しう落ちたまりたり
かりそめにひとつ拾ひつ二つ三つ拾ひ
やめられぬ栗にしありけり

芒の中の険しい坂路を登りつくすと一つの峠に出た。一步其處を越ゆると片側はうす暗い森林となつてゐた。そしてそれがまた一面の紅葉の渦を巻いてゐるのであつた。北側の、日のさゝぬ其處の紅葉は見るからに寒々として、濡れてもゐるかと思はるゝ色深いものであつた。然し、途中でややこの思ひ立ちの後悔せらるゝほど路は速かつた。一つの溪流に沿うて峽間を降り、やがてまた大きな谷について凹凸烈しい山路を登つて行つた。十戸二十戸の村を二つ過ぎた。引沼村といふのは小學校があり、山蔭のもう日も暮れた地面を踏み鳴らしながら一人の年寄つた先生が二十人ほどの生徒に體操を教へてゐた。

先生の一途なるさまもなみだなれ家十

ばかりなる村の學校に
ひたひたと土踏み鳴らし眞裸足に先生
は教ふその體操を
先生の頭の禿もたふとけれ此處に死な
むと教ふるならめ

遙か眞下に白々とした谷の瀬々を見下しながらなほ急いでゐると、漸くそれらしい二三軒の家を谷の向岸に見出だした。こゝしい岩山の根に貼り着けられた様に小さな家が竝んでゐるのである。崖を降り橋を渡り一軒の湯宿に入つて先づ湯を訊くと、底さきを流れてゐる溪流の川下の方を指さしながら、川向うの山の蔭に在るといふ。不思議に思ひながら借下駄を提げて一二丁ほど行つて見ると、其處には今まで我等の見下して來た谷とはまた異つた一つの谷が、折り疊んだ様な岩山の裂け目から流れ出して來てゐるのであつた。ひた／＼と瀬につきさうな危い板橋を渡つてみると、なるほど其處の切りそいだ様な崖の根に湯が湛へてゐた。相竝んで二個所に湧いてゐる。一つには茅葺の屋根があり、一方には何も無い。

相顧みて苦笑しながら二人は屋根のない方へ寄つて手を浸してみると恰好な温度である。もう日も暮つた山蔭の溪ばたの風を恐れながらも着物を脱いで石の上に置き、ひつそりと清らかなその湯

の中へうち浸つた。一寸立つて手を延ばせば溪の瀬に指が届くのである。

『何だか溪まで温かさうに見えますね。』と年若い友は言ひながら手をさし延ばしたが、慥て引つ込めて『氷の様だ。』と言つて笑つた。

溪向うもそより立つた岩の崖、うしろを仰げば更に膽も冷ゆべき断崖がのしかゝつてゐる。崖から眞横にいろ／＼な灌木が枝を張つて生ひ出で、大方散りつくした紅葉がなほ僅かにその小枝に名残をとめてゐる。それが一ひら二ひらと断間なく我等の上に散つて来る。見れば其處に一二羽の椋鳥が遊んでゐるのであつた。

眞裸體になるとはしつゝ覺束な此處の

温泉に屋根の無ければ

折からや風吹きたちてはらはらと紅葉

は散り來いで湯のなかに

椋鳥が踏みとぼす紅葉くれなるに透き

てぞ散り來わが見てあれば

二羽とのみ思ひしものを三羽四羽椋鳥

ゐたりその紅葉の木に

夜に入ると思ひかけぬ烈しい木枯が吹き立つた。背戸の山木の騒ぐ音、雨戸のはためき、庭さきの瀬々のひびき、枕もとに吊られた洋燈の灯影もたえずまたゝいて、眠り難い一夜であつた。

十月二十日。

未明に起き、洋燈の下で朝食をとり、まだ足もとのうす暗いうちに其處を立ち出でた。驚いたのは、その足もとに斑らに雪の落ちてゐることであつた。惶て、四邊を見廻すと昨夜眠つた宿屋の裏の崖山が斑々として白い。更に遠くを見ると、漸く朝の光のさしそめたをちこちの峰から峰が眞白に輝いてゐる。

ひと夜寝てわが立ち出づる山かげのい

で湯の村に雪降りにけり

起き出でて見るあかつきの裏山の紅葉

の山に雪降りにけり

朝だちの足もと暗しせまりあふ峽間の

路にはだら雪積み

上野と越後の國のさかひなる峰の高き

に雪降りにけり
はだらかに雪の見ゆるは檜の森の黒木
の山に降れる故にぞ
檜の森の黒木の山にうすらかに降りぬ
る雪は寒げにし見ゆ

昨日の通りに路を急いでやがてひろくとした枯芒の原、立枯の檜の打續いた暮坂峠の大きな澤に出た。峠を越えて約三里、正午近く澤渡温泉に着き、正榮館といふの、三階に上つた。此處は珍しくも双方に窪地を持つた様な、小高い峠に湯が湧いてゐるのであつた。無色無臭、温度もよく、いゝ湯であつた。此處に此儘泊らうか、もう三四里を歩いて四萬温泉へ廻らうか、それとも直ぐ中之條へ出て伊香保まで延ばさうかと二人していろく迷つたが、終に四萬へ行くことにきめて、晝飯を終るとすぐまた草鞋を穿いた。

私は此處で順序として四萬温泉の事を書かねばならぬ事を不快におもふ。いかにも不快な印象を其處の温泉宿から受けたからである。我等の入つて行つたのは、といふより馬車から降りるとすぐ其處に立つてゐた二人の男に誘はれて入つて行つたのは田村旅館といふのであつた。馬車から降りた道を真直ぐに入つてゆく廣大な構への家であつた。

とろく／＼と登つてやがてその庭らしい處へ着くと一人の宿屋の男は訊いた。

『エ、どの位ぬの御滞在の御豫定で被入つしやいますか。』

『いゝや、一泊だ、初めて、見物に來たのだ。』

と答へると彼等はにたりと笑つて顔を見合せた。そしてその男はいま一人の男に馬車から降りた時強ひて私の手から受取つて來た小荷物を押しつけながら早口に言つた。

『一泊だとよ、何の何番に御案内しな。』

さう言ひ捨てゝおいて今一組の商人態の二人連に同じ様な事を訊き、滞在と聞くや小腰をかゞめて向つて左手の溪に面した方の新しい建築へ連れて行つた。

我等と共に残された一人の男はまさ／＼と當惑と苦笑とを顔に表はして立つてゐたが、『ではこちらへ。』

と我等をそれとは反對の見るからに古びた一棟の方へ導かうとした。私は呼び留めた。

『イヤ僕等は見物に來たので、出来るならいゝ座敷に通して貰ひ度い、たゞ一晩の事だから。』

『へ、承知しました。どうぞこちらへ。』

案のごとくにひどい部屋であつた。小學校の修學旅行の泊りさうな、幾間か打ち續いた一室でしかも間の唐紙なども満足には緊つてゐない部屋であつた。疊、火鉢、座布団、すべてこれに相應し

たものゝみであつた。

私は諦めてその火鉢の側に腰をおろしたが、K君はまだ洋傘を持つたまゝ立つてゐた。

『先生、移りませう、馬車を降りたツイ横にいゝ宿屋があつた様です。』

人一倍無口で穩かなこの青年が、明かに怒りを聲に表はして言ひ出した。

私もそれを思はないではなかつたが、移つて行つてまたこれと同じい待遇を受けたならそれこそ更に不快に相違ない。

『止さうよ、これが土地の風かも知れないから。』

となだめて、急いで彼を湯に誘つた。

この分では私には夕餉の膳の上が氣遣はれた。で、定つた物のほかに二品ほど附ける様にと注文し、酒の事で氣を揉むのを慮つて豫じめ二三本の徳利を取り寄せ自分で燗をすることにしておいた。

やがて十五六歳の小僧が岡持で二品づつ料理を持つて來た。受取つて箸をつけてゐると小僧は其處につき坐つたまゝ、

『代金を頂きます。』

といふ。

『代金?』

と私は審つた。

『宿料かい?』

『いゝえ、そのお料理だけです、よそから持つて來たのですから。』

思はず私はK君の顔を見て吹き出した。

『オヤ、君、これは一泊者のせゐのみではなかつたのだよ、懷中を踏まれたよ。』

十月廿一日。

朝、縁に腰かけて草鞋を穿いてゐても誰一人聲をかける者もなかつた。帳場から見見ぬ振りである。もつとも私も一錢をも置かなかつた。旅といへば楽しいものと思ひ込んでゐる私は出来るだけその心を深く味はひたいために不自由の中から大抵の處では多少の心づけを帳場なり召使たちなりに渡さずに出た事はないのだが、斯うまでも挑戦状態で出て來られると、さういふ事をしてゐる心の餘裕がなかつたのである。

面白いのは犬であつた。草鞋を穿いてゐるツイ側に三疋の仔犬を連れた大きな犬が遊んでゐた。そしてその仔犬たちは私の手許にとんで來てじやれつた。頭を撫でてやつてゐると親犬までやつ

て来て私の額や頬に身體をすりつける。やがて立ち上つて門さきを出離れ、何の氣なくうしろを振り返ると、その大きな犬が私のうしろについて歩いてゐる。仔犬も門の處まで出ては来たがそれからよろ來ぬらしく、尾を振りながらびつたり三疋引き添うてこちらを見て立つてゐる。

『犬は犬好きの人を知つてゐるといふが、ほんとうですね。』

と、幾度追つても私の側を離れない犬を見ながらK君が言つた。

『とんだ見送がついた、この方がよつほど正直かも知れない。』

私も笑ひながら犬を撫でて、

『少し旅を食り過ぎた形があるネ、無理をして此處まで來ないで澤渡にあのまゝ泊つておけば昨夜の不愉快は知らずに過ごせたものを……』

『それにしても昨夜はひどかつたですネ、あんな目に私初めて會ひました。』

『さうかね、僕なんか玄關拂を喰つた事もあるにはあるが……、然しあれは丁度いま此の土地の氣風を表はしてゐるのかも知れない、ソレ上州には伊香保があり草津があるでせう、それに近頃よく四萬々々といふ様になつたものだから四萬先生すつかり草津伊香保と肩を並べ得たつもりになつて鼻息が荒い傾向があるのだらうと思ふ、謂はゞ一種の成金氣分だネ。』

『さう云へば彼處の湯に入つてゐる客たちだつてそんな奴ばかりでしたよ、長距離電話の利く處に行

つてゐたんぢやア入湯の氣持はせぬ、朝晩に何だ彼だとかよつて來てうるさくて爲様がない、なんつて。』

『とにかく幻滅だつた、僕は四萬と聞くとずつと溪間の、靜かなおちついた處とばかり思つてゐたんだが……ソレ僕の友人のSーネ、あれがこの吾妻郡の生れなんだ、だから彼からもよくその様に聞いてゐたし、……、惜しい事をした。』

路には霜が深かつた。峰から上つた朝日の光が溪間の紅葉に映つて、次第にまた濁りのない旅心地になつて來た。そして石を投げて辛うじて犬をば追ひ返した。不思議さうに立つて見てゐたが、やがて尾を垂れて歸つて行つた。

十一時前中之條着、折よく電車の出る處だつたので直ぐ乗車、日に輝いた吾妻川に沿うて走る。

この川は數日前に嬬戀村の宿屋の窓から雨の中に佗しく眺めた溪流のすゑであるのだ。澁川に正午に着いた。東京行沼田行とそれ／＼の時間を調べておいて驛前の小料理屋に入つた。此處で別れてK君は東京へ歸り私は沼田の方へ入り込むのである。

看板に出てゐた川魚は何も無かつた。鶏をとりうどんをとつて別盃を舉げた。輕井澤での不圖した言葉がもとなつて思ひも寄らぬ處を兩人して歩いて來たのだ。時間から云へば僅かだが、何だか遠く幾山河を越えて來た様なおもひが、盃の重なるにつれて湧いて來た。午後三時、私の方が十

分間早く發車する事になつた。手を握つて別れる。

澁川から沼田まで、不思議な形をした電車が利根川に沿うて走るのである。その電車が二度ほど長い停電をしたりして、沼田町に着いたのは七時半であつた。指さきなど、痛むまでに寒かつた。電車から降りると直ぐ郵便局に行き、留め置になつてゐた郵便物を受取つた。局の事務員が顔を出して、今夜何處へ泊るかを訊く。變に思ひながら澁川で聞いて來た宿屋の名を思ひ出してその旨を答へると、さうですかと小さな窓を閉めた。

宿屋の名は鳴瀧と云つた。風呂から出て一二杯飲みかけてゐると、來客だといふ。郵便局の人かと訊くと、さうではないといふ。不思議に思ひながらも餘りに勞れてゐたので、明朝來て呉れと斷つた。實際K君と別れてから急に私は烈しい疲勞を覺えてゐたのだ。然し矢張り氣が濟まぬので自分で玄關まで出て呼び留めて部屋に招じた。四人連の青年たちであつた。矢張り郵便局からの通知で、私の此處にゐるのを知つたのださうだ。そして、

『いま自轉車を走らせましたから追つ附けU君も此處へ見えます。』
といふ。

『ア、さうですか。』

と答へながら、矢つ張り呼び留めてよかつたと思つた。U君もまた創作社の社友の一人である

のだ。この群馬縣利根郡からその結社に入つてゐる人が三人ある事を出立の時に調べて、それ／＼の村をも地圖で見來たのであつた。そして都合好くばそれ／＼に逢つて行き度いものと思つてゐたのだ。

『それは有難う、然しU君の村は此處から遠いでせう。』

『なアに、一里位のものです。』

一里の夜道は大變だと思つた。

やがてそのU君が村の俳人B君を伴れてやつて來た。もう少しませた人だとその歌から想像してゐたのに反してまだ紅顔の青年であつた。

歌の話、俳句の話、土地の話が十一時過ぎまで續いた。そしてそれ／＼に歸つて行つた。村までは大變だらうからと留めたけれど、U君たちも元氣よく歸つて行つた。

十月廿二日。

今日もよく晴れてゐた。嬌戀以來、實によく晴れて呉れるのだ。四時から強ひて眼を覺まして床の中で幾通かの手紙の返事を書き、五時起床、六時過ぎに飯をたべてゐると、U君がにこ／＼しながら入つて來た。自宅でもい／＼つて言ひますから今日はお伴させて下さい、といふ。それはよか

つたと私も思つた。今日はこれから九里の山奥、越後境三國峠の中腹に在る法師温泉まで行く事になつてゐたのだ。

私は河の水上みづかみといふものに不思議な愛着を感じる癖を持つてゐる。一つの流れに沿うて次第にそのつめまで登る。そして峠を越せば其處にまた一つの新しい水源があつて小さな瀬を作りながら流れ出してゐる、といふ風な處に出會ふと、胸の苦しくなる様な喜びを感じるのが常であつた。

矢張りそんなところから大正七年の秋に、ひとつ利根川のみなかみを尋ねて見ようとの利根の峡谷に入り込んで来たことがあつた。沼田から次第に奥に入つて、矢張り越後境の清水越の根に當つてゐる湯檜會といふのまで辿り着いた。そして其處から更に藤原郷といふのへ入り込むつもりであつたのだが、時季が少し遅れて、もうその邊にも斑らに雪が來てをり、奥の方には眞白妙に輝いた山の竝んでゐるのを見ると、流石に心細くなつて湯檜會から引返した事があつた。然しその湯檜會の邊でも銚子の河口であれだけの幅を持つた利根が石から石を飛んで徒涉出来る愛らしい姿になつてゐるのを見ると、矢張り嬉しさに心は躍つてその石から石を飛んで歩いたものであつた。そしていつかお前の方まで分け入るぞよと輝き渡る藤原郷の奥を望んで思つたものであつた。

藤原郷の方から來たのに清水越の山から流れ出して來た一支流が湯檜會のはづれで落ち合つて利根川の溪流となり沼田の少し手前で赤谷川を入れ、やゝ下つた處で片品川を合せる。そして漸く一

個の川らしい姿になつて更に澁川で吾妻川を合せ、此處で初めて大利根の大觀をなすのである。吾妻川の上流をば曾つて信州の方から越えて來て探つた事がある。片品川の奥に分け入らうと云ふのは實は今度の旅の眼目であつた。そして今日これから行かうとしてゐるのは、沼田から二里ほど上月夜野橋といふ橋の近くで利根川に落ちて來てゐる赤谷川の源流の方に入つて行つて見度いたためであつた。その殆んどつめになつた處に法師温泉はある筈である。

讀者よ、試みに參謀本部五萬分の一の地圖「四萬」の部を開いて見給へ。眞黒に見えるまでに山の線の引き重ねられた中に唯だ一つ他の部落とは遠くかけ離れて温泉の符號の記入せられてゐるのを、少なからぬ困難の末に發見するであらう。それが即ち法師温泉なのだ。更にまた讀者よ、その少し手前、沼田の方角に近い處に視線を落して來るならば其處に「猿ヶ京村」といふ不思議な名の部落のあるのを見るであらう。私は初め參謀本部のものに據らず他の府縣別の簡單なものを開いて見てこの猿ヶ京村を見出し、サテも斯んな處に村があり、斯んな處にも歌を詠まうと志してゐる人がゐるのかと、少なからず驚嘆したのであつた。先に利根郡に我等の社中の同志が三人ある旨を言つた。その三人の一人は今日一緒に歩かうといふU君で、他の二人は實にこの猿ヶ京村の人たちであるのである。

月夜野橋に到る間に私は土地の義民磯茂左衛門の話聞いた。徳川時代寛文年間に沼田の城主眞

田伊賀守が異常なる虐政を行つた。領内利根吾妻勢多三郡百七十七箇村に檢地を行ひ、元高三萬石を十四萬四千餘石に改め、川役網役山手役井戸役窓役産毛役等（窓を一つ設くれば即ち課税し、出産すれば課税するの意）の雜役を設け終に婚禮にまで税を課するに至つた。納期には各村に代官を派遣し、滞納する者があれば家宅を搜索して農産物の種子まで取上げ、なほ不足ならば人質を取つて皆納するまで水牢に入るゝ等の事を行つた。この暴虐に泣く百七十七箇村の民を見るに見兼ねて身を抽んで江戸に出で酒井雅樂守（たのぶ）の登城先に駕訴をしたのがこの月夜野村の百姓茂左衛門であつた。けれどその駕訴は受けられなかつた。其處で彼は更に或る奇策を案じて具さに伊賀守の虐政を認めた訴狀を上野寛永寺なる輪王寺宮に奉つた。幸に宮から幕府へ傳達せられ、時の將軍綱吉も驚いて沼田領の實際を探つて見ると果して訴狀の通りであつたので直ちに領地を取上げ伊賀守をば羽後山形の奥平家へ預けてしまつた。茂左衛門はそれまで他國に姿を隠して形勢を見てゐたが、漸く願ひの叶つたのを知ると深く自首するつもりで乞食に身をやつして郷里に歸り僅かに一夜その家へ入つて妻と別離を惜み、明方出かけようとしたところを捕へられた。そしていま月夜野橋の架つてゐるツイ下の川原で磔刑に處せられた。しかも罪ない妻まで打首となつた。漸く蘇生の思ひをした百七十七箇村の百姓たちはやれ／＼と安堵する間もなく茂左衛門の捕へられたを聞いて大いに驚き悲しみ、總代を出して幕府に歎願せしめた。幕府も特に評議の上これを許して、茂左衛門赦免の上

使を遣はしたのであつたが、時僅かに遅れ、井戸上村まで來ると處刑済の報に接したのであつたさうだ。

舊沼田領の人々はそれを聞いていよ／＼悲しみ、刑場蹟に地藏尊を建立して僅かに謝恩の心を致した。ことにその郷里の人には更に月夜野村に一佛堂を築いて千日の供養をし、これを千日堂と稱へたが、千日はおろか、今日に到るまで一日として供養を怠らなかつた。が、次第にその御堂も荒蕪して來たので、この大正六年から改築に着手し、十年十二月竣工、右の地藏尊を本尊として其處に安置する事になつた。

斯うした話をU君から聞きながら私は彼の佐倉宗吾の事を思ひ出してゐた。事情が全く同じだからである。而して一は大いに表はれ、一は土地の人以外に殆んど知る所がない。さう思ひながらこの勇敢な、氣の毒な義民のためにひどく心を動かされた。そしてU君にそのお堂へ參詣したい旨を告げた。

月夜野橋を渡ると直ぐ取つ着きの岡の上に御堂はあつた。田舎にある堂宇としては實に立派な壯大なものであつた。そしてその前まで登つて行つて驚いた。寧ろ凄まじいほどの香煙が捧げられてあつたからである。そして附近には唯だ雀が遊んでゐるばかりで人の影とてもない。百姓たちが朝の爲事に就く前に一人々々此處にこの香を捧げて行つたものなのである。一日として斯うない事はない

のださうだ。立ち昇る香煙のなかに佇みながら私は茂左衛門を思ひ、茂左衛門に對する百姓たちの心を思ひ臉の熱くなるのを感じた。

堂のうしろの落葉を敷いて暫く休んだ。傍らに同じく腰をおろしてゐた年若い友は不圖何か思ひ出した様に立ち上つたが、やがて私をも立ち上らせて對岸の岡つゞきになつてゐる村落を指さしながら、

『ソレ、あそこに日の當つてゐる村がありません、あの村の中ほどにやゝ大きな藁葺の屋根が見えませう、あれが高橋お傳の生れた家です。』

これはまた意外であつた。聞けば同君の祖母はお傳の遊び友達であつたといふ。

『今日これから行く途中に鹽原太助の生れた家も、墓もありますよ。』
と、なほ笑ひながら彼は附け加へた。

月夜野村は村とは云へ、古めかしい宿場の形をなしてゐた。昔は此處が赤谷川流域の主都であつたものであらう。宿を通り抜けると道は赤谷川に沿うた。

この邊、赤谷川の眺めは非常によかつた。十間から二三十間に及ぶ高さの岩が、楯を並べた様に並び立つた上に、かなり老木の赤松がすらりと林をなして茂つてゐるのである。三町、五町、十町とその眺めは續いた。松の小草には雑木の紅葉が油繪具をこぼした様に散らばり、大きく露出した

岩の根には微かな青みを宿した清水が瀬をなし淵を作つて流れてゐるのである。

登るともない登りを七時間ばかり登り續けた頃、我等は氣にしてゐた猿ヶ京村の入口にかゝつた。其處も南に谷を控へた坂なりの道ばたにちらほらと家が續いてゐた。中に一軒、古び煤けた屋根の修繕をしてゐる家があつた。丁度小休みの時間らしく、二三の人が腰をおろして煙草を喫つてゐた。

『ア、さうですか、それは……』

私の尋ねに應じて一人がわざ／＼立上つて煙管で方角を指しながら、道から折れた山の根がたの方に我等の尋ぬるM君の家の在る事を教へて呉れた。街道から曲り、細い坂を少し登つてゆくと、傾斜を帯びた山畑が其處に開けてゐた。四五町も畦道を登つたけれども、それらしい家が見當らない。桑や粟の畑が日に乾いてゐるばかりである。幸ひ畑中に一人の百姓が働いてゐた。其處へ歩み寄つてやゝ遠くから聲をかけた。

『ア、Mさんの家ですか。』

百姓は自分から頬かむりをとつて、私たちの方へ歩いて來た。そして、畑に挟まれた一つの澤を越し、渡りあがつた向うの山蔭の杉木立の中に在る旨を教へて呉れた。それも道を傳つて行つたでは廻りになる故、其處の畑の中を通り抜けて……とゆびさししながら教へようとして、

『アツ、其處に來ますよ、Mさんが……』

と叫んだ。囚人などの冠る様な編笠をかぶり、辛うじて尻を被ふほどの短い袖無半纏を着、股引を穿いた、老人とも若者ともつかぬ男が其處の澤から登つて來た。そして我等が彼を見詰めて立つてゐるのを不思議さうに見やりながら近づいて來た。

『君はM—君ですか。』

斯う私が呼びかけると、ちつと私の顔を見詰めたが、やがて合點が行つたらしく、ハツとした風で其處に立ち留つた。そして笠をとつてお辭儀をした。斯うして向ひ合つて見ると、彼もまだ三十前の青年であつたのである。

私が上州利根郡の方に行く事をば我等の間で出してゐる雑誌で彼も見てゐた筈である。然し、斯うして彼の郷里まで入り込んで來やうとは思ひがけなかつたらしい。驚いたあまりか、彼は其處に突立つたまゝ殆んど言葉を出さなかつた。路を教へて呉れた百姓も頬かむりの手拭を握つたまゝ、ぼんやり其處に立つてゐるのである。私は昨夜沼田に着いた事、一緒にゐるのが沼田在の同志U—君である事、これから法師温泉まで行かうとしてゐる事、一寸でも逢つてゆきたくて立ち寄つた事などを説明した。

『どうぞ、私の家へお出で下さい。』

と漸く色々の意味が飲み込めたらしく彼は安心した風に我等を誘つた。なるほど、ツイ手近に來

てゐながら見出せないのも道理なほどの山の蔭に彼の家はあつた。一軒家か、乃至は、其處らに一、二軒の隣家を持つか、兎に角に深い杉の木立が四邊を圍み、濕つた庭には杉の落葉が一面に散り敷いてゐた。大きな圍爐裡端には彼の老母が坐つてゐた。

お茶や松茸の味噌漬が出た。私は圍爐裡に近く腰をかけたが、

『君は何處で歌を作るのです、此處ですか。』

と、赤々と火の燃えさかる爐端を指した。土間にも、座敷にも、農具が散らかつてゐるのみで、書籍も机らしいものも其處らに見えなかつた。

『やア……』

羞しさうに彼は口籠つたが、

『何處といふ事ありません、山でも野良でも作ります。』

と僅かに答へた。私が彼の歌を見始めてから五六年はたつてあらう。幼い文字、幼い詠みかた、それらがM—といふ名前と共にすぐ私の頭に思ひ浮べらるゝほど、特色のある歌を彼は作つてゐるのであつた。

收穫時の忙しさを思ひながらも同行を勧めて見た。暫く黙つて考へてゐたが、やがて母に耳打して奥へ入ると着物を着換へて出て來た。三人連になつて我等はその杉木立の中の家を立ち出でた。

恐らく二度とは訪ねられないであらうその杉叢が、そゞろに私には振返られた。時計は午後三時を過ぎてゐた。法師までなほ三里、よほどこれから急がねばならぬ。

猿ヶ京村でのいま一人の同志H—君の事をM—君から聞いた、土地の郵便局の息子で、今折悪しく仙臺の方へ行つてゐる事などを。やがてその郵便局の前に来たので私は一寸立寄つてその父親に言葉をかけた。その人はゐないでも、矢張り黙つて通られぬ思ひがしたのであつた。

石や岩のあらはに出てゐる村なかの路には煙草の葉がをり／＼落ちてゐた。見れば路に沿うた家の壁には悉くこれが掛け乾されてゐるのであつた。此頃漸く切り取つたらしく、まだ生々しいものであつた。

吹路といふ急坂を登り切つた頃から日は漸く暮れかけた。風の寒い山腹をひた急ぎに急いでゐると、をり／＼路ばたの畑で稗や粟を刈つてゐる人を見た。この邊では斯ういふものしか出来ぬのださうである。従つて百姓たちの常食も大概これに限られてゐるといふ。かすかな夕日を受けて咲いてゐる煙草の花も眼についた。小走りに走つて急いだのであつたが、終に全く暮れてしまつた。山の中の一すぢ路を三人引つ添うて這ふ様にして辿つた。そして、峰々の上の夕空に星が輝き、相迫つた峽間の奥の闇の深い中に温泉宿の灯影を見出した時は、三人は思はず大きな聲を上げたのであつた。

がらんどうな大きな二階の一室に通され、先づ何よりも湯殿へ急いだ。そしてその廣いのと湯の豊かなのに驚いた。十畳敷よりもつと廣からうと思はるゝ浴槽が二つ、それに満々と湯が湛へてゐるのである。そして、下には頭大の石ころが敷いてあつた。乏しい灯影の下にづぶりつと浸りながら、三人は唯だてんでに微笑を含んだまゝ、殆んどだんまりの儘の永い時間を過した。のび／＼と手足を伸ばすもあり、蛙の様に浮んで泳ぎの形を爲すのもあつた。

部屋に歸ると炭火が山の様におこしてあつた。なるほど山の夜の寒さは湯あがりの後の身體に浸みて来た。何しろ今夜は飲みませうと、豊かに酒をば取り寄せた。鐘詰をも一つ二つと切らせた。U—君は十九か廿歳、M—君は廿六七、その二人のがつしりとした山國人の體格を見、明るい顔を見てゐると私は何かしら嬉しくて、飲めよ喰べよと無理にも強ひずにはゐられぬ氣持になつてゐたのである。

其處へ一升罎を提げた、見知らぬ若者がまた二人入つて来た。一人はK—君といふ人で、今日我等の通つて来た鹽原太助の生れたといふ村の人であつた。一人は沼田の人で、亞米利加に五年行つてゐたといふ畫家であつた。畫家を訪ねて沼田へ行つてゐたK—君は、其處の本屋で私が今日この法師へ登つたといふ事を聞き、畫家を誘つて、あとを追つて来たのださうだ。そして懷中から私の最近に著した歌集『くろ土』を取り出してその口繪の肖像と私とを見比べながら、

『矢張り本物に違ひはありませんねエ。』
と言つて驚くほど大きな聲で笑つた。

十月廿三日。

うす闇の残つてゐる午前五時、昨夜の草鞋のまだ濕つてゐるのを穿きしめてその溪間の湯の宿を立ち出でた。峰々の上に冴えてゐる空の光にも土地の高みが感ぜられて、自づと肌寒い。K君たち二人はけふ一日遊んでゆくのださうだ。

吹路の急坂にかゝつた時であつた。十二三から廿歳までの間の若い女たちが、三人五人と組を作つて登つて来るのに出會つた。眞先の一人だけが眼明で、あとはみな盲目である。そして、各自に大きな紺の風呂敷包を背負つてゐる。訊けばこれが有名な越後の替女である相だ。收穫前の一寸した農閑期を狙つて稼ぎに出て来て、雪の来る少し前に斯うして歸つてゆくのだといふ。

『法師泊りでせうから、これが昨夜だつたら三味や唄が聞かれたのでしたかね。』

とM君が笑つた。それを聞きながら私はフツと或る事を思ひついたが、ひそかに苦笑して黙つてしまつた。宿屋で聞かうよりこのまゝこの山路で呼びとめて彼等に唄はせて見たかつた。然し、さういふ事をするには二人の同伴者が餘りに善良な青年である事にも氣がついたのだ。驚いた事に

はその三々五々の組が二三丁の間も續いた。すべて三十人はゐたであらう。落葉の上に彼等を坐らせ、その一人二人に三味を掻き鳴らさせたならば、蓋し忘れ難い記憶になつたであらうものごと、そゞろに残り惜しくも振返られた。這ふ様にして登つてゐる彼等の姿は、一丁二丁の間をおいて落葉した山の日向に續いて見えた。

猿ヶ京村を出外れた道下の笹の湯の温泉で晝食をとつた。相迫つた断崖の片側の中腹に在る一軒家で、その二階から斜め眞上に相生橋が仰がれた。相生橋は群馬縣で第二番目に高い橋だといふ事である。切り立つた断崖の眞中どころに鏝の様にして架つてゐる。高さ二十五間、欄干に倚つて下を見ると膽の冷ゆる思ひがした。しかもその兩岸の崖にはとり／＼の雑木が鮮かに紅葉してゐるのであつた。

湯の宿温泉まで来ると私はひどく身體の疲勞を感じた。數日の歩きづめとこの一二晩の睡眠不足のためである。其處で二人の青年に別れて、日はまだ高かつたが、一人だけ其處の宿屋に泊る事にした。もつともM君は自分の村を行きすぎ其處まで見送つて来てくれたのであつた。U君とは明日また沼田で逢ふ約束をした。

一人になると、一層疲勞が出て來た。で、一浴後直ちに床を延べて寝てしまつた。一時間も眠つたと思ふ頃、女中が來てあなたは若山といふ人ではないかと訊く。不思議に思ひながらさうだと答

へると一枚の名刺を出して斯ういふ人が逢ひ度いと下に來てゐるといふ。見ると驚いた、昨日その留守宅に寄つて來たH—君であつた。仙臺からの歸途沼田の本屋に寄つて私達が一泊の豫定で法師に行つた事を聞き、ともすると途中で會ふかも知れぬと言はれて途々氣をつけて來た。そしてもう夕方ではあるし、ことによるとこの邊に泊つて居らるゝかも知れぬと立寄つて訊いてみた宿屋に偶然にも私が寢てゐたのだといふ。あまりの奇遇に我等は思はず知らずひしと兩手を握り合つた。

十月廿四日。

H—君も元氣な青年であつた。昨夜、九時過ぎまで語り合つて、そして提灯をつけて三里ほどの山路を登つて歸つて行つた。今朝は私一人、矢張り朗らかに晴れた日さしを浴びながら、ゆつくりと歩いて沼田町まで歸つて來た。打合せておいた通り、U—君が青池屋といふ宿屋で待つてゐた。そして昨夜の奇遇を聞いて彼も驚いた。彼はM—と初對面であつたと同じくH—をもまだ知らないのである。

夜、宿屋で歌會が開かれた。一三日前の夜訪ねて來た人たちを中心とした土地の文藝愛好家達で、歌會とは云つても専門に歌を作るといふ人々ではなかつた。みな相當の年輩の人たちで、私は彼等から土地の話面白く聞く事が出來た。そして思はず酒をも過して閉會したのは午前一時であつた。

法師で會つたK—君も夜更けて其處からやつて來た。この人たちは九里や十里の山路を歩くのを、ホンの隣家に行く氣でゐるらしい。

十月廿五日。

昨夜の會の人達が町はづれまで送つて來て呉れた。U—、K—兩君だけは、もう少し歩きませうと更に半道ほど送つて來た。其處で別れかねてまた二里ほど歩いた。收穫時の忙しさを思つて、農家であるU—君をば其處から強ひて歸させたが。K—君はいつそ此處まで來た事ゆる老神まで乗りませうと、終つひに今夜の泊りの場所まで一緒に行く事になつた。宿屋の下駄を穿き、帽子もかぶらぬまゝの姿である。

路はずつと片品川の岸に沿うた。これは實は舊道であるのださうだが、故こゝろに私はこれを選んだのであつた。さうして楽しんで來た片品川峡谷の眺めは矢張り私を落膽せしめなかつた。ことに岩室といふあたりから佳くなつた。山が深いため、紅葉はやゝ過ぎてゐたが、なほ到る處にその名残りを留めてしかも岩の露はれた嶮しい山、いたゞきかけて煙り渡つた落葉の森、それらの山の次第に迫り合つた深い底には必ず一つの溪が流れて瀧となり淵となり、やがてそれがまた隨所に落ち合つては眞白な瀨をなしてゐるのである。歩一步と酔つた氣持になつた私は、歩みつ憇やすひつ幾つかの歌

を手帳に書きつけた。

きりぎしに通へる路をわが行けば天つ
日は照る高き空より
路かよふ崖のさなかをわが行きてはろ
けき空を見ればかなしも
木々の葉の染まれる秋の岩山のそば路
ゆくところかなしも
きりぎしに生ふる百木のたけ伸びすと
りどりに深きもみぢせるかも
歩きつつところ怯ちたるきりぎしのあ
やふき路に匂ふもみぢ葉
わが急ぐ崖の眞下に見えてをる丸木橋
さびしあらはに見えて
散りすぎし紅葉の山にうちつけに向ふ
ながめの寒けかりけり

しめりたる紅葉がうへにわが落す煙草
の灰は散りて眞白き
とり出でて吸へる煙草におのづから心
は開けわが慰ふかも
岩蔭の青渦がうへにうかびゐて色あざ
やけき落葉もみぢ葉
苔むさぬこの荒溪の岩にゐて啼く鶴いたたき
あはれなるかも
高き橋此處にかかれりせまりあふ岩山
の峽のせまりどころに
いま渡る橋はみじかし山峽の迫りきは
まれる此處にかかりて
古りし欄干ほとほとわがうちたたき
渡りゆくかもこの古橋を
いとほしきおもひこそ湧け岩山の峽に

かかれるこの古橋に

老神温泉に着いた時は夜に入つてゐた。途中で用意した蠟燭をてんでに點して本道から温泉宿の在るといふ川端の方へ急な坂を降りて行つた。宿に入つて湯を訊くと、少し離れてゐてお氣の毒ですが、と言ひながら背の高い老爺が提灯を持つて先に立つた。どの宿にも内湯は無いと聞いてゐたので何の氣もなくその後に従つて戸外へ出たが、これはまた花敷温泉とも異つたたいへんな處へ湯が湧いてゐるのであつた。手放しでは降りることも出来ぬ険しい崖の岩坂路を幾度か折れ曲つて辛うじて川原へ出た。そしてまた石の荒い川原を辿る。その中洲の様になつた川原の中に低い板屋根を設けて、その下に湧いてゐるのだ。

這ひつ坐りつ、底には細かな砂の敷いてある湯の中に永い間浸つてゐた。いま我等が屋根の下に吊した提灯の灯がぼんやりとうす赤く明るみを持つてゐるだけで、四邊は油の様な闇である。そして靜かにして居れば、疲れた身體にうち響きさうな荒瀬の音がツイ横手のところに起つて居る。ややぬるいが、柔かな滑らかな湯であつた。屋根の下から出て見るとこまかな雨が降つてゐた。石の頭にぬぎすてゝおいた着物は早やしつとりと濡れてゐた。

註文しておいたとろゝ汁が出来てゐた。夕方釣つて来たといふ山魚やまいの魚田ぎよとも添へてあつた。折柄烈しく音を立てゝ降りそめた雨を聞きながら、火鉢を擁して手づから酒をあたいめ始めた。

十月廿六日。

起きて見ると、ひどい日和になつてゐた。

『困りましたネ、これでは立てませんネ。』

渦を巻いて狂つてゐる雨風や、ツイ溪向うの山腹に生れつ消えつして走つてゐる霧雲を、僅かにあけた雨戸の隙間に眺めながら、朝まだきから徳利をとり寄せた。止むなく滞在ときめて漸く、氣持に酔ひかけて來ると、急に雨戸の隙が明るくなつた。

『オヤ、晴れますよ。』

さう言ふとK君は飛び出して番傘を買つて來た。私もそれに頼んで大きな油紙を買つた。そして尻から下を丸出しに、尻から上、首までをば僅かに兩手の出る様にして、くるくると油紙と紐とで包んでしまつた。これで帽子をまぶかに冠れば洋傘はささずとも間に合ふ用意をして、宿を立ち出でた。そして程なく、雨風のまだ全くをさまらぬ路ばたに立つてK君と別れた。彼はこれから沼田へ、更に自分の村下新田まで歸つてゆくのである。

獨りになつてひた急ぐ途中に吹割の瀧といふのがあつた。長さ四五町幅三町ほど、極めて平滑な川床の岩の上を、初め二三町が間、辛うじて足の甲を潤す深さで一帶に流れて來た水が或る場所に及んで次第に一個所の岩の窪みに浅い瀬を立てゝ集り落つる。窪みの深さ二三間、幅一二間、その

底に落ち集つた川全體の水は、まるで生糸の大きな束を幾十百緞ち集めた様に、雪白な中に微かな青みを含んでくるめき流るゝ事七八十間、其處でまた急に底知れぬ淵となつて青み湛へてゐるのである。淵の上にはこの數日見馴れて來た嶮崖が散り残りの紅葉を纏うて聳えて居る。見る限り一面の淺瀬が岩を掩うて流れてゐるのはすがすがしい眺めであつた。それが集るともなく一とところに集り、やがて凄じい渦となつて底深い岩の亀裂の間を轟き流れてゆく。岩の間から逆り出た水は直ぐ其處に湛へて、靜かな深みとなり、眞上の岩山の影を宿してゐる。土地の自慢であるだけ、珍しい瀧ではあつた。

吹割の瀧を過ぎるところから雨は霽れてやがて澄み切つた晩秋の空となつた。片品川の流は次第に瘦せ、それに沿うて登る路も漸く細くなつた。須賀川から鎌田村あたりにかゝると、四邊の眺めがいかにも高い高原の趣きを帯びて來た。白々と流れてゐる溪を遙かの下に眺めて辿つてゆくその高みの路ばたはおほく桑畑となつてゐた。その桑が普通見る様に年々に根もとから伐るのでなく、幹は伸びるに任せておいて僅かに枝先を刈り取るものなので、一抱へに近い様な大きな木が畑一面に立ち並んでゐるのである。老梅などに見る様に半ばは幹の朽ちてゐるものもあつた。その大きな桑の木も立ち並んだ根がたにはおほく大豆が植ゑてあつた。既に抜き終つたものが多かつたが、稀には黄いろい桑の落葉の中にかゞんで、枯れ果てたそれを抜いてゐる男女の姿を見ることがあつた。

土地が高いだけ、冬枯れはてた木立の間に見るだけに、その姿がいかにも佻しいものに眺められた。

そろ／＼暮れかけたところ東小川村に入つて、其處の豪家C―を訪うた。昨日下午野國の方へ越えて行かうとする山の上に在る丸沼といふ沼に同家で鱒の養殖をやつてをり、其處に番小屋があり番人が置いてあると聞いたので、その小屋に一晚泊めて貰ひ度く、同家に宛てゝの紹介狀を沼田の人から貰つて來てゐたのであつた。主人は不在であつた。そして内儀から宿泊の許諾を得、番人へ宛てての添手紙をも貰ふ事が出來た。

村を過ぎると路はまた峡谷に入つた。落葉を踏んで小走りに急いでゐると、三つ四つ峰の尖りの集り聳えた空に、望の夜近い大きな月の照りそめてゐるのを見た。落葉木の影を踏んで、幸に迷ふことなく白根温泉のとりつきの一軒家となつてゐる宿屋まで辿り着くことが出來た。

此處もまた極めて原始的な湯であつた。湧き溢れた湯槽には壁の破れから射す月の光が落ちてゐた。湯から出て、眞赤な炭火の山盛りになつた圍爐裡端に坐りながら、何は兎もあれ、酒を注文した。ところが、何事ぞ、無いといふ。驚き惶てゝ何處か近くから買つて來て貰へまいかと頼んだ。宿の子供が兄妹つれで飛び出したが、やがて空手で歸つて來た。更に財布から幾粒かの銅貨銀貨をつまみ出して握らせながら、も一つ遠くの店まで走つて貰つた。

心細く待ち焦れてゐると、急に鋭く屋根を打つ雨の音を聞いた。先程の月の光の浸み込んでゐる

頭に、この氣まぐれな山の時雨がいかにも異様に、佗しく響いた。雨の音と、ツイ縁側のさきを流れてゐる溪川の音とに耳を澄ましてゐるところへぐしよ濡れになつて十二と八歳の兄と妹とが歸つて來た。そして兄はその濡れた羽織の蔭からさも手柄顔に大きな壘を取出して私に渡した。

十月廿七日。

宿屋に酒の無かつた事や、月は射しながら烈しい雨の降つた事がひどく私を寂しがらせた。そして案内人を雇ふこと、明日の夜泊る丸沼の番人への土産でもあり自分の飲み代でもある酒を買つて來て貰ふことを昨夜更けてから宿の主人に頼んだのであつたが、今朝未明に起きて湯に行くに既にその案内人が其處に浸つてゐた。顔の蒼い、眼の険しい四十男であつた。

昨夜の時雨が其儘に氷つたかと思はるゝばかりに、路には霜が深かつた。峰の上の空は耳の痛むまでに冷やかに澄んでゐた。溪に沿うて危い丸木橋を幾度か渡りながら、やがて九十九折の険しい坂にかゝつた。それと共に四邊はひし／＼と立ち込んだ深い森となつた。

登るにつれてその森の深さがいよ／＼明かになつた。自分等のいま登りつゝある山を中心にして、それを圍む四周の山が悉くぎつしりと立ち込んだ密林となつてゐるのである。案内人は語つた。この山々の見ゆる限りはすべてC―家の所有である。平地に均らして五里四方の上に出てゐる、そし

てC―家は昨年この山の木を或る製紙會社に賣り渡した、代價四十五萬圓、伐採期間四十五個年間、一年に一萬圓づつ伐り出す割に當り、現にこの邊に入り込んで伐り出しに従事してゐる人夫が百二十三人に及んでゐる事などを。

なるほど、路ばたの木立の蔭にその人夫たちの住む小屋が長屋の様に建てられてゐるのを見た。板葺の低い屋根で、その軒下には女房が大根を刻み、子供が遊んでゐた。そしてをり／＼溪向うの山腹に大風の通る様な音を立てゝ大きな樹木の倒るゝのが見えた。それと共に人夫たちの擧げる叫び聲も聞えた。或る人夫小屋の側を通らうして不圖立ち停つた案内人が、

『ハ、ア、これだナ。』

と眩くので立ち寄つて見ると其處には三尺角ほどの大きな厚板が四五枚立てかけてあつた。

『これは旦那、楓の板ですよ、この山でも斯んな楓は珍しいつて評判になつてゐるんですがネ、……なるほど、いゝ木理だ。』

撫でつ叩きつして暫く彼は其處に立つてゐた。

『山が深いから珍しい木も澤山あるだらうネ。』

私もこれが楓の木だと聞いて驚いた。

『もう一つ何處とかから途方もねえ黒檜くろひのが出たつて云ひますがネ、みんな人夫頭の飲代になるんで

すよ、會社の人たちア知りやしませんや。」

と嘲笑ふ様に言ひ捨てた。

坂を登り切ると、聳えた峰と峰との間の廣やかな澤に入つた。澤の平地には見る限り落葉樹が立つてゐた。これは楡でこれが山毛櫟だと平常から見知つてゐる筈の樹木を指されても到底信する事の出来ぬほど、形の變つた巨大な老木ばかりであつた。そしてそれらの根がたに堆く積つて居る落葉を見れば、なるほど見馴れた楡の葉であり山毛櫟の葉であるのであつた。

「これが楡、あれが桂、悪ダラ、澤胡桃、アサヒ、ハナ、ウリノ木、……」

事ごとに眼を見張る私を笑ひながら、初め不氣味な男だと思つた案内人は行く／＼種々の樹木の名を倦みもせず教へて呉れた。それから不思議な樹木の悉くが落葉しはてた中に、をり／＼輝くばかりの楓の老木の紅葉してゐるのを見た。おほかたはもう散り果てゝゐるのであるが、極めて稀にさうした楓が、白茶けた他の枯木立の中に立混つてゐるのであつた。

そして眼を擧げて見ると澤を圍む遠近の山の山腹は殆んど漆黒色に見ゆるばかり眞黒に茂り入つた黒木の山であつた。常磐木の森であつた。

「樅、梅、檜、唐檜、黒檜、……、……、……」

と案内人はそれらの森の木を數へた。それらの峰の立ち並んだ中に唯だ一つ白々と岩の穂を見せ

て聳えてゐるのはまさしく白根火山の頂上であらねばならなかつた。

下草の笹のしげみの光りゐてならび寒
けき冬木立かも

あきらけく日のさしとほる冬木立木々
とりどりに色さびて立つ

時知らず此處に生ひたち枝張れる老木
を見ればなつかしきかも

散りつゝもる落葉がなかに立つ岩の苔枯
れはてて雪のごと見ゆ

わが過ぐる落葉の森に木がくれて白根
が嶽の岩山は見ゆ

遅れたる楓ひとつと照るばかりもみぢ
してをり冬木が中に

枯木なす冬木の林ゆきゆきて行きあへ
る紅葉にところ躍らす

この澤をとりかこみなす縦梅の黒木の
山のながめ寒けき
聳ゆるは縦梅の木の古りはてし黒木の
山ぞ墨色に見ゆ
墨色に澄める黒木のとほ山にはだらに
白き白樺ならむ

澤を歩き盡すと其處に端然として澄み湛へた一つの沼があつた。岸から直ちに底知れぬ蒼みを宿して、屈折深い山から山の根を浸して居る。三つ續いた火山湖のうちの大尻沼がそれであつた。水の飽くまでも澄んでゐると、それを圍む四邊の山が墨色をしてうち茂つた黒木の山であるのが、この山上の古沼を一層物寂びたものにしてゐるのであつた。

その古沼に端なく私は美しいものを見た。三四十羽の鴨が羽根をつらねて靜かに水の上に浮んでゐたのである。思はず立ち停つて瞳を凝らしたが、時を経て彼等はまひ立たうとしなかつた。路ばたの落葉を敷いて、飽くことなく私はその靜かな姿に見入つた。

登り來しこの山あひに沼ありて美しき
かも鴨の鳥浮けり

縦黒檜黒木の山のかこみあひて眞澄める沼にあそぶ鴨鳥
見て立てるわれには怯ぢず羽根つらね
浮きてあそべる鴨鳥の群
岸邊なる枯草敷きて見てをるやまひたちもせぬ鴨鳥の群を
羽根つらねるかべる鴨をうつくしと靜けしと見つところかなしも
山の木に風騒ぎつつ山かげの沼の廣みに鴨のあそべり
浮草の流らふごとくひと群の鴨鳥浮けり沼の廣みに
鴨居りて水の面あかるき山かげの沼のさなかに水皺寄る見ゆ
水皺寄る沼のさなかに浮びゐて靜かな

るかも鴨鳥の群
おほよそに風に流れてうかびたる鴨鳥
の群を見つつかなしも
風たてば沼の隈回のかたよりに寄りて
あそべり鴨鳥の群

さらに私を驚かしたものがあつた。私たちの坐つてゐる路下の沼のへりに、たけ二三間の大きさですつと茂り續いてゐるのが思ひがけない石楠木の木であつたのだ。深山の奥の靈木としてのみ見てゐたこの木が、他の沼に葭葦の茂るがごとくに立ち生うてゐるのであつた。私はまつたく事ごとくに心を躍らせずにはゐられなかつた。

沼のへりにおほよそ葦の生ふること此
處に茂れり石楠木の木は
沼のへりの石楠木咲かむ水無月にまた
見に来むぞ此處の沼見に
また來むと思ひつつさびしいそがしき
くらしのなかをいつ出でて來む

天地のいみじきながめに逢ふ時しわが
持ついのちかなしかりけり
日あたりに居りていこへど山の上の凍
みいちじるし今はゆきなむ

昂奮の後のわびしい心になりながら沼のへりに沿うた小徑の落葉を踏んで歩き出すと、程なくその沼の源とも云ふべき、清らかな水がかなりの瀬をなして流れ落ちてゐる處に出た。そして三四十間その瀬について行くとまた一つの沼を見た。大尻沼より大きい、丸沼であつた。

沼と山の根との間の小廣い平地に三四軒の家が建つてゐた。いづれも檜皮葺の白々としたもので、雨戸もすべてうす白く閉ざされてゐた。不意に一疋の大きな犬が足許に吠えついて來た。胸をときめかせながら中の一軒に近づいて行くと、中から一人の六十近い老爺が出て來た。C家の内儀の手紙を渡し、一泊を請ひ、直ぐ大圍爐裡の榎火の側に招ぜられた。

番人の老爺が唯だ一人居ると私は先に書いたが、實はもう一人、棟續きになつた一室に丁度同じ年頃の老人が住んでゐるのであつた。C家がこの丸沼に紅鯉の養殖を始めると農商務省の水産局からC一家に頼んで其處に一人の技手を派遣し、その養殖状態を視る事になつて、もう何年かたつてゐる。老人はその技手であつたのだ。名をM氏といひ、桃の様に尖つた頭には僅かにその下部

に丸く輪をなした毛髪を留むるのみで、つる／＼に禿げてゐた。

言葉少なな番人は暫く楷火を焚き立てた後に、私に釣が出来るかと言ひました。大抵釣れるつもりだと答へると、それでは沼で釣つて見ないかと言ふ。實はこちらから頼み度いところだったので、ほんとは釣つてもいゝかと言ふと、いゝどころではない、晩にさしあげるものがなくて困つてゐたところだからなるだけ澤山釣つて来いといふ。子供の様に嬉しくなつて早速道具を借り、蚯蚓を掘つて飛び出した。

『ドレ、俺も一疋釣らして貰ふべい。』

案内人もつゞいた。

小舟にさをさして、岸寄りの深みの處にゆき、糸をおろした。いつとなく風が出て、日はよく照つてゐるのだが、顔や手足は痛いまでに冷えて来た。沼をめぐるつてゐるのは例の黒木の山である。その黒い森の中にとろ／＼雪白な樹木の立ち混つてゐるのは白樺の木であるさうだ。風は次第に強く、やがてその黒木の山に薄らかに雲が出て来た。そして驚くほどの速さで山腹を走つてゆく。あとからあとからと濃く薄く現はれて来た。空にも生れて太陽を包んでしまつた。

細かな水皺の立ち渡つた沼の面はたゞ冷やかに輝いて、水の深さ浅さを見ることも出来ぬ。漸く心のせきたつたころ、ぐいと糸が引かれた。驚いて上げてみると一尺ばかりの色どり美しい魚がか

かつて来た。私にとつては生れて初めて見る魚であつたのだ。惶てゝ餌を代へておろすと、またかかつて。三疋四疋と釣れて来た。

『旦那は上手だ。』

案内人が側で呟いた。どうしたのか同じところと同じ餌を入れながら彼には更に魚が寄りぬのであつた。一疋二疋とまた私には釣れて来た。

『ひとつ俺は場所を變へて見よう。』

彼は舟から降りて岸づたひに他へ釣りに行つた。

何しろ寒い。魚のあぎとから離さうとしては釣を自分の指にさし、餌をさゝうとしてはまた刺した。すっかり指さきが凍えてしまつたのである。あぎとの血と自分の血とで掌が赤くなつた。

丁度十疋になつたを折に舟をつけて家の方に歸らうとすると一疋の魚を提げて案内人も歸つて来た。三疋を彼に分けてやると禮を言ひながら木の枝にそれをさして、やがて沼べりの路をもと来た方へ歸つて行つた。

洋燈より楷火の焰のあかりの方が強い様な爐端で、私の持つて来た一升壺の開かれた時、思ひもかけぬ三人の大男が其處に入つて来た。〇―家の用でこゝよりも山奥の小屋へ黒檜の板を挽きに入り込んでゐた木挽たちであつた。用が済んで村へかへるのだが、もう暮れたから此處へ今夜寝させ

て呉れと云ふのであつた。迷惑がまぎ／＼と老番人の顔に浮んだ。昨夜の宿屋で私はこの老爺の酒好きな事を聞き、手土産として持つて来たこの一升壺は限りなく彼を喜ばせたのであつた。これは早や思ひがけぬ正月が来たと云つて、彼は顔をくづして笑つたのであつた。そして私がM―老人を呼ばうといふをも押しとめて、たゞ二人だけでこの飲料をたのしまうとしてゐたのであつた。其處へ彼の知合である三人の大男が入り込んで来て同じく爐端へ腰をおろしたのだ。

同じ酒すきの私には、この老爺の心持がよく解つた。幾日か山の中に寝泊りして出て来た三人が思ひがけぬこの匂ひの煮え立つのを嗅いで胸をときめかせてゐるのもよく解つた。そして此處にものゝ五升もあつたらばなア、と同じく心を騒がせながら咄嗟の思ひつきで私は老爺に言つた。

『お爺さん、このお客さんたちにも一杯御馳走しよう、そして明日お前さんは僕と一緒に湯元まで降りやうぢやアないか、其處で一晩泊つて存分に飲んだり喰べたりしませうよ。』

と。

爺さんも笑ひ、三人の木挽たちも笑ひこぼした。僅かの酒に、その場の氣持からか、五人ともほと／＼に酔つてしまつた。小用にと庭へ出て見ると、風は落ちて、月が氷の様に沼の直上に照つてゐた。山の根にはしつとりと濃い雲が降りてゐた。

十月廿八日。

朝、出がけに私はM―老人の部屋に挨拶に行つた。此處には四斗樽ほどの大きな圓い金屬製の暖爐が入れてあつた。その側に破れ古びた洋服を着た老人は煙管をとつてゐた。私が今朝の寒さを言ふと、机の上の日記帳を見やりながら、

『室内三度、室外零度でありましたからなア。』

といふ發音の中に私は彼が東北生れの訛を持つことを知つた。そして一つ二つと話すうちに、自身の水産學校出身である事を語つて、

『同じ學校を出ても村田水産翁の様になる人もあり、私の様に斯んな山の中で雪に埋れて暮すのもありますからなア。』

と大きな聲で笑つた。雪の來るのももう程なくであるさうだ。一月、二月、三月となると全くこの部屋以外に一步も出られぬ朝夕を送る事になるといふ。

老人は立ち上つて、

『鱒の人工孵化をお目にかませうか。』

と板圍ひの一棟へ私を案内した。其處には幾つとなく置き並べられた厚板作りの長い箱があり、すべての箱に水がさら／＼と寒いひゞきを立て、流れてゐた。箱の中には孵へされた小魚が蟲の様

にして泳いでゐた。

昨夜の約束通り私が老番人を連れてその沼べりの家を出かけようとすると、急にM―老人の部屋の戸があいて老人が顔を出した。そして叱りつける様な聲で、

『××』

と番人の名を呼んで、

『今夜は歸らんといかんぞ、いゝか。』

と言ひ捨て、戸を閉ぢた。

番人は途々M―老人に就いて語つた。あれで學校を出て役人になつて何十年たつか知らんが、いまだに月給はこれ／＼であること、然し今は〇―家からも幾ら／＼を貰つてゐること、酒は飲まず、いゝ物はたべず、この上なしの吝嗇だからたゞ溜る一方であること、俺と一緒には何彼と損がゆくところからあゝして自分自身で煮炊をしてたべてゐる事などを。

丸沼のへりを離れると路は昨日終日とほく眺めて來た黒木の密林の中に入つた。樅、栂、などすべて針葉樹の巨大なものがはてしなく並び立つて茂つてゐるのである。ことに或る場所では見渡す限り唐繪のみの茂つてゐるところがあつた。この木をも私は初めて見るのであつた。葉は樅に似、幹は杉の様に眞直ぐに高く、やゝ白味を帯びて聳えて居るのである。そして賣り渡された四十五萬

圓の金に割り當てると、これら一抱二抱の樹齡もわからぬ大木老樹たちが平均一本、六錢から七錢の値に當つてゐるのださうだ。日の光を遮つて鬱然と聳えて居る幹から幹を仰ぎながら、私は涙に似た愛惜のこゝろをこれらの樹木たちに覚えざるを得なかつた。

長い坂を登りはてるとまた一つの大きな蒼い沼があつた。菅沼と云つた。それを過ぎてやゝ平らかな林の中を通つてゐると、端なく私は路ばたに茂る何やらの青い草むらを噴きあげてむく／＼と湧き出てゐる水を見た。案内人に訊ねると、これが菅沼、丸沼、大尻沼の源となる水だといふ。それを聞くと私は思はず躍り上つた。それらの沼の水源と云へば、とりも直さず片品川、大利根川の一つの水源でもあらねばならぬのだ。

ばしや／＼と私はその中へ踏みこんで行つた。そして切れる様に冷たいその水を掬み返し／＼幾度となく掌に掬んで、手を洗ひ顔を洗ひ頭を洗ひ、やがて腹のふくる／＼までに貪り飲んだ。

草鞋を埋むる霜柱を踏んで、午前十時四十五分、終に金精峠の絶頂に出た。眞向ひにまるやかに高々と聳えてゐるのは男體山であつた。それと自分の立つてゐる金精峠との間の根がたに白銀色に光つて湛へてゐるのは湯元湖であつた。これから行つて泊らうとする湯元温泉はその湖岸であらねばならぬのだ。ツイ右手の頭上には今にも崩れ落つるばかりに見えて白根火山が聳えてゐた。男體山の右寄りにやゝ開けて見ゆるあたりは戰場ヶ原から中禪寺湖であるべきである。今までは毎日毎

日おほく溪間へく、山奥へくくと奥深く入り込んで来たのであつたが、いまこの分水嶺の峰に立つて眺めやる東の方は流石に明るく開けて感ぜらるゝ。これからは今までと反対に廣く明るいその方角へ向つて進むのだとおもふと、自づと心の軽くなるのを覺えた。

背伸びをしながら其處の落葉の中に腰をおろすと、其處には群馬栃木の縣界石が立つてゐた。そして四邊の樹木は全く一葉をとゞめず冬枯れてゐる。その枯れはてた枝のさきぐくには、既に早やうす茜色に氣色ばんだ木の芽が丸みを見せて萌えかけてゐるのである。深山の木は斯うして葉を落とす直ちに後の新芽を宿して、さうして永い間雪の中に埋もれて過し、雪の消ゆるを待つて一度に萌え出づるのである。

其處に来て老番人の顔色の甚しく曇つてゐるのを私は見た。どうかしたかと訊くと、旦那、折角だけれど俺はもう湯元に行くのは止めますべえ、といふ。どうしてだ、といぶかると、これで湯元まで行つて引返すところになるといま通つて来た路の霜柱が解けてゐる、その山坂を酒に酔つた身では歩くのが恐ろしいといふ。

『だから今夜泊つて明日朝早く歸ればいゝぢやないか。』

『やつぱりさうも行きましたねエ、いま出かけにもあゝ言ふとりましたから……』

涙ぐんでゐるのかとも見ゆるその澁んだ眼を見てゐると、しみぐ私はこの老爺が哀れになつた。

『さうか、なるほどそれもさうかも知れぬ、……』

私は財布から紙幣を取り出して鼻紙に包みながら、

『ではネ、これを上げるから今度村へ降りた時に二升なり三升なり買つて来て、何處か戸棚の隅にでも隠して置いて獨りで永く楽しむがいゝや。では御機嫌よう、左様なら。』

さう言ひ捨つると、彼の挨拶を聞き流して私はとつとと掌を立てた様な急坂を湯元温泉の方へ駆け降り始めた。

13490

著者略歴

明治十八年宮崎縣生に於て早大卒業。中學在。明
治二十九年三月。昭。す導指を遺後。し宰主を
。五十四年

若山牧水
みかみな紀行

養徳叢書
(35)



みなかみ紀行

定價六〇圓

昭和二十三年四月五日印刷
昭和二十三年四月十日發行

著者
若山牧水

發行者
岡島善次

印刷製本者
若林吉郎兵衛

京都府右京區太秦上刑部町一〇
大日本印刷株式會社京都工場

發行所 株式會社 養徳社

本社 奈良縣丹波市町川原城
振替口座 京都二五六四八番
京都府中京區藥師通室町西人

配給元 日本出版配給株式會社

養徳叢書

終戦後の日本は嵐の眞只中に立つてゐる。私達の前に緊急に解決せねばならぬ幾多の深刻なる社会問題が山積してゐる。一として日本の運命を決する重大問題ならざるはない。これが解決には眞に民族の要する正しき政治政策の緊要は言を俟たざるどころである。然しそれのみではない、更にこれを裏づけるに健全なる民族の魂の育成が如何に大切であるかを見逃すことは出来ぬ。

實際今日ほゞ我々にまつて、潤ひ豊かな心懐と、高潔なる教養と、そして深い思慮とを必要とする秋はない。

本社が現下幾多の出版隘路を克服して敢て本叢書の刊行を企圖せし所以は茲にある。即ち、錢上の意圖に添はんが爲め本叢書編輯に際しては飽くまで慎重審議を期し、日本民族の心を豊かにし高い教養の地盤となり、人生に對する深い理解と智慧を興へ、そのあり方について正しい示唆を提供するものを幾多の作品中より厳選して世に送ることにした。幸にして新日本建設の基礎工作として貢獻するあらは小社の歡びこれに過ぐるものはない。大方の御支援御協力を切にお願ひする次第である。

- | | |
|---------------------|-----------------------|
| 1 高濱 虚子 斑鳩 物語 語再版中 | 23 田部 重治 山ゆく心 三〇〇 |
| 2 中谷・安藤 科学隨筆 選品 切 | 24 佐藤 春夫 新秋の記 品 切 |
| 3 水上瀧太郎 父となる記 // | 25 宮城 道雄 軒の雨 品 切 |
| 4 芥川・小川 童話名作選 再版中 | 26 岡本かの子 河明り 三五〇 |
| 5 鈴木三重吉 古事記物語 語品 切 | 27 森 鷗外 智慧 袋 三〇〇 |
| 6 泉 鏡 花 照葉 狂言 三〇〇 | 28 岸田 國士 チロルノ秋 七〇〇 |
| 7 岡本かの子 老妓 抄 三〇〇 | 29 小堀 杏奴 母への手紙 七〇〇 |
| 8 幸田 露伴 土偶 木偶 品 切 | 30 幸田 露伴 霧護精舎 雜筆 三〇〇 |
| 9 森 鷗外 栗山大膳 // | 31 徳田 秋豊 假装人物 二〇〇 |
| 10 川端 康成 現代名歌選 三〇〇 | 32 安藤 東野 歐洲の雀 その他 六〇〇 |
| 11 吉井 勇 選現代名歌選 三〇〇 | 33 夏目 漱石 私の個人主義 未定 |
| 12 横光 利一 雪解品 切 | 34 三宅 正太郎 嘘の行方 五〇〇 |
| 13 深田 久彌 津輕の野づら 八〇〇 | 35 若山 牧水 みななみ紀行 論未定 |
| 14 武者小路實篤 愛と死 再版中 | 39 幸田 露伴 修省 論未定 |
| 15 太宰 治 晩年 八〇〇 | |
| 16 内田 百閒 私の先生 三〇〇 | |
| 17 龜井勝一郎 人間教育 三〇〇 | |
| 18 久保田万太郎 あぶらでり 二〇〇 | |
| 19 吳 清 源莫愁 八〇〇 | |
| 20 堀 辰雄 曠野抄 三〇〇 | |
| 21 結城 哀草 果農村風土記 九〇〇 | |
| 22 室生 犀星 作家の手記 二〇〇 | |

續刊

- 武者小路實篤 第三の隱者の運命
 三好 達治 わが愛唱
 梶井基次郎 愛撫
 泉 鏡 花 祇園物語
 森 鷗外 鷄園物語
 尾崎 紅葉 青葡萄
 丸岡 明 やくまな犬の物語

終

